

セーフコミュニティの可能性
—いのちを大切にするまちづくり—

菊池いづみゼミナール

09E004	池亀紗貴	09E005	池田貴浩
09E009	袁 楽輝	09E017	小川成美
09E019	笠原由佑	09E028	齋藤拓也
09E038	高橋祐太	09E039	多田亮太
09E057	丸山夏樹	09E059	山崎翔子
10E027	齋藤郁美	10E036	菅原伸悟
10E038	高野憲和	10E039	高橋将貴
10E041	豊岡 丈	10E049	前山倫世
10E053	山倉恵莉		

目 次

- 1 研究の目的と意義（丸山夏樹）
 - 1.1 研究の目的
 - 1.2 研究の意義
 - 1.2.1 地域福祉の推進
 - 1.2.2 波及効果——社会保障費の抑制
 - 1.3 セーフコミュニティとは
 - 1.3.1 セーフコミュニティの展開
 - 1.3.2 日本における取り組みの状況

- 2 一人暮らし高齢者の課題（高橋祐太）
 - 2.1 一人暮らし高齢者の状況
 - 2.1.1 一人暮らし高齢者の現状
 - 2.1.2 一人暮らし高齢者の生活課題
 - 2.2 孤独死問題の顕在化
 - 2.2.1 「孤独死」とは
 - 2.2.2 孤独死への対策
 - 2.3 長岡市の取り組み
 - 2.3.1 長岡市の現状
 - 2.3.2 見守り、訪問活動について
 - 2.3.3 「シルバーささえ隊」について

- 3 研究の全体像と方法（袁 楽輝）
 - 3.1 研究の全体像
 - 3.2 研究の方法
 - 3.2.1 調査の枠組み
 - 3.2.2 調査の方法
 - 3.2.3 調査の概要
 - 3.3 回答者の特性と分析の視点
 - 3.3.1 回収状況と結果
 - 3.3.2 回答者の基本属性
 - 3.3.3 分析の視点

- 4 「高齢者（一人暮らし）の不慮の事故等に関する実態調査」分析結果
 - 4.1 結果と考察(1) 一人暮らし高齢者の家庭内の事故（齋藤拓也）
 - 4.1.1 家庭内の事故の実態
 - 4.1.2 家庭内の事故対策
 - 4.1.3 考察

- 4.2 結果と考察(2) 一人暮らし高齢者の外出時の事故 (山崎翔子)
 - 4.2.1 外出時の事故の実態
 - 4.2.2 外出時の事故対策
 - 4.2.3 考察
- 4.3 結果と考察(3) 一人暮らし高齢者の近所づきあいと地域交流 (小川成美)
 - 4.3.1 近所づきあい
 - 4.3.2 地域交流
 - 4.3.3 考察
- 4.4 結果と考察(4) 一人暮らし高齢者の日常生活と孤独死の不安 (池亀紗貴)
 - 4.4.1 日常生活
 - 4.4.2 孤独死の不安
 - 4.4.3 考察
- 5 実践活動の展開と成果 (笠原由佑)
 - 5.1 「セーフコミュニティ」の普及啓発活動
 - 5.1.1 活動の概要
 - 5.1.2 セーフコミュニティの観点からの成果
 - 5.2 「すこやか・ともしびまつり 2012」ボランティアスタッフ参加
 - 5.2.1 活動の概要
 - 5.2.2 セーフコミュニティの観点からの成果
 - 5.3 「シルバーささえ隊」の普及啓発活動
 - 5.3.1 活動の概要
 - 5.3.2 セーフコミュニティの観点からの成果
 - 5.4 「栖吉地区地域福祉懇談会」(地域福祉連携会議)参画
 - 5.4.1 活動の概要
 - 5.4.2 セーフコミュニティの観点からの成果
- 6 セーフコミュニティの可能性 (多田亮太)
 - 6.1 提案——いのちを大切にすまらづくり
 - 6.1.1 家庭内の事故
 - 6.1.2 外出時の事故
 - 6.1.3 近所づきあいと地域交流
 - 6.1.4 日常生活と孤独死の不安
 - 6.2 今後の課題

資料 調査票と単純集計結果/参考文献/謝辞 (池田貴浩)

調査結果の集計・分析：斎藤郁美、菅原伸悟、高野憲和、高橋将貴、豊岡 丈、前山倫世、
山倉恵莉

編集：池田貴浩

1 研究の目的と意義

1.1 研究の目的

スウェーデンのファルショッピングという地方都市で発祥した住民参加のまちづくりは、日常生活の安全を確保することによって人々の大切ないのちをまもる「セーフコミュニティ」活動として、1982年にストックホルムで開催された国際会議において公式に誕生した。その後、世界中に広がり、日本でも取り組みが始まっている。このセーフコミュニティの考え方に基づいて、本研究では、長岡市在住の一人暮らしの高齢者を対象として、不慮の事故などによる外傷の要因を社会調査によってつきとめ、いのちを大切にすまちづくりを進めるための予防策を提案する。

なお、本研究は、「セーフコミュニティへの出発——いのちを大切にすまちづくり」として昨年度に取り組んだ活動を発展させたものである。昨年度の研究では、子ども（保護者）と高齢者の不慮の事故について、その予防策の提案と課題をまとめた。高齢者施設・小学校・幼稚園・保育園などで実施した個別面接調査の分析結果であった。その中で、長岡地域の特性を踏まえ、雪おろしのボランティアなど多くの人の参加が望まれる活動を企画することなどが提案としてあがった。また、課題として、不慮の事故の事例を積み上げていくことや、環境面や個人の要因に着目し、より深い調査の必要性を指摘した。そこで、今年度は、対象を一人暮らしの高齢者に絞り、去年の研究内容を発展させ、「セーフコミュニティの可能生」を探ることを目的とした。

1.2 研究の意義

本研究の意義は、「地域福祉の推進」と波及効果としての「社会保障費の抑制」の観点からまとめると次のとおりである。

1.2.1 地域福祉の推進

一人暮らしの高齢者が抱える問題は様々である。特に、近年、社会問題となっている孤独死や、セーフコミュニティの対象でもある「心の健康」に着目すると、うつ病などが大きな問題であろう。その他にも一人暮らし高齢者の場合では、外出時や家庭内での不慮の事故が発生しやすくなり、また、事故が発生した場合にも対処がしにくくなる。そういった問題を未然に防ぐために、長岡地域の住民がお互いを思いやり、力を合わせて安全で安心なまちづくりを目指したセーフコミュニティを形成していくことで、ひいては長岡地域の活性化につながっていく。

1.2.2 波及効果——社会保障費の抑制

また、本研究の意義は、波及効果として、少子高齢化の進展によって大きな課題となっている社会保障費の抑制に寄与することを指摘できる。

そこで、長岡市の社会保障関係費について確認しておくことにする。

(1)長岡市の歳出状況

まず、昨年同様、社会保障費を医療・保健・介護の分野に着目し、平成 22 年度特別会

計の歳出額をしてみる（図表 1-1）。国民健康保険は 25,152,646 千円、老人保健 33,671 千円、介護保険 21,828,756 千円、診療所 455,456 千円、後期高齢者医療 2,265,360 千円であった。総額にすると、およそ 497 億円になる。平成 21 年度と比べてみると、およそ 479 億円から 19 億円近く増加した。個別の増加額は、国民健康保険 541,216 千円、老人保健 21,872 千円、介護保険 1,339,354 千円であった。なお、診療所は 5,030 千円、後期高齢者医療は 29,987 千円減少した。

図表 1-1 特別会計決算（平成 22 年度）

単位 千円

区 分	平成21年度		平成22年度	
	歳入額	歳出額	歳入額	歳出額
国民健康保険会計	24,811,371	24,611,430	25,366,403	25,152,646
国民健康保険寺泊診療所会計	108,420	107,916	105,686	105,686
老人保健会計	43,949	11,799	33,671	33,671
介護保険会計	20,691,844	20,489,402	22,019,644	21,828,756
診療所会計	460,486	460,486	455,456	455,456
と畜場会計	359,006	359,005	361,675	361,649
下水道会計	17,644,759	17,644,033	13,535,210	13,534,686
浄化槽整備会計	53,626	53,625	46,892	46,891
簡易水道会計	228,020	228,020	398,684	397,684
後期高齢者医療会計	2,302,153	2,295,347	2,271,231	2,265,360
駐車場会計				

- 1 平成19年度から駐車場会計を一般会計に編入しました。
- 2 平成20年度から後期高齢者医療会計を追加しました。

（出所）長岡市（2012a）。

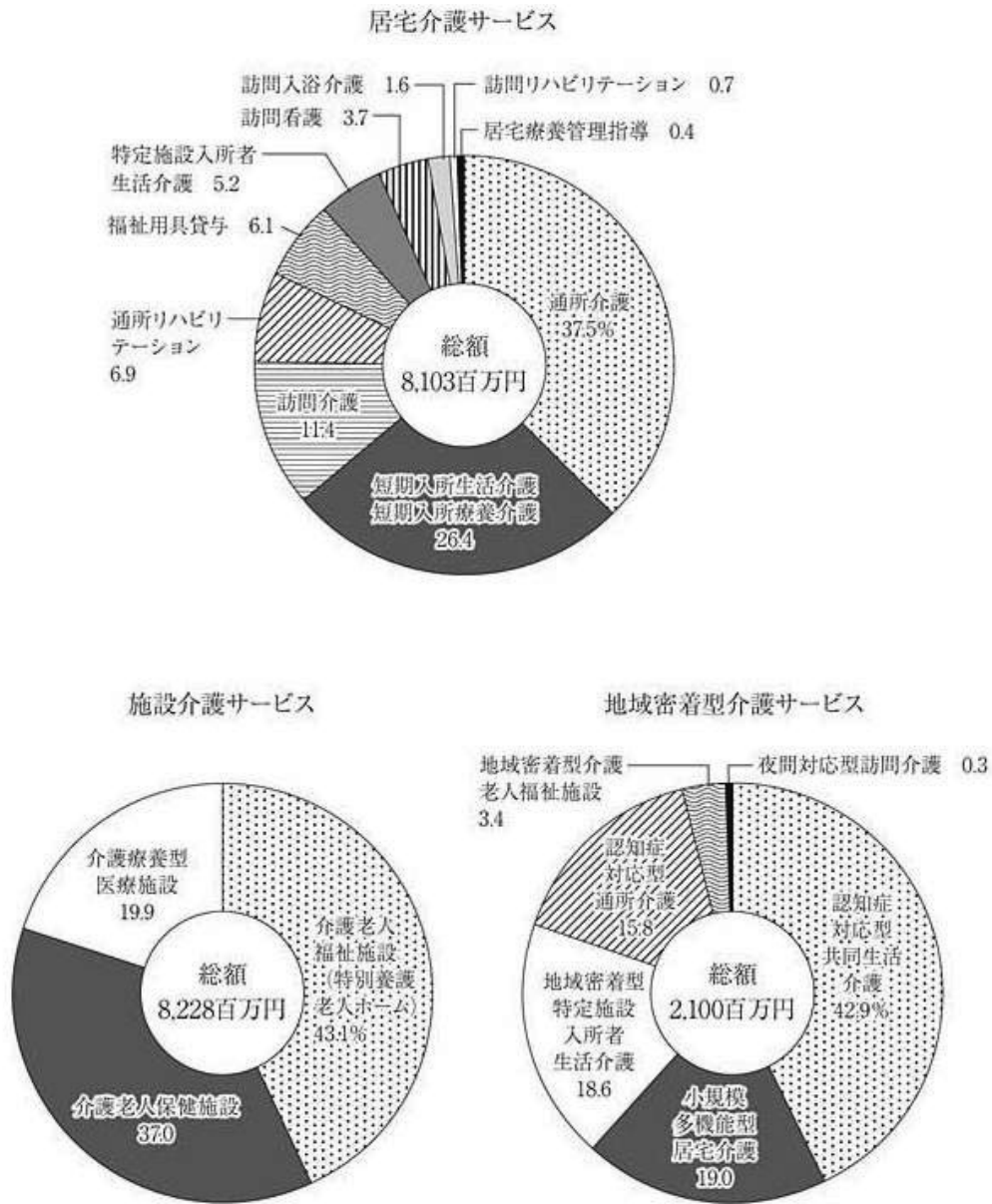
(2)長岡市の介護保険サービスの給付状況

平成 22 年度の介護保険サービスの給付状況は、図表 1-2 のとおりである。以下、平成 21 年度の給付総額と比較してみる。居宅介護サービスが 578 百万円増の総額 8,103 百万円、施設介護サービス費は 322 百万円増の総額 8,228 百万円、地域密着型介護サービス費は、396 百万円増の総額 2,100 百万円となっている。昨年度に指摘したように、今後、高齢者人口の増加によって給付費のさらなる増加が見込まれることから、給付費を抑制するために、不慮の事故を予防するセーフコミュニティの取り組みは意義あるものと言える。

(3)長岡市の 国民健康保険の給付状況

最後に、国民健康保険の給付状況をしてみる。図表 1-3 のとおり、費用額は平成 18 年度から年々増え続けている。平成 22 年度には 16,994,279 千円となり、前年の 21 年度と比

図表 1-2 介護保険サービス給付状況（平成22年度）



(出所) 長岡市(2012a)。

図表 1-3 国民健康保険療養の給付（診療費）給付状況

年 度	件 数	費用額	受診率 (延)	1件当たり日数	1件当たり費用額	1人当たり費用額
	件	千円	%	日	円	円
平成18年度	648,595	14,532,190	967.520	2.13	22,406	216,779
19	676,962	15,511,958	1,002.728	2.12	22,914	229,766
20	679,799	15,926,157	1,017.511	2.08	23,428	238,380
21	685,720	16,485,474	1,015.686	2.04	24,041	244,182
22	670,379	16,994,279	981.019	2.09	25,351	248,691

平成21年度は、平成22年3月31日合併後の数値です。

資料 国保年金課

(出所) 長岡市(2012a)。

べると、508,805千円増加した。また、国民健康保険の給付の件数を見てみると、平成18年度から21年度まで増加しているが、22年度には670,379件と、21年度より15,341件減少している。とはいえ、費用額は前述のとおり増加しており、介護保険サービス給付のところで指摘したとおり、セーフコミュニティ活動の推進によって、不慮の事故を防ぐことで、総費用を抑えることが期待できる。

1.3 セーフコミュニティとは

ここでは、「セーフコミュニティ」の概念を明確にするために、セーフコミュニティの誕生から国連による取り組みを概観したうえで、日本国内の動向について、昨年度の報告書（菊池いづみゼミ 2012）をもとにまとめていく。

1.3.1 セーフコミュニティの展開

セーフコミュニティとは、事故やけがは偶然に起きるものではなく、予防することができるという理念のもと、行政と地域住民など多くの主体の協働により、すべての人々が安心して安全に暮らすことができるまちづくりを進めるものである（京都府 2011）。セーフコミュニティのモデルとなったのは、スウェーデンの地方都市の外傷予防活動であり、住民の手で安心・安全な社会をつくろうという運動の中で生まれた。

(1) 「セーフコミュニティ」モデルの誕生から認証制度の創設

スウェーデンのファルショッピングという町で、1975年に外傷予防活動が開始され、1987年には外傷の頻度や原因などを記録し、予防するプログラムが開始された。ファルショッピングでは、このプログラムによって、その後3年間で、職場や家庭、道路での外傷件数が約30%減少するという成果を出した。これがモデルとなり、1989年に、スウェーデンのストックホルムで開催された第1回事故・外傷防止世界大会でセーフコミュニティの概念が公式に誕生することになる。同年に、WHOセーフコミュニティ協働センター（WHO Collaborating Center on Community Safety Promotion）が設置され、安全・安心に関する認証制度もスタートした。

都市（自治体）が、セーフコミュニティの認証を受けるには、WHOセーフコミュニティ協働センターが提示している6つの認証基準をクリアした時点で申請書を提出し、認められればセーフコミュニティとして認証される。その6つの基準は以下のとおりである（京都府 2011）。

1. 安全に関わる分野の横断的な推進体制を構築し、住民との協働に基づく活動基盤の保持。
2. すべての年齢層、性別、環境及び状況をカバーする長期的かつ持続可能なプログラムの保持。
3. ハイリスクグループ（高い外傷受傷率を示す層）や環境を対象とするプログラム及び被害を受けやすい弱者グループ（高齢者や子ども、障害者等）のための安全を促進するプログラムの保持。
4. 外傷の頻度と原因を記録するプログラムを持つこと。
5. プログラム、プロセス、変化の諸効果を測定するための評価基準を持つこと。
6. 国内外のセーフコミュニティのネットワークに継続的に参加していること。

(2) 国連による取り組みの推進

セーフコミュニティの理念に基づく考え方は、1946年に採択されたWHO憲章にみつけることができる。「健康」とはそれまでのように「病気ではないこと」とどまらず「身体的・精神的・社会的に良好な状態にあり、単に病気や虚弱だけではない」と定義された。この政策を推進する中で、治療を中心としたものから、予防や健康の保持、増進を重点に置いたセーフコミュニティの基礎となる概念が提示された。そして、1974年のラロンド報告、1977年のアルマ・アタ宣言、1986年のオタワ憲章へと展開し、健康政策は、社会環境への働きかけを重視した阻害要因を予防する考え方へとシフトしていった。

なお、国連によるセーフコミュニティ推進の詳細、WHOセーフコミュニティ協働センターの設立とその役割の詳細などは、白石陽子（2007a、2007b）を参照してほしい。

(3) セーフコミュニティ活動が対象とする外傷

セーフコミュニティ活動が対象とする外傷を確認しておくことと図表 1-4 のとおりである。

図表 1-4 セーフコミュニティ活動が対象とする外傷

		子ども	青少年	成年	高齢者
生活環境 (不慮の事故)	家庭	風呂でのでき水 やけど	やけど	火事、転倒	転倒
	学校	事故、けが	事故、けが		
	職場		アルバイト先 での事故	事故労働 環境問題	作業中のけが
	余暇	公園でのけが プールでのでき水	運転中のけが	レジャーの 事故	転倒
	交通	登下校の事故	自転車の事故 登下校の事故	バイク 車の事故	歩行中の転倒
意図的要因	暴力	児童虐待	非行 家庭内暴力	DV	高齢者虐待
	自殺	いじめ	いじめ	心の健康	心の健康

(出所)京都府（2011）。

1.3.2 日本における取り組みの状況

日本で初めてのセーフコミュニティ認証都市となった京都府亀岡市(亀岡市 2007, 2011a, 2011b; 京都府 2011)ならびに、亀岡市の次に認証された青森県十和田市(十和田市 2011)の認証までの経過をまとめる。最後に、最近の日本の動向についてみておくことにする。

(1) 亀岡市について

亀岡市では 2001 年度から、「学校安全メール」や安全歩行エリアの指定、ヒヤリ・ハットの作成ほか数々の施策に取り組み、安心・安全で心豊かなまちづくりを進めた結果、各外傷に関する指標の多くが減少し、2003 年度以降に取り組みの成果が現れてきていた。

そして、京都府からの働きかけで2006年7月に日本初のセーフコミュニティのメンバーになることを宣言し、2年後の2008年3月1日に日本初（世界では132番目）となるWHOセーフコミュニティ協働センターによる国際認証を取得した。

なお、亀岡市は、2012年11月に再認証が内定した（亀岡市 2013）。これも国内初である。

(2) 十和田市について

十和田市のセーフコミュニティ認証への取り組みは、2005年10月にはじまった。十和田市は充実した保健活動の実績があり、ボランティア意識の高い市民が多かったことがセーフコミュニティを推進させた。保健部門を中心に一般市民を巻き込んだボランティアによる討論会が定期的開催され、認証の可能性や部門横断的な取り組みについて検討された。そして、2007年8月にセーフコミュニティ検討委員会、10月には市役所内にプロジェクトチームを結成し、2008年3月に「十和田市セーフコミュニティ推進協議会」が設置された。こうした取り組みの結果、2009年8月28日に、日本では2番目（世界では159番目）となるセーフコミュニティに認証された。

(3) 近年の動向

日本において、セーフコミュニティの取り組みを支援している日本セーフコミュニティ推進機構(2013)によれば、現在、亀岡市、十和田市に続いて4つの自治体がセーフコミュニティの認証を受けている。認証順にあげると、神奈川県厚木市、長野県箕輪町、東京都豊島区、長野県小諸市である。以下、順に見ていく。

十和田市に続き、国内で3番目（世界で223番目）に認証されたのが神奈川県厚木市である。厚木市は、2008年1月にセーフコミュニティを宣言し、2009年4月に策定した総合計画にセーフコミュニティの推進を明記した（内閣府 2013b）。厚木市は自殺予防、交通安全をはじめ、子どもや高齢者といったハイリスクグループに視点を置くとともに、市の特徴として自転車安全、体感治安不安感の改善、企業を含む労働安全などの活動に取り組んできた。そして、2010年3月にアジア地域WHOセーフコミュニティ認証センターに「認証申請書」を提出し、2010年11月にセーフコミュニティ認証を取得した（厚木市 2013）。

続いて、4番目が長野県上伊那郡の箕輪町である。箕輪町のセーフコミュニティ認証への取り組みは、2009年12月の宣言によって開始された（箕輪町 2013）。翌年の2010年2月に「箕輪町セーフコミュニティ推進協議会」を立ち上げ、4月には、「セーフコミュニティ韓国水原国際大会」に参加し、全世界に向けて「安心安全のまち・箕輪」をアピールした。また、7月に「箕輪町セーフコミュニティフォーラム」を開催し、セーフコミュニティについて市民の理解を深めている。そして、2011年12月、セーフコミュニティ認証申請証を提出し、2012年5月にWHO認証センターからセーフコミュニティの認証取得をした。町村では国内で初めての認証自治体となった。

5番目に認証されたのが東京都豊島区であり、2010年2月にセーフコミュニティへの取り組みを宣言した（豊島区 2013a）。2011年6月には、「としま安全・安心フェスタ2011」を開催し、「区民一人ひとりが『安全・安心』を自らの問題として見直すきっかけとなり、行政、地域、学校、事業者、研究者等が協働して安全・安心創造都市”としま”を目指す」ことを確認した（豊島区 2013b）。同年12月にセーフコミュニティ認証申請書を提出し、翌年の

2012年5月にセーフコミュニティの認証取得をした。

そして、6番目（世界で297番目）には長野県小諸市が認証された。小諸市は、2009年に当時の市長がセーフコミュニティ認証取得に向け研究することを記者発表し、2010年3月に、セーフコミュニティに取り組むことを正式に宣言した（小諸市 2013a）。小諸市では、不慮の事故に関する地域診断を踏まえて優先的に取り組む外傷の取組対象を設定し、対策委員会を設置して予防活動を進めてきた（小諸市 2013b）。また、セーフコミュニティについて市民と一緒に理解を深めていくとともに、認証取得に向けての取り組み状況や地域活動事例等を伝えるために、「かわら版 みんなで目指すセーフコミュニティこもろ」を月に1度発行するなどしている（小諸市 2013c）。そして、2012年3月に認証取得のための申請書を提出し、同年12月にセーフコミュニティとして認証された。

以上の6つの自治体がセーフコミュニティとして認証されている。そして、神奈川県横浜市栄区、大阪府松原市、福岡県久留米市、埼玉県北本市、滋賀県甲賀市、埼玉県秩父市が現在セーフコミュニティ認証に向けて活動中である（日本セーフコミュニティ推進機構 2013）。

2 一人暮らし高齢者の課題

本章では、一人暮らし高齢者の課題を明らかにしていく。第1節で、はじめに国の実施した調査をもとに、日本社会における一人暮らし高齢者の現状を把握する。その後、一人暮らし高齢者の生活上の問題について取り上げる。つづく第2節で、一人暮らし高齢者にとって深刻な問題となる「孤独死」について概要をまとめ日本全国で取り組まれている対策を見ていく。そして第3節で、長岡市での一人暮らし高齢者の現状について概観したうえで、長岡市の取り組んでいる見守り、訪問活動を検討していく。

2.1 一人暮らし高齢者の状況

この節では、日本社会における一人暮らし高齢者の状況を把握するために、厚生労働省で実施した「国民生活基礎調査」及び内閣府のまとめた「高齢社会白書」をもとにして、一人暮らし高齢者の世帯数の推移と将来推計を見ていく。そのうえで、一人暮らし高齢者の日常生活にはどのような課題があるかをまとめる。

2.1.1 一人暮らし高齢者の現状

2010（平成22）年現在の高齢者世帯数は、「平成22年 国民生活基礎調査の概況」（厚生労働省2012）によると1,020万7千世帯となっており、1986（昭和61）年当時の236万2千世帯から4.3倍にも増加した。高齢者世帯とは、「65歳以上の者のみで構成するか、又はこれに18歳未満の未婚の者が加わった世帯」のことである。

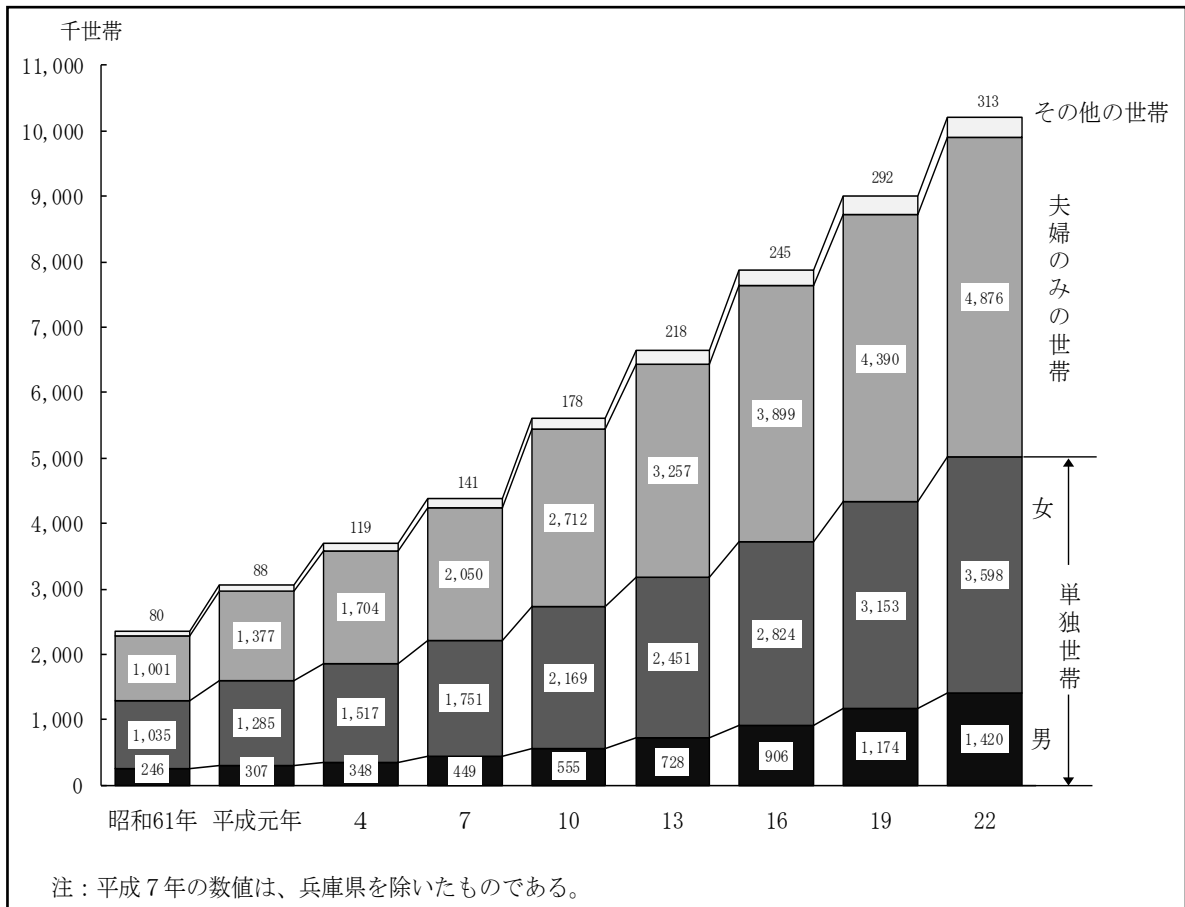
さらに、高齢者世帯数の増加に比例するように高齢者の単独世帯数も増加傾向にある。図表2-1は、高齢者世帯数の年次推移を世帯構造別に表したものである（厚生労働省2012）。高齢者の一人暮らしが年々増加傾向にあることがわかる。そして、「単独世帯」が501万8千世帯（高齢者世帯の49.2%）で、「夫婦のみの世帯」の487万6千世帯（同47.8%）をうわまわっている。単独世帯の特徴として、女性が男性の2.5倍にのぼっている点に注目すべきである。

では、一人暮らし高齢者の将来推計はどのように変化していくのだろうか。図表2-1からも、高齢者の単独世帯は年々増加してきたことから、今後も伸び続けることは想像できる。ここでは、高齢者人口との関係から検討してみよう。以下、「平成24年版 高齢社会白書」（内閣府2012）より、日本の高齢者人口の推移を見てみる。

2005年に減少に転じた日本の総人口は今後減り続けるとされているが、それでも高齢者人口は増え続け、2025（平成37）年には高齢化率が30.3%となる。これは人口の3割が高齢者であるといえる。さらに2035（平成47）年の高齢化率は33.4%となる。人口の3人に1人が高齢者といえる。その後2042（平成54）年には高齢者人口がピークを迎え、以降は減るとされているが、それでも高齢化率は人口減少にともなって上昇を続ける。2060年の高齢化率は39.9%に達し、国民の約2.5人に1人が65歳以上の高齢者となる時代が到来するとされている。

高齢者人口が増加するなかで、図表2-1のとおり、高齢者世帯数の増加に比例するように高齢者単独世帯数も増加している。すなわち今後も一人暮らし高齢者は高齢者人口が増加する限りは増え続けていくものと推察される。

図表 2-1 世帯構造別にみた高齢者世帯数の年次推移



(出所)厚生労働省 (2012)。

竹中星郎 (2000) によれば、一人暮らしの高齢者は身近な人の死、子や孫といった旧知の人が去り、1人取り残されたケースが多くを占める。図表 2-1 から、そうした高齢者が増えてきているものといえるだろう。また高齢者の単独世帯は女性の方が男性より多いことがわかる。これは、一因として、女性の方が男性より平均寿命が長いことが影響していることが言える。夫婦のみの世帯もやがて平均寿命の短い男性がなくなり女性があとに残された場合を考えたら、一人暮らしの高齢者はさらに増加していくことが予想できる。

2.1.2 一人暮らし高齢者の生活課題

次に、一人暮らし高齢者は日常生活上でどのような課題に直面するかを見ていく。高齢者の一人暮らしは本人のみならず別居の親族にとっても不安があるだろう。ここでは高齢者の一人暮らしで不安とされていることを中心にまとめていく。

(1) 「買い物難民」の高齢者

一人暮らし高齢者の生活課題には、まず買い物の足の確保が難しい人が多い点をあげられる。それは、「『買い物難民』という言葉が頻繁に耳にするようになった」(中沢・結城編 2012 : 52)ということからもいえる。

高齢者人口の多い地域で買い物をするスーパー等がないケースを考えてみよう。身体機

能の衰えが目立つ交通弱者である高齢者にとっては、少し離れたスーパーに買い物に行くだけでも困難である。「経済産業省の試算によると、全国の買い物難民は約 600 万人いると考えられる。増加の要因として地域の店舗の減少、家族形態の変化(核家族化)、社会の高齢化が挙げられる」(中沢・結城編 2012: 53)。高齢化が進むにつれ、買い物が困難になる高齢者が増えているということができる。しかし、問題は買い物だけにとどまらない。「買い物難民の多くは『世の中から取り残されている』という疎外感を感じているという。買い物難民を放置すれば、社会にさらなる孤独や孤立を生み出すことになる」(中沢・結城編 2012: 53)。買い物に行くことができず自宅に閉じこもり、近隣との交流もなくなって孤立していくという実態を垣間見ることができる。

(2) 孤立化の問題について

前述したように買い物難民の高齢者は、近隣との関係が絶たれ孤立していくリスクが高い。特に一人暮らし高齢者には、孤立化の問題が深刻になる。社会との孤立化の最も深刻な社会問題として、誰にもみとられず死後数日して発見される「孤独死」という問題も浮上してくる。「昨今、『孤独死』『無縁社会』といったフレーズがマスコミでも報道され、人生の寂しい末路の象徴として社会問題となっている」(中沢・結城編 2012: 1)。一人暮らしの高齢者にとって「孤独死」は、最も深刻な問題といえる。そこで、節をあらためて、「孤独死」について検討していく。

2.2 孤独死問題の顕在化

一人暮らし高齢者の生活の中で、近年、社会問題としても取り上げられている「孤独死」の問題について見ていくことにする。今日ではニュースでも取り上げられているテーマであるが、現状をまとめたうえで、具体的にどのような対策が必要になるかを検討していく。

2.2.1 「孤独死」とは

「孤独死」のイメージといえば、一人暮らしをしている人の自宅の郵便受けに新聞が溜まっていておかしいと思った訪問客が、自宅内で亡くなっている人を発見するということが頭に浮かぶであろう。しかし、孤独死に対して共通の定義づけはなされているわけではなく、組織や機関によってさまざまである。たとえば、次のとおりである。

「東京新聞」(2006[平成 18]年 5 月 7 日付朝刊)の「一人暮らしをしていて、誰にもみとられずに自宅で亡くなった場合」。UR 都市機構の「孤独死とは、『病死又は変死』事故の一態様で、死亡時に単身居住している賃借人が、誰にも看取られることなく、賃借住宅内で死亡した事故をいい、自殺又は他殺を除く」。新宿区役所の「二週間程度に見守る者がいない、独居又は高齢者のみ世帯の高齢者」などというように、いくつかの組織・機関が「孤独死」の定義を試みている。(中沢・結城編 2012: 11-12)

孤独死に対して定義づけは一つに決まっているのではないのだが、誰にも看取られずに亡くなり、死後一定期間発見されなかった場合を「孤独死」というのだと考えられる。

2.2.2 孤独死への対策

では、全国には孤独死への対策として、具体的にどのような取り組みがあるのだろうか。ここでは、「現代の孤立死から見えてくるもの」という特集を組んだ『月間社会福祉』（2012年9月号）に掲載された島根県出雲市大津地区（多くの住民や福祉関係者が地域福祉活動を積極的に担っていることが大きな特徴とされている）と、全国一人口の多い政令指定都市である神奈川県横浜市の2事例を見ていく。

(1) 島根県出雲市大津地区の対策

出雲市は、島根県東部に位置する人口約17万4,900人の都市である。そして大津地区は、市内の中央部の出雲地域に位置する人口9,400人で、世帯数3,600世帯の地区である。市の高齢化率は約26%で、大津地区では子ども世帯の独立等により核家族化がすすみ高齢者世帯が増加傾向にある。

出雲市民生委員児童委員協議会は、市内32単位の民生委員児童委員協議会で構成されている。そのひとつである大津民生委員児童委員協議会（以下、大津民児協）は、「ともに生きる・笑顔の街づくり」をスローガンに、住民が互いに尊重し合い、笑顔でいられるよう、民生委員ができることを考え、声かけ・訪問活動・個別相談などをすすめている。また、大津民児協では地域社会で孤立・孤独をなくすための支援を地域の住民・機関等と連携して推進している。そもそも「ともに生きる・笑顔の街づくり」の取り組みは、1990年代前半に地域の高齢者に弁当の配食を始めたことがきっかけとなっている。

大津民児協では、一人ひとりへの訪問活動を大切にしており、さらに地区の行事や地域福祉活動への積極的な参加も呼びかけている。行事等には地域の人たちの生きがいがづくり、つながりづくり、孤立の防止、見守りといった目的がある。民生委員は、地域福祉活動にメンバーとして参加した地域住民の話を聞き、ニーズを把握して心配な方がいればすぐに訪問活動などの支援につなげていく役割を果たしている。

大津地区では、一人ひとりへの訪問活動が孤独死を防ぐための原点であると考えている。

(2) 神奈川県横浜市の対策

神奈川県横浜市は、人口369万人の全国一人口の多い政令指定都市である。しかし、他の地域から移り住んだ人が多くを占めている。このような人は新住民といい、新住民は近隣との親密な関係を望まない傾向にあるため、近隣との関係は希薄であると考えられている。また、同じ横浜市であっても近隣との関わりが少ない集合住宅が密集するエリア、古くからの戸建住宅が多く地域でのつながりのある下町的エリアなど、多様な地域が混在しているのも横浜市の特徴である。

横浜市の孤独死対策には、高齢者を中心とした取り組みが多い。しかし、地域行政との関わりを拒む人など問題も出てきたために、2012年5月に孤立化、孤独死を防ぐための方策について、学識研究者や民生委員、ライフライン系の事業者、福祉サービス事業などの参加者を得て検討を始めた。現段階では、次のような案があげられている。日常生活においてさりげなく様子をうかがうことで気づきの目を拡大し、地域のつながり作りをすすめていく、異変等を察知したらその連絡を受ける窓口を明確にする、居住形態に合わせて管理組合や管理会社等に自治会への加入勧奨や見守りなどの取り組みへの理解について働き

かけを行っていく、隣近所にちょっとでも関心を持つことから孤立予防に関するきめ細かい広報活動を通じて住民一人ひとりの意識を高めていく、などである。

横浜市では、孤独死対策は地域の特性を理解して、その地域に合わせた手法で取り組むことが求められている。そして、地域の中では見守り活動を充実していくことが孤独死の防止につながっている。さらに、市民一人ひとりが隣近所へ意識を向けることも孤立させない地域づくりにつながっていくのである。

(3)2つの地域の取り組みからわかる孤独死対策

島根県出雲市大津地区、神奈川県横浜市の孤独死対策を見てきたが、2つの地域に共通しているキーワードがあった。それは「見守りの強化」である。見守り活動を行っていけば孤立自体がなくなるし、孤独死の件数も減少させることができる。さらに、近隣との関係を築き、ネットワークの構築も孤独死対策には有効であることもわかった。

2.3 長岡市の取り組み

ここまで全国のデータをもとに検討してきたが、本節では、長岡市の一人暮らし高齢者の現状、さらに、孤独死問題にどのような取り組みがされているかを見ていくことにする。

2.3.1 長岡市の現状

2011（平成23）年10月1日現在の長岡市の総人口は282,157人であり、このうち65歳以上の高齢者人口は71,295人で、人口に占める高齢者の割合（高齢化率）は25.27%となっている。そして、図表2-2は、長岡市の高齢者のいる世帯の状況をまとめた表である。総世帯数に対して65歳以上の高齢者がいる世帯の割合が、この10年で4ポイント近く上昇していることがわかる。また、「高齢単身世帯」が増加傾向にあり、2010（平成22）年現在6,754世帯となっている。高齢者人口の1割近くが一人暮らしであることがわかる。

図表 2-2 高齢者のいる世帯の状況（長岡市）

区 分		平成12年	平成17年	平成22年
総世帯数		93,347	96,169	98,548
65歳以上親族の 居る世帯	世帯数	39,752	42,834	45,747
	割合(%)	42.6	44.5	46.4
①高齢単身世帯	世帯数	4,147	5,322	6,754
	割合(%)	4.5	5.5	6.9
②高齢夫婦世帯	世帯数	7,023	8,714	9,998
	割合(%)	7.5	9.1	10.1
③その他の世帯	世帯数	28,582	28,798	28,995
	割合(%)	30.6	29.9	29.4

資料：国勢調査

※総世帯数に施設入所者は含まれない。

※夫婦どちらかが65歳以上の世帯は、高齢夫婦世帯に含める。

(出所)長岡市福祉保健部福祉総務課(2012:17)

2.3.2 見守り、訪問活動について

一人暮らし高齢者の生活の不安をなくすためには、地域住民の参加による見守り活動の強化が必要になることは前述した。そこで、長岡市では、地域の支え合いを目的とする高齢者に対しての見守り・訪問活動には、近年、どのような取り組みが行われているか見ていく。

以下で取り上げるのは、「新潟県地域支え合い体制づくり事業」として採択された事業である。県では、「高齢者や障害者をはじめ誰もが安心して暮らせる社会の構築を目的として、見守り活動や交流拠点づくりなど地域の支え合いにつながる新たな活動を対象とした補助事業」を『新潟県地域支え合い体制づくり事業』として実施している（新潟県 2012）。これまでに、合計 89 事業が採択され、県内各地で高齢者等の見守り・支え合い活動が展開されている。

(1) ソーシャルリスニングネットワーククラブ(SLNC)『なじらね』

社会福祉法人長岡三古老人福祉会が主催となって行われている活動。活動内容は法人活動拠点がある 12 か所の地域において職員、ボランティア、地域住民が高齢者世帯を訪問するなど高齢者見守り活動を行っている。

(2) 共に支え合い誇りを持って生きられる集落「壺乃界」

特定非営利活動法人 UNE が主催となって行われている活動。活動内容は主に障がい者が支援者となって支援活動を行っている。支援の内容は月 1 回の資源(古紙、空き瓶等)の回収活動、高齢者世帯の屋根の除雪や雪下ろし活動、地域活動支援センター UNEHAUS に月 1 回高齢者を集めて給食の提供や各種教室を開催している。

(3) みんないきいき「この街で」

NPO 法人夢ながおかが主催となって行われている活動。活動内容は長岡市旧市街の住民を対象に見守りを兼ねて、業者から仕入れた弁当の配食サービスを行っている。訪問時の様子などを個別記録にまとめて見守りに生かしている。なお、見守りの配達員は地域のボランティアを募っている。

(4) 地域を支え合い「夢あるまちに！」

特定非営利活動法人 ドリームが主催となって行われている活動。活動内容は高齢者、障がい者が買い物に行く際の移送や買い物代行を平日に行っている。また長岡越路支所や病院への移送支援も併せて行っている。なお、支援者は地域住民の中からボランティアを募ることとしている。

(5) こしじ支え合い事業

社会福祉法人中越福祉会(みのわの里工房こしじ)が主催となって行われている活動。活動内容は障がい者が支援者となって、高齢者、障がい者の買い物、通院、除草、除雪などの日常生活の手伝いを行う。

2.3.3 「シルバーささえ隊」について

最後に、「地域支え合い体制づくり事業」として、2012年2月より長岡市長寿はつらつ課が主体となって進めている事業を紹介する。このなかで、「シルバーささえ隊」の普及啓発による地域のネットワーク作りの取り組みを発足した。「シルバーささえ隊」とは、市の作成したリーフレット（図表 2-3）にあるとおり、高齢者を温かく見守り、ささえる応援者のことである。

図表 2-3 「シルバーささえ隊」リーフレット

地域で、みんなで・高齢者を見守りささえましょう



シルバーささえ隊

「シルバーささえ隊」とは、何か特別なことをする人ではありません。
高齢者を温かく見守り、ささえる応援者です。

～「シルバーささえ隊」が日ごろからできること～

<p>あいさつ 日ごろから近所で 声をかけ合しましょう</p>	<p>助け合い お互い様の心で、自分の できることをお手伝い</p>	<p>見守り ふだんと違うことがないか さりげなく気にかけてみましょう</p>
		

高齢者のこんなサイン、お気づきではないですか？

1人暮らし	<ul style="list-style-type: none"> ○暗くなっても電気がつかない日が続いている ○郵便物や新聞がたまっている ○洗濯物が干しっぱなしになっている など
認知症	<ul style="list-style-type: none"> ○靴なしで歩いている。迷子になっているようだ ○何度も同じことを尋ねたり、言ったりする ○いつも質問したことと違うことを答える など
虐待防止	<ul style="list-style-type: none"> ○家族が介護に疲れているようだ ○高齢者に小さな傷やあざが目につく ○高齢者に会わせてもらえない など
消費者被害防止	<ul style="list-style-type: none"> ○すぐ金を振り込めと電話がきたと言っている ○高額な商品が封を切らずにたくさんある ○いつも訪問販売の車が止まっている など



シルバーささえ隊

長岡市

「シルバーささえ隊」ステッカー
高齢者の見守りささえ合いに協力している仲間の証としてお配りしています。街中に貼ってささえ合いの輪を広げましょう。



「すこし様子がちがう」「心配なことがあるようだ」と感じたときは、
長寿はつらつ課・支所市民生活課・地域包括支援センター（裏面参照）
または地区担当の民生委員・児童委員にお気軽に相談・お知らせください。

（出所）長岡市長寿はつらつ課作成。

「シルバーささえ隊」が日ごろからできる活動には、あいさつ、助け合い、見守りがある。あいさつとは、日ごろから近隣で声をかけあうことであり、助け合いとは、お互い様の心を持って、自分のできることは手伝いをすることであり、見守りとは、普段と違っていいことはないかさりげなく気にかけることである。特に、高齢者の一人暮らし、認知症、虐待防止、消費者被害などを見逃さないように呼びかけている。

そして、「シルバーささえ隊」と書かれた丸いステッカーと看板が、シルバーささえ隊の証である。2012年8月現在、この取り組みに賛同した商店や食堂、金融機関など、市内900以上の事業所が看板の掲示に協力している（新潟日報朝刊 2012年8月8日付け）。長岡大学も正面玄関に掲示している（写真1-1）。高齢者を見守り、支え合うネットワークを広げていくためにも、今後、シルバーささえ隊の輪を広げていくことが必要となってくる。本研究では、セーフコミュニティの観点からも意義のある実践活動として、シルバーささえ隊の普及啓発活動に取り組むことにした。

写真 2-1 「シルバーささえ隊」の看板（長岡大学正面玄関）



3 研究の全体像と方法

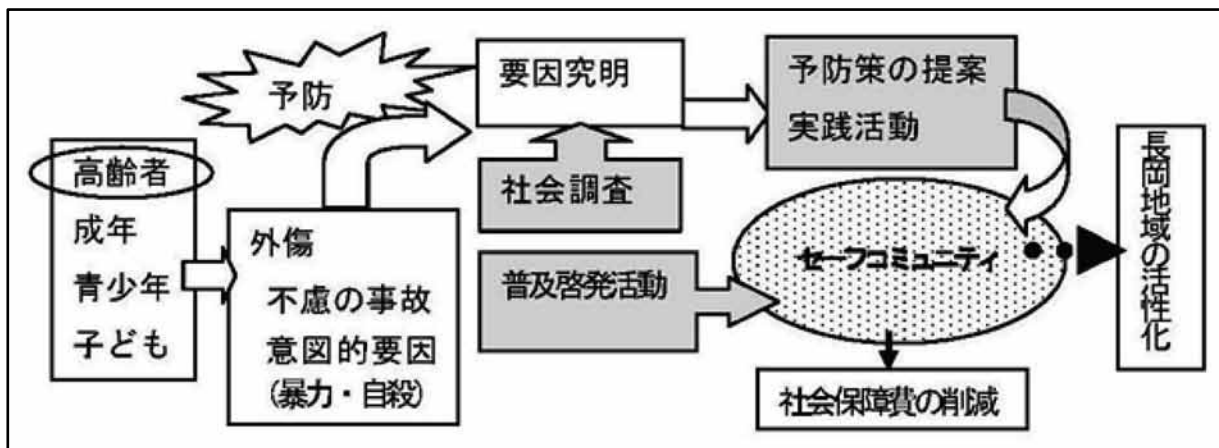
本章では、研究の全体像と研究の方法について説明する。研究の方法は、調査の枠組みと方法を中心にまとめ、分析の視点を述べることにする。

3.1 研究の全体像

序章で本研究の目的と意義を明らかにしたとおり、セーフコミュニティの対象は、生活環境（不慮の事故）と意図的要因（暴力、自殺など）、その他、私たちの安心・安全な暮らしを脅かす全ての事象が対象となる。本研究では、図表 3-1「研究の全体像」として示したとおり、不慮の事故（生活環境）による外傷に加えて、意図的要因を視野に入れた。また、セーフコミュニティの対象者は、子ども、青少年、成年、高齢者と全ての世代にわたっているが、本研究では、外傷の危険がより高いと考えられる高齢者に限定し、さらに、第1章で検討したとおり、近年、孤立化防止のための対策が急がれている一人暮らしの高齢者に絞ることにした。

そして、外傷の要因究明にあたっては、図表 3-2 のとおり社会調査を実施し、あわせて普及啓発活動を展開した。この社会調査と実践活動をもとに予防策を提案していく。ひいては、セーフコミュニティとして、長岡地域を活性化させるというのが研究の全体像である。なお、序章でも述べたように、本研究では社会保障費の削減も波及効果としてねらっている。

図表 3-1 研究の全体像



3.2 研究の方法

第1節のとおり、本研究は社会調査と実践活動から成り立っている。実践活動については、第4章で述べることにし、ここでは調査の枠組み、調査の方法、調査の概要について明らかにする。

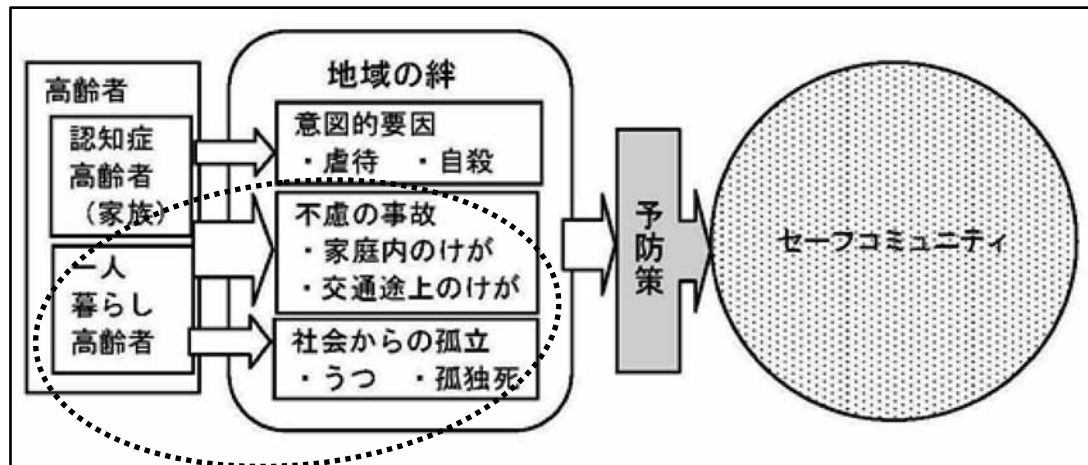
3.2.1 調査の枠組み

本研究で実施した調査の枠組みは、図表 3-2 のとおり表すことができる。

一人暮らし高齢者の不慮の事故として、家庭内や交通途上（外出時）の危険がどのよう

なところにあるか、また、うつや孤独死など社会からの孤立化によってもたらされる問題の要因を究明する。そして、近所づきあいや地域交流など、地域のネットワークがどのような影響をもたらしているかにも着目し、予防策を究明する。なお、図中にもあるとおり、調査の枠組みとして、認知症高齢者を対象として、虐待や自殺など意図的要因を視野に納めて検討したが、今年度の実査の対象には含めていない。破線で示した「一人暮らし高齢者」を対象とする、不慮の事故と社会からの孤立化の課題に絞ることにした。

図表 3-2 調査の枠組み



3.2.2 調査の方法

調査対象は、おおむね 65 歳以上の高齢者で、長岡市在住の一人暮らしの方とした。調査地は、市内のコミュニティセンターならびに高齢者センターである。コミュニティセンターでは、定期的（週に 1 度もしくは隔週など）に開催している高齢者を対象とする会食（昼食）会参加者を対象とし、9 カ所のコミュニティセンターで協力を得た。また、高齢者センターは、3 カ所のセンターの協力を得て、来場者に調査を依頼した。

本研究では、昨年度同様、学生が地域の人々と触れ合う機会を重視し、調査方法として、個別面接調査を採用した。

3.2.3 調査の概要

調査の概要をまとめると以下のとおりである。

調査名：「高齢者(一人暮らし)の不慮の事故等に関する実態調査」

調査の目的：長岡地域の高齢者を対象として、家庭内や外出時の交通での不慮の事故によるけがや一人暮らしによる事故などの要因をつきとめ、予防策を探る。

調査主体：菊池ゼミナールⅢ・Ⅳ

調査期間：2011 年 8 月～10 月

調査対象者：おおむね 65 歳以上の高齢者で長岡市在住の一人暮らしの方。

調査方法：(1) コミュニティセンターの会食参加者と、(2) 高齢者センターの来館者のうち、調査対象者に個別面接調査。

調査項目：家庭内の事故について

外出時（交通）の事故について

近所づきあいと地域交流について

日常生活・孤独死の不安について

基本属性（性別、年齢、居住地域、住居形態、職業、健康状態）

回収結果：有効回収数 89 票

3.3 回答者の特性と分析の視点

本節では、はじめに回収状況と結果を確認したうえで、回答者の基本属性を明らかにする。そして、最後に、次章での分析にあたり、その視点を述べる。

3.3.1 回収状況と結果

図表 3-3 は、調査地となったコミュニティセンターもしくは高齢者センターごとに、調査日と有効回収票をまとめたものである。

調査は、コミュニティセンターでは8月～10月にかけて、高齢者センターでは10月に実施した。有効回収票は、コミュニティセンターで64票、高齢者センターで25票である。総数は89票であった。

図表 3-3 回収結果

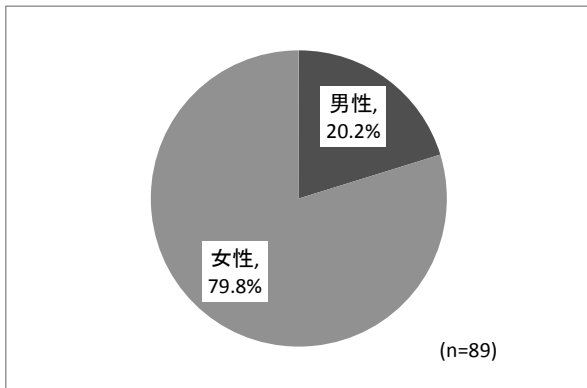
ID	コミュニティセンター	調査日	有効回収票	ID	高齢者センター	調査日	有効回収票
01	A	8月26日(日)	2	10	A	10月18日(木)	6
02	B	8月29日(水)	8	11	B	10月19日(金)	9
03	C	9月7日(金)	12	12	C	10月20日(土)	3
04	D	9月6-13日(木)	8			10月21日(日)	5
05	E	9月26日(水)	7			10月22日(月)	2
06	F	9月27日(木)	0	小計			25
07	G	10月3日(水)	9	合計			89
08	H	10月17日(水)	16				
09	I	10月18日(木)	2				
			小計				64

3.3.2 回答者の基本属性

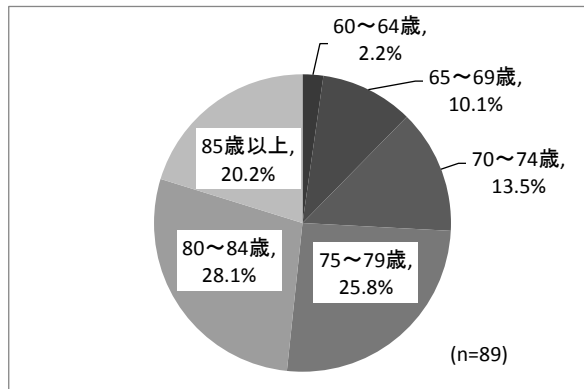
次に、図表 3-4～3-10 をもとに、回答者の基本属性を明らかにしておく。回収状況を見てきたとおり、回答者の総数が89人である。

図表 3-4 のとおり、回答者の性別は、「男性」20.2%、「女性」79.8%である。一般に、一人暮らし高齢者は女性が多いが、今回調査の回答者も同様の傾向にあった。図表 3-5 を見ると、年齢で割合の高かった層は、「80～84歳」が28.1%、「75～79歳」が25.8%、「85歳

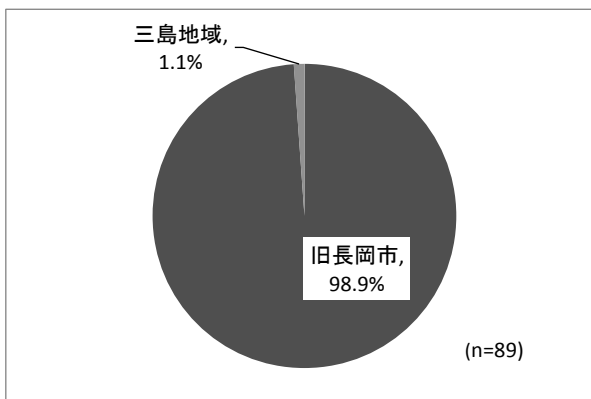
図表 3-4 性別



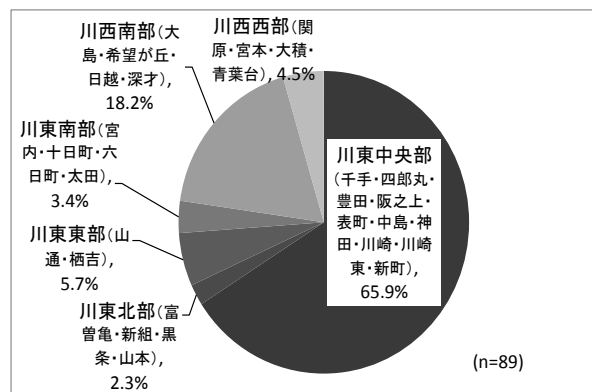
図表 3-5 年齢



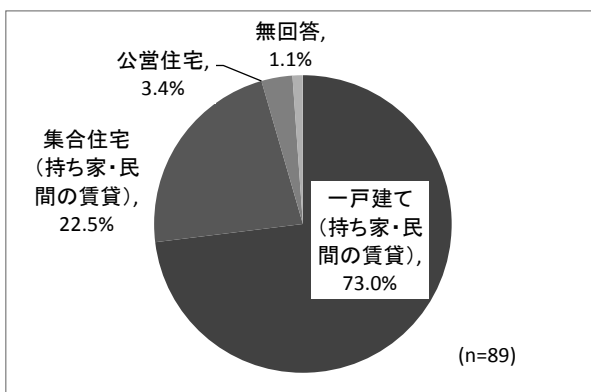
図表 3-6 居住地域



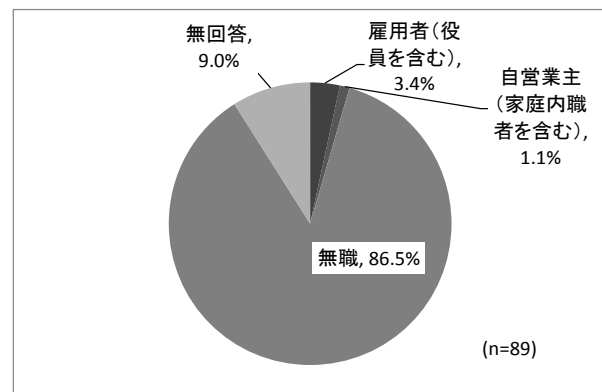
図表 3-7 旧長岡市居住者の居住地域



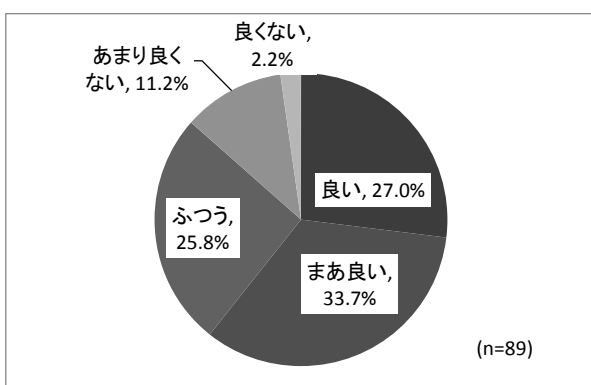
図表 3-8 住居形態



図表 3-9 職業



図表 3-10 健康状態



以上」が 20.2%となっている。図表 3-6 より、居住地域は、「旧長岡市」が 98.9%、「三島地域」が 1.1%である。今回調査では、旧長岡市に位置するコミュニティセンターと高齢者センターを調査地としたことによる。そこで、旧長岡市の内訳を、図表 3-7 をもとに見ると、「川東中央部」が 65.9%、「川西南部」が 18.2%で 8 割強を占めている。また、図表 3-8 のとおり、住居形態では、「一戸建て」が 73.0%、「集合住宅」が 22.5%、「公営住宅」が 3.4%となっている。そして、回答者の職業は、図表 3-9 のとおり「無職」が 86.5%で高い割合となっている。仕事をもっている人は、「雇用者（役員を含む）」が 3.4%、「自営業主（家庭内職者を含む）」は 1.1%となっている。最後に健康状態では、図表 3-10 のとおり「良い」が 27.0%、「まあ良い」が 33.7%、「ふつう」が 25.8%、「あまり良くない」が 11.2%、「良くない」が 2.2%である。これより、比較的健康状態の「良い」人が「良くない」人より割合が高いといえる。

3.3.3 分析の視点

本研究では、外傷のリスクの高い高齢者のなかでも「一人暮らし高齢者」を対象を絞ったことは前述のとおりである。その回答者の属性を見てきた。次章では、分析にあたり、次のような視点から検証する。第 1 に、「一人暮らし高齢者」の全体的な特徴を明らかにする。そして、第 2 に、男女による差に着目する。その理由は次のとおりである。

第 1 の点は、「一人暮らし高齢者」のデータは入手することが難しく、全体的な傾向を見ることそのものにも意義がある。また、第 2 の点は、現在高齢期にある世代では、生活全般に性別による差の影響が見られることから、男女の差を明らかにすることは有益と考えたからである。

そこで、以下では、図表 3-11 をもとに、回答者の特性について、男性と女性の性別によって見ていく。

まず、女性についての特性だが、性別では、年齢は、「80～84 歳」の割合が 32.4%と 3 割強を占めている。居住地域は、「旧長岡市」と回答した人の割合が 98.6%にのぼっている。その内訳を見ると、「川東中央部」が 72.9%、「川西南部」が 15.7%と高い割合を占めている。住居形態では、「一戸建て」が 69.0%となっている。職業では、「無職」が 85.9%と高い割合を占めている。「雇用者」は 4.2%となっている。最後に健康状態では、「良い」が 26.8%で、「まあ良い」が 38.0%で割合が高く、「ふつう」が 23.9%であった。健康状態の比較的良好な人の割合が高いといえる。

また、女性と比較しながら、男性についての特性を明らかにしておく。

年齢は「75～79 歳」が 33.3%を占めている。女性より全体的に若干年齢層が低い傾向にある。居住地域は、「その他の地域」と回答した人はなく、「旧長岡市」が 100.0%であった。その内訳を見ると、「川東中央部」が 38.9%となっている。この割合は女性より低く、男性では、「川西南部」が 27.8%で比較的高い割合となっている。住居形態では、「一戸建て」が 88.9%と高い割合にのぼっている。女性と比較してみると、20 ポイントほど高い。職業では、「雇用者」と「自営業主」と回答した人がなく、「無回答」が 11.1%であったが、ほとんどが「無職」となっている。女性では、仕事をもっている人が 5.6%であったから、無職の割合は男性でわずかながら高いといえる。最後に健康状態では、「ふつう」が 33.3%で割合が高く、「良い」と回答した人は 27.8%、「まあ良い」と回答した人は 16.7%、「あまり

良くない」と回答した人は 22.2%で、「良くない」と回答した人はいなかった。女性と比較してみると、「あまり良くない」と回答した割合が高く、女性の方が全体的な傾向として、健康状態はやや良好にあるものといえる。

図表 3-11 回答者の基本属性—性別

		全体		女性		男性	
		実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
年齢	60～64歳	2	2.2%	2	2.8%	0	0.0%
	65～69歳	9	10.1%	5	7.0%	4	22.2%
	70～74歳	12	13.5%	10	14.1%	2	11.1%
	75～79歳	23	25.8%	17	23.9%	6	33.3%
	80～84歳	25	28.1%	23	32.4%	2	11.1%
	85歳以上	18	20.2%	14	19.7%	4	22.2%
	合計	89	100.0%	71	100.0%	18	100.0%
居住地域	旧長岡市	88	98.9%	70	98.6%	18	100.0%
	その他の地域	1	1.1%	1	1.4%	0	0.0%
	合計	89	100.0%	71	100.0%	18	100.0%
旧長岡市居住者の居住地域	川東中央部	58	65.9%	51	72.9%	7	38.9%
	川東北部	2	2.3%	2	2.9%	0	0.0%
	川東東部	5	5.7%	4	5.7%	1	5.6%
	川東南部	3	3.4%	2	2.9%	1	5.6%
	川西南部	16	18.2%	11	15.7%	5	27.8%
	川西西部	4	4.5%	0	0.0%	4	22.2%
	合計	88	100.0%	70	100.0%	18	100.0%
住居形態	一戸建て	65	73.0%	49	69.0%	16	88.9%
	集合住宅	20	22.5%	18	25.4%	2	11.1%
	公営住宅	3	3.4%	3	4.2%	0	0.0%
	無回答	1	1.1%	1	1.4%	0	0.0%
	合計	89	100.0%	71	100.0%	18	100.0%
職業	雇用者	3	3.4%	3	4.2%	0	0.0%
	自営業主	1	1.1%	1	1.4%	0	0.0%
	無職	77	86.5%	61	85.9%	16	88.9%
	無回答	8	9.0%	6	8.5%	2	11.1%
	合計	89	100.0%	71	100.0%	18	100.0%
健康状態	良い	24	27.0%	19	26.8%	5	27.8%
	まあ良い	30	33.7%	27	38.0%	3	16.7%
	ふつう	23	25.8%	17	23.9%	6	33.3%
	あまり良くない	10	11.2%	6	8.5%	4	22.2%
	良くない	2	2.2%	2	2.8%	0	0.0%
	合計	89	100.0%	71	100.0%	18	100.0%

4 「高齢者（一人暮らし）の不慮の事故等に関する実態調査」分析結果

前章において、「本研究の全体像ならびに方法」を述べたとおり、本研究では、「高齢者（一人暮らし）の不慮の事故等に関する実態調査」を実施した。そして、分析対象となる回答者（一人暮らし高齢者）の特性と分析の視点は前章で明らかにした。

以下、第1節で「家庭内の事故」、第2節で「外出時の事故」、第3節で「近所づきあいと地域交流」、第4節で「日常生活と孤独死の不安」について分析した結果を検討していく。

4.1 結果と考察(1) 一人暮らし高齢者の家庭内の事故

この節では、一人暮らし高齢者の家庭内での事故の実態とその対策について、男女の差に注目し、両者を比較検討しながら分析していく。

4.1.1 家庭内の事故の実態

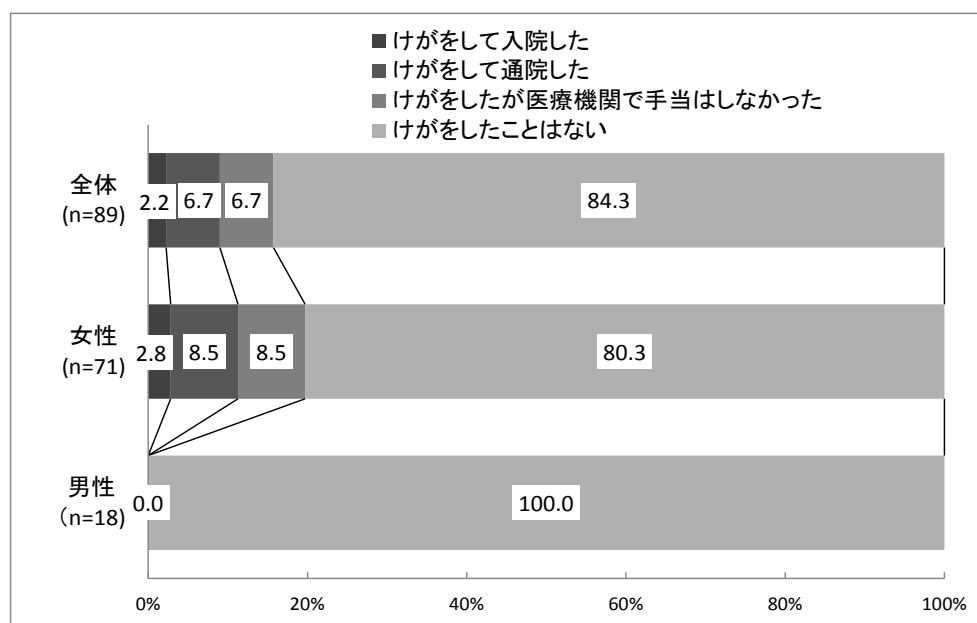
はじめに、一人暮らし高齢者の家庭内の事故の実態を見ていく。

(1) 過去1年間のけが

「過去1年間に、家庭内でけがをして手当を受けたことがありますか」とたずねた結果が、図表4-1である。全体では、「けがをして入院した」2.2%、「けがをして通院した」6.7%、「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」6.7%、「けがをしたことはない」84.3%であった。医療機関で手当はしなかったもののけがをしたことのある人を含めると、全体の15.6%がけがをしたという結果となった。およそ6人に1人の割合でけがをしたことになる。

男女を比較してみると、女性は、「けがをして入院した」2.8%、「けがをして通院した」8.5%、「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」8.5%、「けがをしたことはない」80.3%となった。一方、男性は、「けがをしたことはない」100.0%と、調査対象者全員が過去1

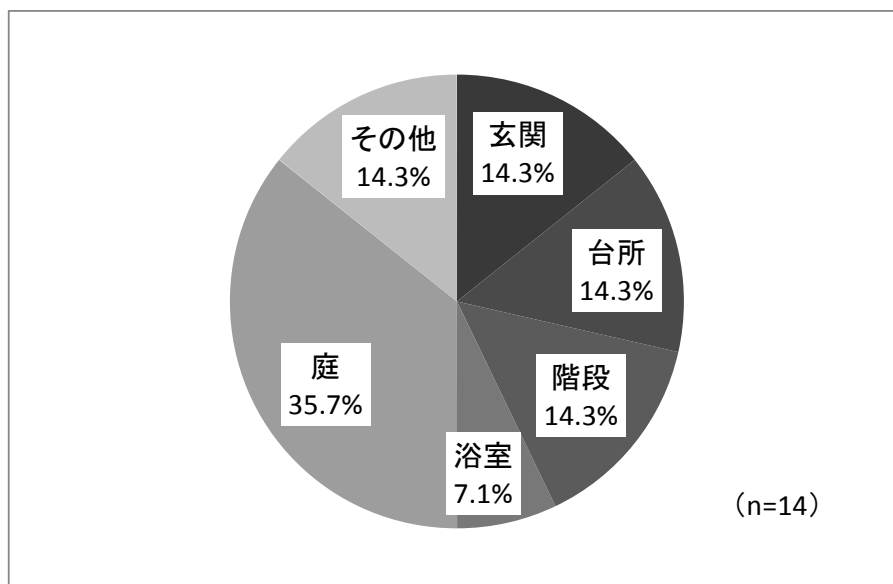
図表 4-1 過去1年間に家庭内でけがをしたことがあるか－性別



年間にけがをしたことはないと回答した。このことから、男性より女性の方が、けがをしていることがわかった。

次に、「けがをして入院した」、「けがをして通院した」、「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」と回答した人に、実際にけがをした場所を聞いてみた。すると、図表 4-2 のとおり、「庭」35.7%、「玄関」、「台所」、「階段」がともに 14.3%、「浴室」7.3%、「その他」14.3%という結果になった。「その他」には、「通路」などの回答があった。なお、この質問の該当者は、図表 4-1 でみたとおり女性だけのため、単純集計結果である。これを見てみると、意外にも「庭」でのけがが 1 番多いことがわかる。また、「玄関」、「台所」、「階段」、「浴室」といった、通常危険とみられている場所でのけがが確認できる。そして、今回の調査では、「居間」、「食卓周辺」、「寝室」、「トイレ」、「ベランダ・バルコニー」、「駐車場」でけがをした人はいなかった。

図表 4-2 過去 1 年以内にけがをした場所



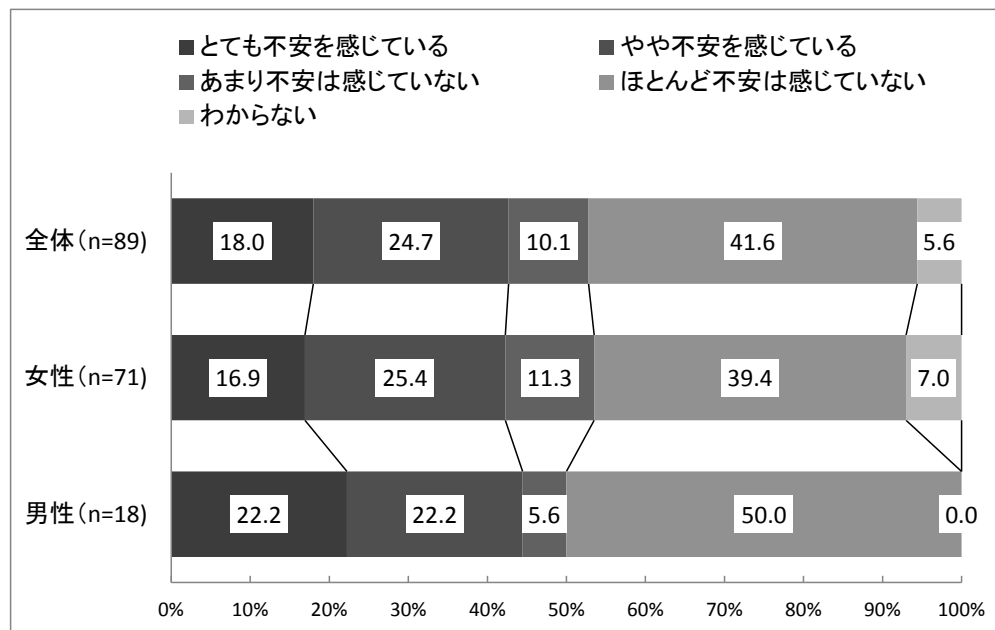
(2) 今後 1 年以内のけがに対する不安

「今後 1 年以内に、家庭内でけがをする不安をどの程度感じているか」をたずねた結果が、図表 4-3 である。全体では、「とても不安を感じている」18.0%、「やや不安を感じている」24.7%、「あまり不安は感じていない」10.1%、「ほとんど不安は感じていない」41.6%、「わからない」5.6%という結果となった。このうち、「とても不安を感じている」と「やや不安を感じている」を合計すると 42.7%で、全体の 4 割強の人が不安を感じていることがわかった。

男女を比較してみると、女性は、「とても不安を感じている」16.9%、「やや不安を感じている」25.4%、「あまり不安は感じていない」11.3%、「ほとんど不安は感じていない」39.4%、「わからない」7.0%であった。一方、男性は、「とても不安を感じている」22.2%、「やや不安を感じている」22.2%、「あまり不安を感じていない」5.6%、「ほとんど不安を感じていない」50.0%、「わからない」0.0%であった。

これより、「不安を感じている」（「とても不安を感じている」と「やや不安を感じている」割合の合計）と、「不安を感じてない」（「あまり不安は感じていない」と「ほとんど不安は感じていない」割合を合計）を比較すると、男女の差はあまりみられない。しかし、男性は女性より、「とても不安を感じている」と回答した割合が5.3ポイント、また、「ほとんど不安を感じていない」と回答した割合が10.6ポイント高いという特徴が見られる。

図 4-3 今後1年以内にけがをする不安をどの程度感じているか—性別



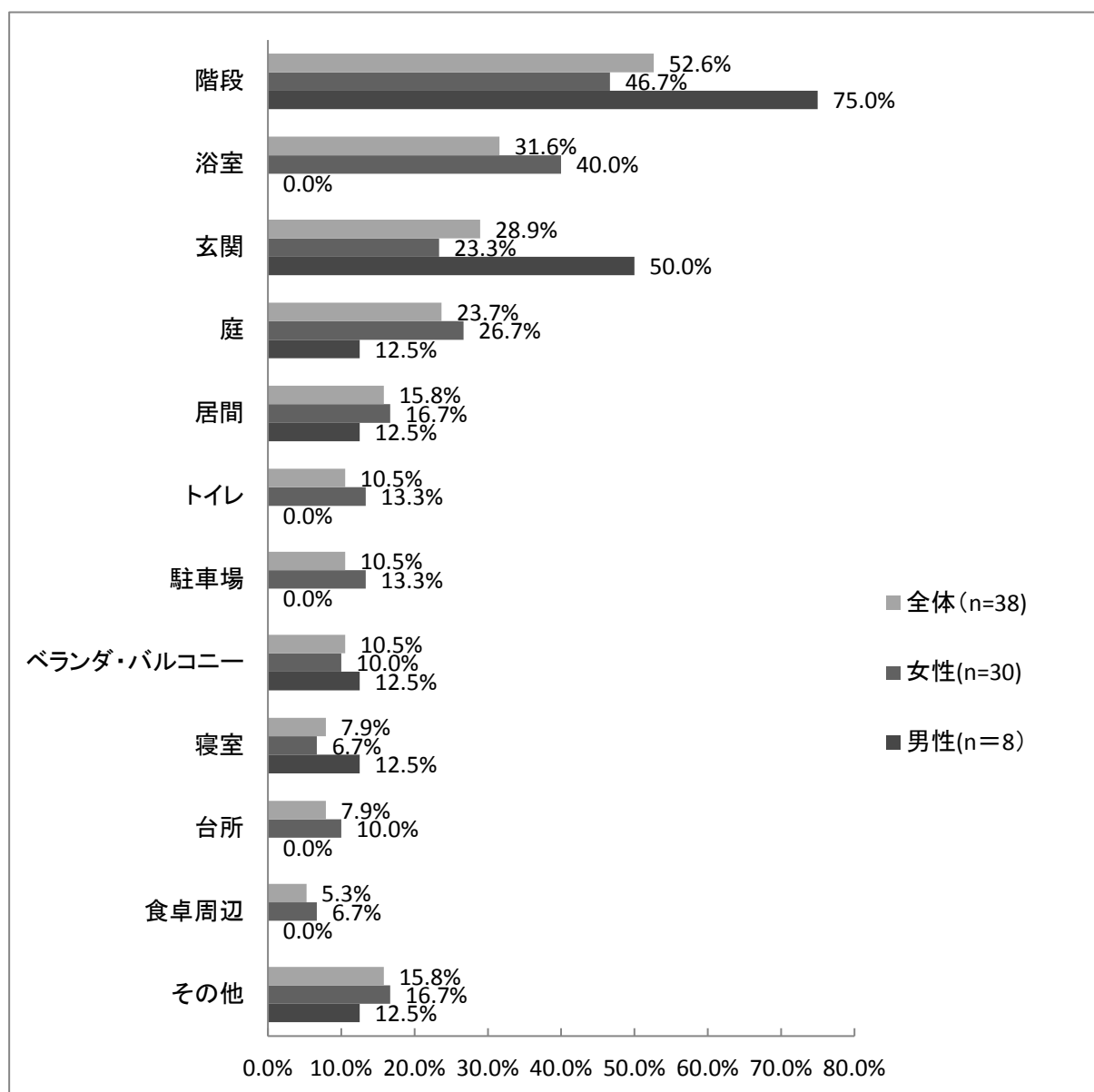
(3) けがの不安を感じている場所

ここでは、(2)の「今後1年以内に家庭内でけがをする不安をどの程度感じていますか」という質問に対して、「とても不安を感じている」、もしくは「やや不安を感じている」と回答した人に、けがの不安を感じている場所はどこかを複数回答でたずねた結果を見ていく。図表 4-4 のとおり、全体では、最も多かった回答が「階段」の52.6%であった。以下順に見ていくと、「浴室」31.6%、「玄関」28.9%、「庭」23.7%、「居間」15.8%、「駐車場」「ベランダ・バルコニー」「トイレ」10.5%、「寝室」「台所」7.9%、「食卓周辺」5.3%、「その他」15.8%であった。

次に、男女で不安を抱えているところを比較して見ていく。まず男性は、最も不安を抱えているのは、「階段」75.0%と、8割弱の人が不安を感じていた。女性も最も不安を感じていたのは「階段」で46.7%だったが、男性より30ポイント近く低い。また、男性で2番目に割合の高かったのは「玄関」で50.0%であったが、女性の割合は23.3%であった。男性は、「階段」、「玄関」でけがをする不安を抱えている人の割合が女性より高かったといえる。

これに対して、女性は、「食卓周辺」や「台所」で、けがをする不安を抱えていると回答した人がいたが、男性は全くいなかった。このように男女で差が見られた項目もあったが、「居間」や「ベランダ・バルコニー」などは、男女の差がさほど見られなかった。

図表 4-4 けがの不安を感じている場所—性別（複数回答）



(4) けがに対する不安の内容

ここでは、(3)のけがの不安を感じている場所で、どのような不安を感じているかを自由回答でたずねた結果を見ていく。

図表 4-5 は、不安を感じている場所ごとに、男女別に回答をまとめたものである。なお、回答数に差があるのは、男性の該当者が少ないためである。その点を断ったうえで、回答の内容を検討する。

この表を見てみると、男性は、「転倒」、「転落する不安」、「踏み外す心配がある」など、転倒に対しての不安が多かった。一方、女性は、「体の衰え」、「足が悪く、滑りやすいと思っている」、「足が利かない」など、自分自身の身体機能に対する不安を感じている内容の回答が見られた。そして、男性と同じく、転倒に対する不安が多かった。さらに、特徴的だったのは、男性より、けがに対する不安の内容が具体的だった点である。女性の回答の

図表 4-5 けがに対する不安の内容—性別

	男性	女性
玄関	「転倒」、「段差があって不安」、「昇り降り」	「転倒」、「体の衰え」、「段差」
居間	「転倒」	「転倒」、「ストッキングで滑って転ばないか不安」、「体の衰え」
台所		「足が悪く、滑りやすいと思っている。また火事も心配」、「体の衰え」
食卓周辺		「体の衰え」
階段	「踏み外す不安がある」、「転倒」、「転落する不安」、「手すり付きだが、降りるときに不安」	「昇り降り」、「転倒」、「足が悪いが、2階で寝ているため転ばないか不安」、「骨折」、「つまずき」、「段差の踏み外し」、「体の衰え」、「過去に階段から踏み外したことがあるので、踏み外さないか不安」「足が悪いので不安」「手すり」
寝室	「転倒」	「体の衰え」
トイレ		「体の衰え」、「足が悪いので不安」
浴室		「転倒」、「毎日使うので不安」、ふらついて倒れないか不安、「体の衰え」、「段差」
ベランダ・バルコニー	「布団干しをするときに不安」	「転倒」、「体の衰え」
庭	「つまずきやすい」	「転倒」、「石につまづく不安がある」、「体の衰え」、「足が利かない」
駐車場		「車との接触」、「車の運転」、「体の衰え」
その他	「転倒」	「コードに引っかからないか不安」、「足が悪いので、転倒が心配」、「足が引っかかる」、「体の衰え」

中には、「ストッキングで滑って転ばないか不安」と言った、女性特有のものもあった。

また、過去1年間にけがをした人の割合の最も高かった「庭」についての回答を見ると、「石につまづく不安がある」などがあることがわかった。

4.1.2 家庭内の事故対策

次に、家庭内の事故対策として、普段から気をつけていることがあるか、また、あるとすれば、それはどのようなことかについて見ていく。

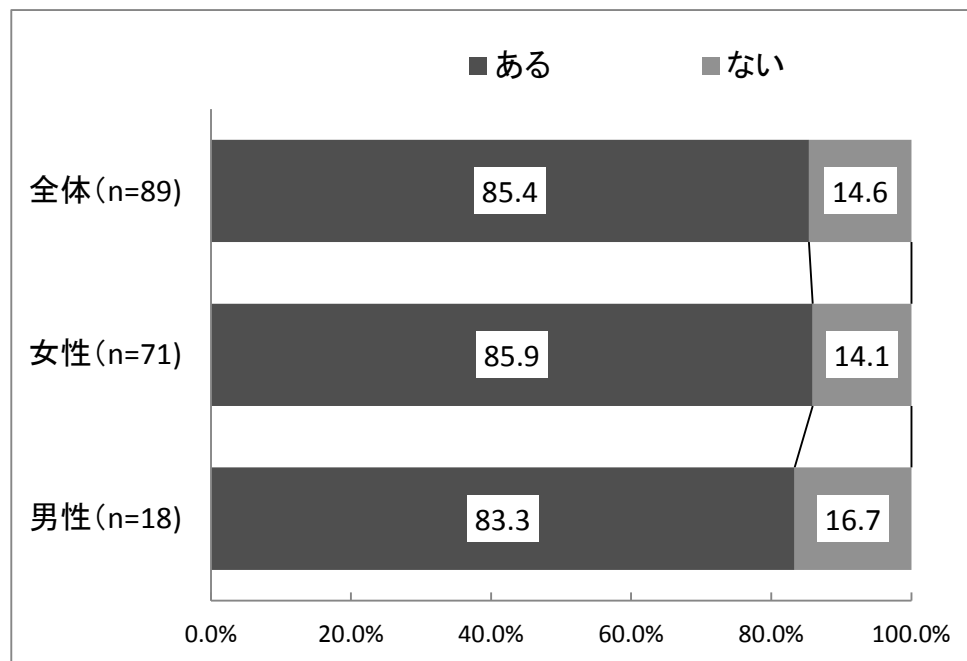
(1) けがをしないように気をつけていること

図表 4-6 は、家庭内でけがをしないように普段から気をつけていることはあるか、それともないかの質問に対しての性別によるクロス集計結果である。

気をつけていることがあると回答した人は、全体で 85.4%、女性 85.9%、男性 83.3%であった。また、気をつけていることがないと回答した人は、全体で 14.6%、女性 14.1%、男性

16.7%だった。これを見てみると、およそ6人のうち5人の割合で普段から気をつけていることがあることがわかる。そして、性別による目立った差は見られなかった。

図表 4-6 家庭内でけがをしないように普段から気をつけていること—性別



(2) どのようなことに気をつけているか

次に、(1)の質問に対して、家庭内でけがをしないように普段から気をつけていることが「ある」と回答した人に、具体的にどのようなことに気をつけているかを自由回答でたずねた。その結果は、次のようにまとめられる。

まず、一人暮らし高齢者全体に言えることは、「転倒」に対して気をつけている人が多いということである。具体的には、「手すりを使って歩く」、「階段を降りる時は壁づたえで降りる」、「転ばないようにゆっくり降りる」などと回答している。他には、「ダンスやプールで体作りをしている」、「普段から外に出るようにしている」、「テレビの体操番組を見て体を動かすようにしている」という回答があった。普段から体を鍛えるようにし、体の衰えを防ぐことにより、けがを防いでいるという人が多いことがわかった。

4.1.3 考察

一人暮らし高齢者の家庭内の事故の実態ならびに、その予防策について、全体の傾向を把握するとともに、男女で比較し分析検討してきた。

まず、過去1年間にけがをしたと回答した人は、女性は19.8%であったのに対して、男性ではけがした人はいなかった。この1年間でけがをしたのは、女性だけという結果となった。けがをした場所は、「庭」の割合が最も高かった。一般には、「階段」などが危険と考えられているが、今回調査での大きな発見だったといえる。

そこで、今後1年以内にけがをする不安をどの程度抱えているかをたずねたところ、男

女ともに、4割強の人が不安を抱えているという結果となった。このことから、今回調査ではサンプル数の少なかったこともあり、けがをしていなかった男性も、今後けがをしないか不安を抱えている人も多いということがわかる。

そして、図表 4-4 や図表 4-5 より、不安を感じている場所を見てみると、女性では、さまざまな場所をあげていた。これは、女性の方が男性より家庭内での活動範囲が多いためと考えられる。現在、高齢期にある男性は、台所・食卓周辺などで活動することはあまり無いが、女性は、多くの場合、毎日料理を作るため、台所・食卓周辺への不安が自然と生まれ、男性より不安を抱える人が多かったと考えられる。一人暮らしのため、家事は男女ともに必要であるにもかかわらず、このような差が見られた。

また、昨年度の調査でも、高齢者の中で、階段に不安を抱えている人が約 6割と高い割合だった。今回の一人暮らし高齢者の調査結果からも、最も不安を感じている場所が「階段」であることがわかった。

そして、「普段からけがをしないように気をつけていることはありますか」という質問には、全体で 85.4%の人が、「ある」と回答した。一人暮らし高齢者に限らず、全ての高齢者に言えることかもしれないが、とりわけ、一人暮らしの場合には、予防が必要である。年齢をどんどん重ねていくにつれて、体が衰えて行き、けがをする不安があるからこそ、高齢者の人は、普段の生活の中で何らかの対策を講じることにより、けがを予防していると言える。たとえば、「ダンスやプールに行き予防している」と回答した人がいたように、家の中に留まらず、外に出て、他の人と一緒になって体を動かすことにより、普段からけがを予防している高齢者もいる。このように、他者との交流も兼ねながらの、けがの予防も、一人暮らし高齢者にとっては孤立化を防ぐことにもつながることから、重要であるといえる。

4.2 結果と考察 (2) 一人暮らし高齢者の外出時の事故

本節では、一人暮らし高齢者の外出時の事故の実態を性別による差に注目して分析し、事故対策をまとめる。なお、調査では、「けが（転倒や交通事故など）」としてたずねた。

4.2.1 外出時の事故の実態

ここでは、外出した際の一人暮らし高齢者の事故について、「過去 1年間のけが」、「今後 1年以内のけがに対する不安」、「どのような不安を感じているか」を見てみる。

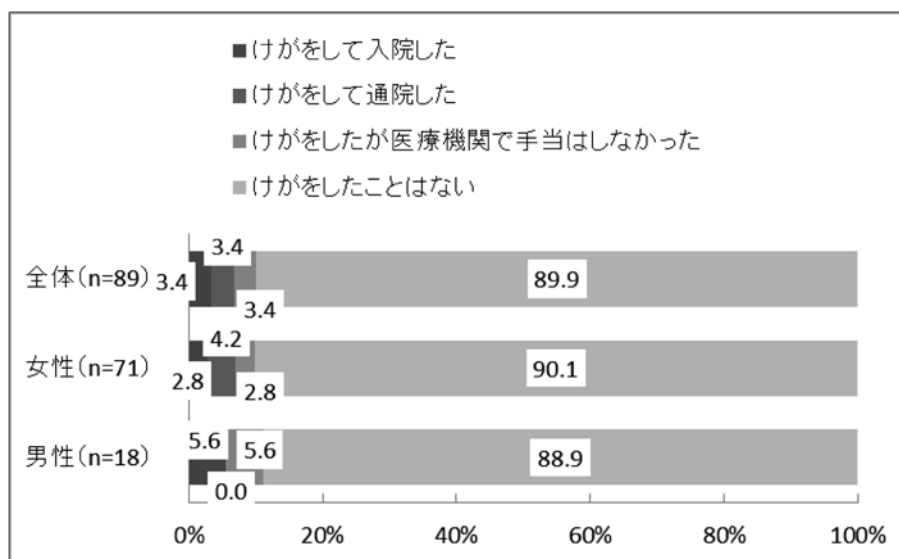
(1) 過去 1年間のけが

過去 1年間に、外出した際にけが（転倒や事故など）をしたことがあるかをたずねたところ、図表 4-7 のとおり、全体では、「けがをして入院した」3.4%、「けがをして通院した」3.4%、「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」3.4%、「けがをしたことはない」89.9%であった。

はじめに、男性のけがについて見てみる。

男性は、「けがをして入院した」5.6%、「けがをして通院した」0.0%、「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」5.6%、「けがをしたことはない」88.9%であった。この結果より、けがをしたことはない人が 9割弱となっていることがわかる。けがをした人は、

図表 4-7 過去 1 年間に外出した際にけがをしたこと—性別



「けがをして入院した」「けがをして通院した」「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」を合わせると 11.2%である。今回の調査では、外出した際のけがで通院をした人は、一人もいなかった。

女性は、「けがをして入院した」2.8%、「けがをして通院した」4.2%、「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」2.8%、「けがをしたことはない」90.1%であった。この結果より、けがをしたことはない人が9割を超えていることがわかる。けがをした人は、「けがをして入院した」「けがをして通院した」「けがをしたが医療機関で手当はしなかった」を合わせると9.8%である。

以上のことから男性と女性を比較してみると、全体的に目立った差はないものの、男女ともおよそ1割の人がけがをしたことがあるということがわかった。

(2) 今後1年以内のけがに対する不安

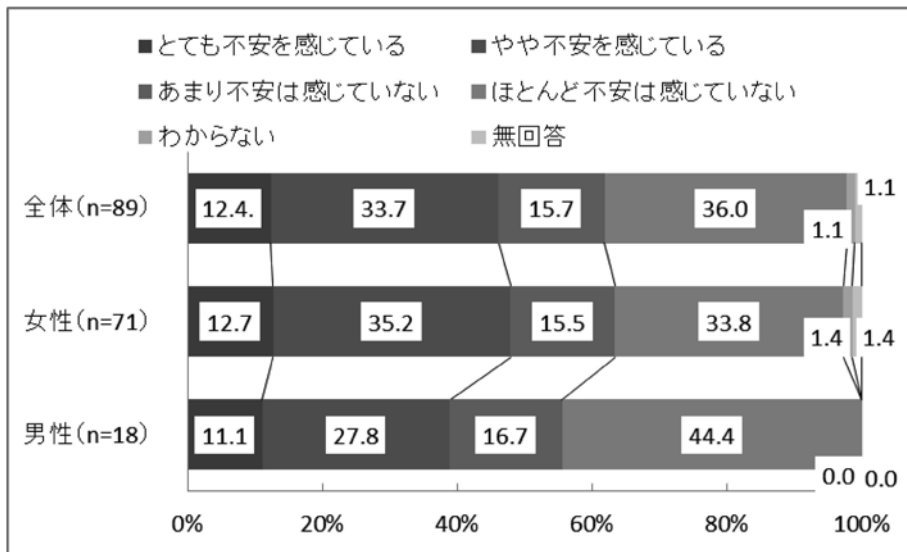
そこで、回答者が今後1年以内に、外出した際にけが（転倒や交通事故など）をする不安があるかないかに着目してみたい。図表 4-8 のとおり、全体では、「とても不安を感じている」12.4%、「やや不安を感じている」33.7%、「あまり不安は感じていない」15.7%、「ほとんど不安は感じていない」36.0%、「わからない」1.1%であった。

はじめに、男性の不安について見てみる。

男性は、「とても不安を感じている」11.1%、「やや不安を感じている」27.8%、「あまり不安は感じていない」16.7%、「ほとんど不安は感じていない」44.4%、「わからない」0.0%であった。不安を感じている人（「とても不安を感じている」と「やや不安を感じている」の合計）と不安を感じていない人（「あまり不安は感じていない」と「ほとんど不安は感じていない」の合計）を比較すると、不安を感じている人が38.9%で、感じていない人が61.1%であった。全体の4割弱の人が不安を感じていることがわかった。

女性は、「とても不安を感じている」12.7%、「やや不安を感じている」35.2%、「あまり不安は感じていない」15.5%、「ほとんど不安は感じていない」33.8%、「わからない」1.4%であった。不安を感じている人（「とても不安を感じている」と「やや不安を感じて

図表 4-8 外出した際にけが（転倒や交通事故）をする不安—性別



いる」の合計)と不安を感じていない人(「あまり不安は感じていない」と「ほとんど不安は感じていない」の合計)を比較すると、不安を感じている人が47.9%で、感じていない人が49.3%であった。全体の5割弱の人が不安を感じていること、また、不安を感じている人は、感じていない人と比較すると男性ほどの差はなく、1.4ポイント低いことがわかった。

以上のことから、女性の方がけがに対する不安を感じているという結果になった。

(3) どのような不安を感じているか

次に、今後1年以内のけがに対して、「とても不安を感じている」・「やや不安を感じている」と回答した人に、どのような不安かを自由回答でたずねた結果について、男女別にまとめた結果は、図表4-9のとおりである。

男性は、自動車での交通事故に不安を抱えている。また、横断歩道での転倒や、事故によって人に迷惑をかけたくないなども不安であることがわかった。

女性は、自動車や自転車での交通事故、転倒によるけが(骨折など)に不安を感じているほか、つまずきや自身の体調、事故やけがが起こったときの対処や自分の身の回りに対する不安も多くあげられた。また、女性は雪道や暗い夜道などにも不安を感じていることがわかった。

以上のことから、男性の該当者が少ないために分析は制約されるものの、男女とも、転倒や交通事故に対する不安を感じている人が多いということがわかった。

図表 4-9 外出した際にどのような不安を感じているか

性別	自由回答の内容
男性	<ul style="list-style-type: none"> ・自動車事故、運転中の巻き込み事故。 ・横断歩道で転ばないように。 ・人に迷惑をかけたくない。

	<ul style="list-style-type: none"> ・目が悪いため、車が怖い。
女性	<ul style="list-style-type: none"> ・一人の時の対処。 ・階段や乗り物への昇降など段差での転倒。 ・道路や雪道での転倒。 ・近づくもの、身の回り。 ・自転車や自動車での交通事故。 ・急に車が出てくるかどうか不安。 ・骨折。 ・横断歩道や運転時に交通ルールを守る。 ・つまずきや道路での事故。 ・体調の良し悪し。 ・自分が気をつけていても巻き込まれる。 ・マンホールなどの段差で転ぶこと。 ・足がもつれる。 ・年・身体の衰えから、足元がふらつき転倒する不安。 ・夜道の運転や歩行の不安。

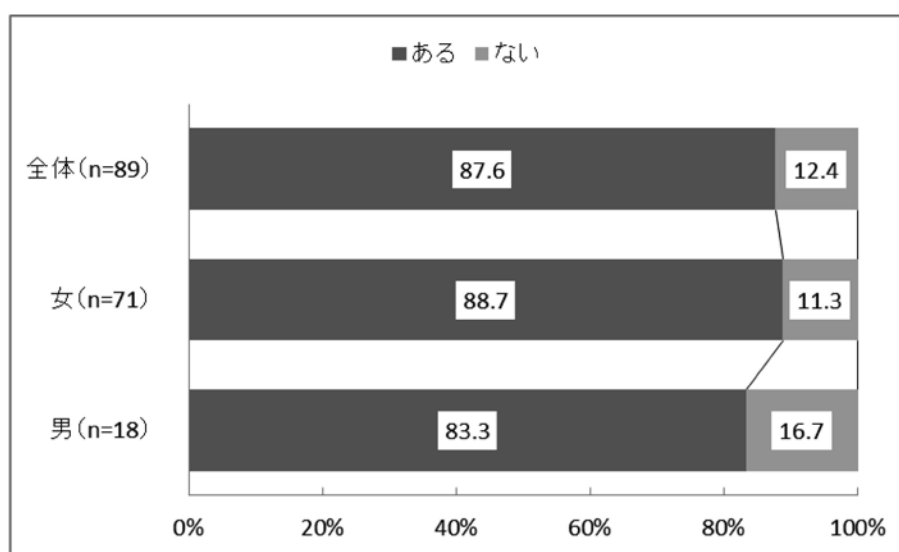
4.2.2 外出時の事故対策

次に、外出時の事故対策として、普段から気をつけていることがあるか、また、あるとすれば、どのようなことかを見ていく。

(1) けがをしないように気をつけていること

図表 4-10 は、外出の際にけがをしないように、普段から気をつけていることはあるか、ないかをたずねた結果である。全体では、「ある」87.6%、「ない」12.4%であった。

図表 4-10 けがをしないように気をつけていること—性別



男性では、「ある」83.3%、「ない」16.7%であった。これに対して女性は、「ある」88.7%、「ない」11.3%であった。

以上のことから、男性も女性も8割以上の人々が普段からけがをしないように気をつけていることがあるようだ。そして、わずかながら女性の方が気をつけていることがあると回答した人の割合が高いことがわかった。

(2) どのようなことに気をつけているか

ここでは、(1)の問で、普段から気をつけていることが「ある」と回答した人に、それはどのようなことかを自由回答でたずねた結果を分析する。

図表 4-11 は、回答をまとめた結果である。

男性は、「身の回りをよく見る」「周囲の観察」「高齢者、対向車には気をつける」「車や人のじゃまにならないようにする」など、周囲に気を配っている人が多いようだ。その他、「ころばないように」「自転車に乗らない」「自動車に乗らない」などもあげられた。

女性は、「夜間は自転車に乗らない」「夕方以降外出しない」「滑って転ばないようにする」など、雪道や夜道に気をつけている人が多いようだ。その他、「交通ルールを守る」「歩行に気をつける」「転ばないように」など、自分自身で気をつけられることをあげている人が多かった。

以上のことから、男女とも交通事故に気をつけてはいるものの、男性は周囲に対して気をつけているのに対して、女性は自分自身で気をつけられることに気をつけていることがわかった。

図表 4-11 外出した際にけがをしないように気をつけていること

性別	自由回答の内容
男性	<ul style="list-style-type: none"> ・交通事故を起こさないという意識を持つ。 ・交通ルールを守り、こども、高齢者、対向車には気をつける。 ・忘れないように気をつけている。 ・自転車に乗らない。 ・靴が脱げないようにする。 ・ズボンに引っかからないようにする。 ・自動車に気をつける。 ・転倒ないように気をつけている。 ・身の回りをよく見る。 ・周囲の観察。 ・車や人のじゃまにならないようにする。 ・近くに注意。
女性	<ul style="list-style-type: none"> ・あわてない。 ・時間に余裕をもって行動する。 ・シルバーカーを押す。 ・自動車や自転車での交通事故(安全運転)に気をつける。

	<ul style="list-style-type: none"> ・車の運転でルールを守ること。 ・転倒しないように歩くのはゆっくり。 ・滑って転ばないようにする。 ・杖を使い転ばないようにしている。 ・休みを挟みながら、しっかり足を踏んで歩くこと。 ・判断をしっかりと、焦らずに行動する。 ・出かける時はしっかり靴を履き、かかとからついて歩く。 ・横断歩道や、道のせまいところは自転車を降りる。 ・目立つようにしている。 ・道の端を歩く。 ・倒れた時に、連絡先を病院に伝えられるようなものを持ち歩く。 ・暗い道や危ない道に注意。 ・夕方以降外出しないようにする ・タクシーやバスを利用する。 ・週二日の体操
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

4.2.3 考察

調査結果の分析を通じて、男女ともけが（転倒や交通事故など）をしていないと回答した割合が高いことがわかった。しかし、だからと言ってけがを全くしていないわけではない。男女とも、およそ1割の人がけがをしていた。

ここでは、一人暮らし高齢者の男女の比較をしてきたが、あまり差はなかったうえに、けがをしていない人は多かったとはいえ、今後1年以内に、けがをするかもしれないという不安を抱えている人はたくさんいる。男性は、4割弱の人が不安を感じていた。そして、5割弱の女性が今後1年以内に、外出した際にけがをする不安を感じていることもわかった。

では、どのような不安を感じているのだろうか。自由回答を分析したところ、男女ともやはり交通事故や転倒といったことが不安のようだ。女性は、階段の上り下りや雪道、夜道も不安に感じている。

こうした不安を抱えていることから、男性も女性も普段から対策をしていた。たとえば、男性は交通事故を起こさないために交通ルールを守り、対向車や子ども、高齢者に注意している。自転車に乗らないようにしている。また、運転中、靴が脱げないようにしている。

一方、女性の場合は、時間に余裕を持って行動する、焦らず行動するなどゆったりとした行動を心がけている。また、夕方以降外出しない、公共交通機関を使うなどの対策もしていた。

したがって、高齢者の一人ひとりが、けがをしないための対策を考え、実行していたためけがをすることが少なかったと考えられる。けがをしている高齢者のなかには、自分自身が気をつけていても、周囲の状況によってけがをしてしまったケースも考えられる。外出の際には、一人ひとりが交通ルールをしっかり守ることはもちろん、普段の生活からけがをしないための対策について考えておくことが大事だと言えそうである。

4.3 結果と考察(3) 一人暮らし高齢者の近所づきあいと地域交流

本節では、一人暮らし高齢者の近所づきあいと地域交流について、前節と同様に性別による差に着目して分析する。

4.3.1 近所づきあい

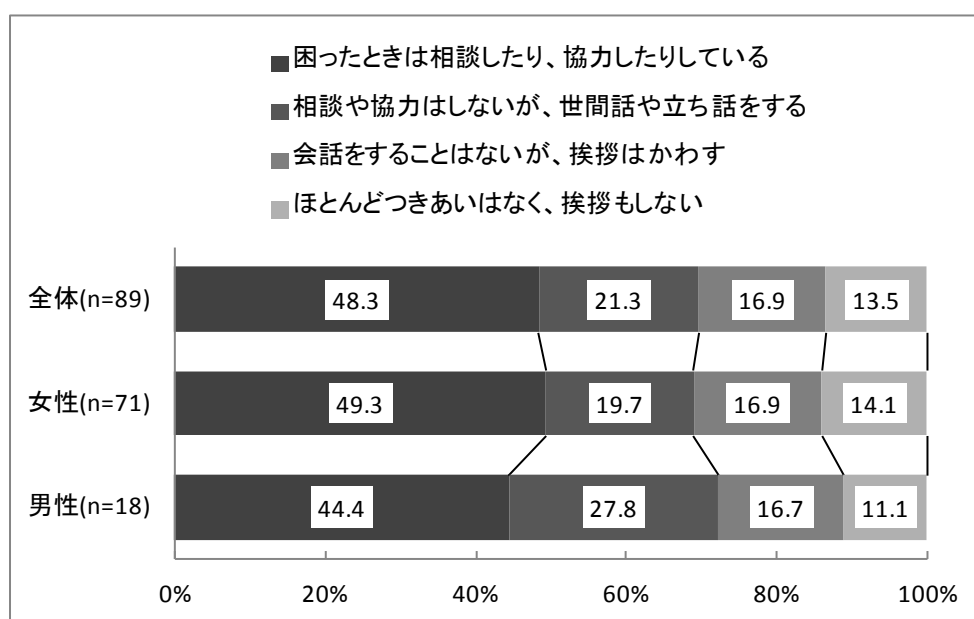
ここでは、一人暮らし高齢者の「近所づきあいの程度」と「近所づきあいの大切さ」について分析する。

(1) 近所づきあいの程度

はじめに近所づきあいの程度について見ていく。

「ご近所の方との程度つきあっていますか」とたずねたところ、全体では、「困ったときに相談したり協力したりしている」(48.3%)が約5割、「相談や協力はしないが、世間話や立ち話をする」(21.3%)が約2割、「会話をすることはないが、挨拶はかわす」(16.9%)が2割弱という結果であった(図表4-12)。そして、「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」(13.5%)は1割強にも及んだ。

図表 4-12 近所づきあいの程度—性別



次に、男女別に見ると、男性では、「困ったときに相談したり協力したりしている」44.4%、「相談協力はしないが、世間話や立ち話をする」27.8%、「会話をすることはないが、挨拶はかわす」16.7%、「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」11.1%という結果である。一方、女性は、「困ったときに相談したり協力したりしている」49.3%、「相談協力はしないが、世間話や立ち話をする」19.7%、「会話をすることはないが、挨拶はかわす」16.9%、「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」14.1%という結果である。

これにより、男性ではおよそ9人に1人が、女性ではおよそ7人に1人が「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」という近所づきあいの現状が判明した。そして、「困ったと

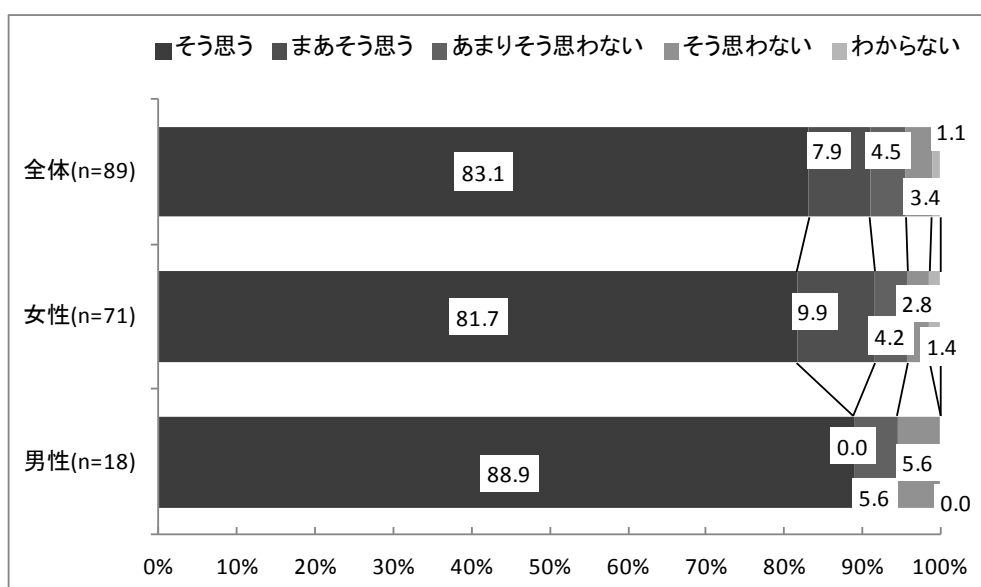
きは、相談したり、協力したりしている」人の割合は、男性が女性より約5ポイント低いが、「相談や協力はしないが、世間話や立ち話をする」人の割合は、女性より約8ポイント高くなっている。

(2) 近所づきあいの大切さ

次に、近所づきあいの大切さについて見ていく。

「ご近所の方と助け合うことは大切だと思いますか、それともそうは思いませんか」とたずねたところ、全体では、「そう思う」が83.1%、「まあそう思う」が7.9%という結果であった(図表4-13)。また、「あまりそう思わない」は4.5%、「そう思わない」は3.4%、「わからない」は1.1%であった。「そう思う」、「まあそう思う」を合わせると91.0%にのぼっており、ほとんどの人が近所づきあいの大切さを認識しているようである。

図表4-13 近所づきあいの大切さ—性別



次に、男女別で見ると、男性は、「そう思う」(88.9%)と9割弱の人が回答しているのに対して、女性は81.7%で7ポイント強低い割合であった。ただし、「まあそう思う」と回答した割合が、女性で9.9%であったのに対して、男性は0%であったから、「そう思う」と「まあそう思う」を合わせた回答を比較すると、女性が91.6%となって2.7ポイントほど高くなる。また、「あまりそう思わない」と「そう思わない」と回答した割合を比較すると、男性が11.2%に対して、女性7.0%であったから、近所づきあいを大切だと思わない人の割合は、男性が4.2ポイント高かった。男性の該当数が少ないために断定的なことはいえないが、今回の調査の限りでは、わずかな差がみられた。なお、昨年度は子ども(保護者)と高齢者(一人暮らしに絞らない)を対象に同様の調査を行ったが、「そう思わない」と回答した人は0%であった。これにより、近所づきあいについて、今回調査の回答者である一人暮らし高齢者では、大切だと思わないと回答した人がわずかながらいたことを指摘できる。

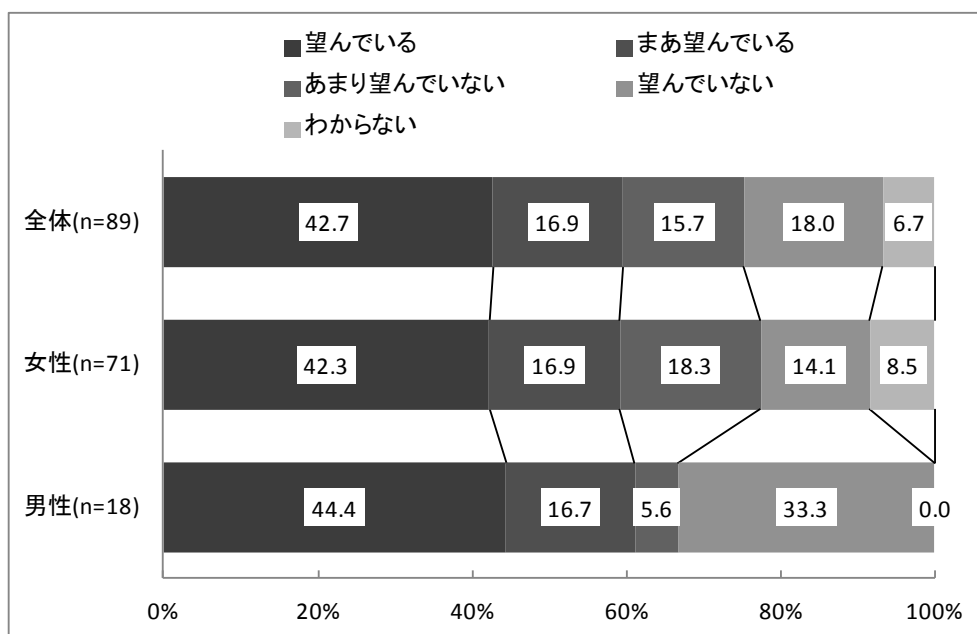
4.3.2 地域交流

ここでは、一人暮らし高齢者の地域交流として、「若者との地域交流」と「若者に望んでいる交流」と「若者との地域交流を望まない理由」について、同様に性別による差に着目して分析する。

(1) 若者との地域交流

若者（おおむね 18 歳～30 歳未満の者）との地域交流を望んでいるかたずねたところ、図表 4-14 のとおり、全体では、「望んでいる」42.7%、「まあ望んでいる」16.9%、「あまり望んでいない」15.7%、「望んでいない」18.0%であった。半数以上の高齢者が若者との交流を望んでいることがわかり、今後の地域交流に若い世代の参入が期待される。しかし、その半面、若者との地域交流を「望んでいない」と答えた人が全体で 18%であったことにも留意すべきである。「あまり望んでいない」と回答した 15.7%を合計すると 33.7%にのぼる。3 人に 1 人は若者との交流を望んでいないことがわかる。

図表 4-14 若者との地域交流を望んでいるか—性別



次に、男女別で見ると、「望んでいる」（男性 44.4%、女性 42.3%）、「まあ望んでいる」（男性 16.7%、女性 16.9%）を合計した割合は男性 61.1%、女性 59.2%で、どちらも 6 割前後の人が若者との交流を望んでいて、ほとんど差がないことがわかった。一方、「あまり望んでいない」と回答した男性は 5.6%、女性は 18.3%で、女性の方が 13 ポイント弱高い割合だった。また、「望んでいない」と回答した男性は 33.3%、女性は 14.1%で、男性の方が 19 ポイント強高い割合だった。これにより、若者との交流を望んでいない高齢者は、男性の方が割合が高いことがわかった。そして、「わからない」という回答が、男性にはまったく見られなかったのに対して、女性で 8.5%にのぼっていた点に注目すると、若者との交流に対して、女性では明確な態度を示さなかった人の割合が高かったと言える。

(2) 若者に望んでいる地域交流

ここでは、(1) の間で、若者との地域交流を「望んでいる」「まあ望んでいる」と回答した人に、それはどのようなことかを自由回答でたずねた結果を分析する。

分析にあたっては、性別で比較してみることにした。なお、内容の重複している回答はできるだけまとめて示した。

図表 4-15 のとおり、男性と女性が共通して世間話と情報提供を望んでいる。現在の情報提供媒体が、高齢者にとって使いづらいインターネットが占めていることが理由の 1 つにある。世間話を望んでいる高齢者は、年齢層の異なる人と会話することで、若返ったような気持ちになるなど、日常に刺激を求めている。

女性では、相談を望んでいる人が多かった。体の衰えを感じながら一人暮らしの生活をすることに不安でいた。心身の状態や、地域の状況を若者に相談し、困ったときに助けを求められる環境を望んでいる。

図表 4-15 若者に望んでいる地域交流—性別

性別	自由回答の内容
男性	情報を聞きたい 言葉をかけてもらうこと 地域の踊りのあとを継ぐ人を探している ゲートボール、ゴルフをやる仲間になってもらいたい 相手にしてもらえないから地域交流を望んでいる 一緒にスポーツ(登山)をしたい 特にはないが交流したい 話し相手がいると嬉しい 会話
女性	情報での交流(知らないことを聞きたい) 近所の人と仲良くする 若い人に高齢者についてどう考えているか聞いてみたい(特に同居) 何かあったら助けてもらいたい お茶のみ 会話 何かあったら一緒に出たい 町内イベントに参加してほしい 楽しく喋りたい 挨拶してくれる。掃除してくれると助かると思った 話し相手や友人になりたい 話し合いをすること 若者のほうから積極的に声をかけてほしい 電話などで助けを呼べるように マナー教室など

<p>一緒に体操、これからの相談 会食 イベント参加など 世間話 現在、旅行や行事など既に交流している 話すことが好きなので話をしたい 具体的にはない テレビ 一人暮らしで不安だから若者に相談したい コミュニケーション スポーツ 孫たちと</p>

(3) 若者との地域交流を望まない理由

ここでは、(1) の問で、若者との地域交流を「あまり望んでいない」「望んでいない」と回答した人に、その理由について自由回答でたずねた結果を分析する。分析にあたっては、同様に、内容の重複している回答をまとめて、性別で比較した。

図表 4-16 のとおり、男女共通して、ジェネレーションギャップにより話が合わないことが、若者との地域交流を望まない理由の大半である。

男性には、今の若者はダメだという、若者に対して失望しているともとれる意見があった。女性には、「若い人は地域から出て行ってしまおうと思っている」「周りに若者がいない」など、若者との交流の機会を見つけれないことを推察できる意見や「年寄りの相手をしてくれないだろう」という若者との交流に消極的な意見がある。また、「孫が介

図表 4-16 若者との地域交流を望まない理由

性別	自由回答の内容
男性	<p>今の若者はダメだから 年の差がありすぎる 話が合わないから 若い人と付き合っていけない。10歳差くらいまで。</p>
女性	<p>話が合わないと思っているから 若い人は地域から出て行ってしまおうと思っている 年寄りの相手をしてくれないだろう 機会がない 話題がない とくになし 周りに若者がいない 孫が介護の仕事をしているのでその人を頼りにしているから</p>

護の仕事をしているのでその人を頼りにしている」ため、若者との交流に対して必要性を感じない人もいる。

4.3.3 考察

(1) 近所づきあい

一人暮らし高齢者は、近所づきあいを必要であると考えていたが、昨年度の調査（子どもの保護者と一人暮らしに限らない高齢者を対象として実施した）の結果より、その意識はいくらか低いという結果であった。内閣府が2010年に実施した全国調査によれば、近所づきあいの程度を、「挨拶をする程度」と回答した人が男性で48.8%、女性で39.5%にのぼっている（内閣府 2013a）。問題は、困ったときに頼れる人がいない人の割合（2011年調査）が、一人暮らしの女性では8.5%であったのに対して、男性に20%もいることだ（内閣府 2013a）。今回の私たちの調査では、調査対象となった長岡地域の一人暮らし高齢者のうち、「困ったときは相談したり、協力したりしている」と回答した割合は、女性で49.3%、男性では44.4%であった。そして、「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」人が、女性で14.1%、男性で11.1%であった。

それでも、今回調査の回答者は、ほとんどの人が近所づきあいの必要性は認識していた。しかし、付き合いの程度では、面接調査でたずねたところ、「コミュニティセンターの会食で、困ったときの相談や助け合いをするため、近所づきあいの大切さを感じている」という人もいれば、「助け合いは大切だと思っているが、実際に助け合うとなると信用できない」「近所の人とは、話をするくらいで、あまり踏み込むのは、お互いに気を使ってできない」というようにそれぞれの考えで関係を築いている。コミュニケーション範囲を広げ、親しい関係を築く等の人付き合いに関することは、主体性が求められる。そこで、行政や町内会等、人に頼るのではなく本人が動いて活動範囲を広げることが必要であろう。

今回調査で明らかになった点は、一人暮らし高齢者のうち、男性が女性より、近所の人と相談したり協力したりする関係を築いている人の割合が低かったことである。定年後の社会との関係を築く必要がある。コミュニティセンターの会食などは、きっかけづくりとしても有効なことがわかる。

そして、身体的に衰え、自立した生活が困難である人に対しては、いつでも顔を見ることが可能な関係を築くことが必要だ。各自が近所づきあいの大切さを理解し、行動しようと思えば、必要な情報を素早くつかみ、互いに気にかけてあうことで、孤独死や地域の孤立を防ぐ社会を実現できるだろう。

(2) 地域交流

今回調査の結果では、若い人との交流を男女とも6割前後の回答者が望んでいた。特に、世間話を望んでいる一人暮らし高齢者が大半を占めていた。今回の調査活動は、第2章で述べたとおり、コミュニティセンターと高齢者センターで実施した。このうち、コミュニティセンターでは、会食に集まった高齢者を対象に、食事時間の前後で行ったが、時間が限られているにも関わらず積極的に調査に協力してくれた。他人と話す機会は週に1回の会食程度で、他の日は自宅でテレビを見て過ごしていることが日常であるという一人暮らしの高齢者には、若者との交流は、良い刺激になるとのことだった。気持ちが若返ると

いう意見もあった。

若者との交流で望んでいることで、世間話の他に相談もあがった。今後の生活の不安や情報提供を求めている。現在幾つかの自治体では、高齢者の孤独死予防のために、近隣住民、ボランティア団体、行政、民生委員、警察など関係機関での見回り、声かけ、情報提供、ネットワーク支援が行われている。長岡市では、「シルバーささえ隊」の啓発活動等で地域住民同士の見守りやささえ合いを推進している。しかし、今回の調査で、若者との交流が少ないと見られたように、このシルバーささえ隊等での高齢者との助け合いは、それほど若者には普及していないようだ。また、高齢者の側からしても、若者との交流を望んでいるにもかかわらず、ジェネレーションギャップを感じて行動が起こせないことが判明した。そして、若者との交流を「望んでいない」もしくは「あまり望んでいない」一人暮らし高齢者が 33.7%にのぼっていたことに留意すべきである。男性では、この割合が 38.9%と高かった。

よって、若者から挨拶や声かけ、見守り等を積極的に行うことが重要だと言える。一人暮らし高齢者の日常に活力を与え、また、困ったときに助けを求められる地域社会の環境こそが、安心した生活を可能にするだろう。若者と高齢者が交流の機会を増して、互いに助け合える相互扶助の関係を築くために、地域のコミュニティ活動を見直す必要があるだろう。

4.4 結果と考察(4) 一人暮らし高齢者の日常生活と孤独死の不安

本節では、一人暮らし高齢者の日常生活と孤独死の不安について、男女比だけでなく、差があった質問項目にも着目して分析する。

4.4.1 日常生活

ここでは、一人暮らし高齢者の日常生活の実態を見ていく。

(1)一人暮らしについての周囲の認識

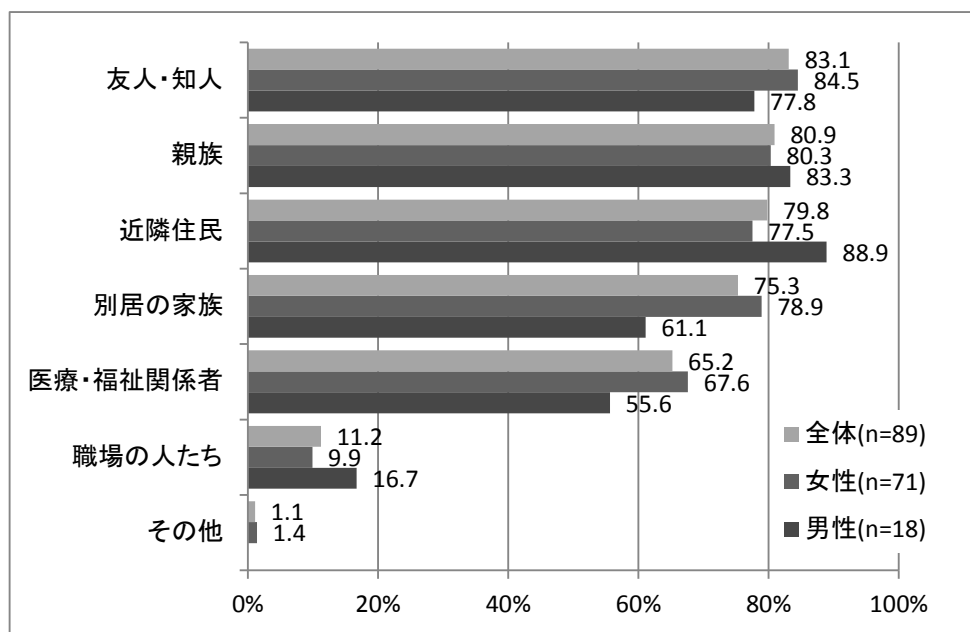
「あなたが一人で暮らしていることを知っている人がいますか」と複数回答でたずねたところ、図表 4-17 のとおり、全体では回答の多かった順に、「友人・知人」83.1%、「親族」80.9%、「近隣住民」79.8%、「別居の家族」75.3%、「医療・福祉関係者」65.2%、「職場の人たち」11.2%、「その他」1.1%であった。一人暮らし高齢者の別居の家族や親族といった身内よりも、友人・知人の方が一人暮らしをしていることをよく知っているという結果となった。

男性の結果を見ると、「近隣住民」が 88.9%、「親族」が 83.3%、「友人・知人」が 77.8%、「別居の家族」が 61.1%、「医療・福祉関係者」が 55.6%、「職場の人たち」が 16.7%であった。

女性の結果を見ると、「友人・知人」が 84.5%、「親族」が 80.3%、「別居の家族」が 78.9%、「近隣住民」が 77.5%、「医療・福祉関係者」が 67.6%、「職場の人たち」が 9.9%であった。

男性の一人暮らし高齢者の現状を知っている割合がもっとも高いのが「近隣住民」であること、女性の一人暮らし高齢者の現状を知っている割合が最も高いのが「友人・知人」

図表 4-17 一人暮らしについての周囲の認識—性別（複数回答）

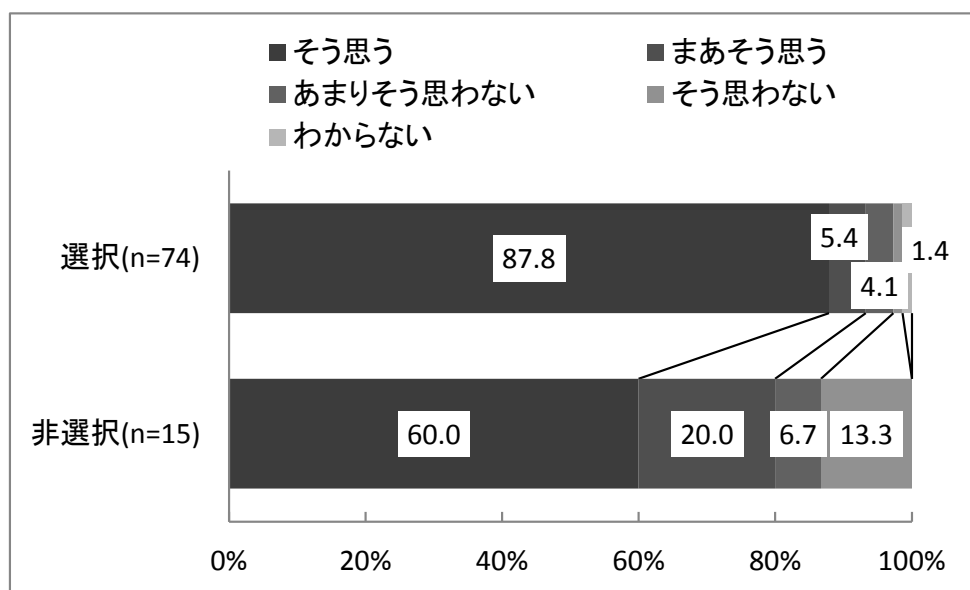


であることがわかった。

また、その他の差のあった質問項目を分析した結果、次の2つのことが明らかになった。

1つ目は図表 4-18 のとおり、友人・知人が一人で暮らしていることを知っている一人暮らし高齢者は、近隣住民と助け合うことは大切だと考えている割合が高いことがわかった。「あなたのご近所の方と助け合うことは大切だと思いますか。それともそうは思いませんか」とたずねたところ、「友人・知人」が一人で暮らしていることを知っている一人暮らし高齢者の回答（図では「選択」）は、「そう思う」87.8%、「まあそう思う」5.4%、「あまりそう思わない」1.4%、「そう思わない」4.1%、「わからない」0%

図表 4-18 近所の方と助け合うことは大切だと思うか
—「友人・知人」が一人暮らしをしていることを知っている（選択）との関係

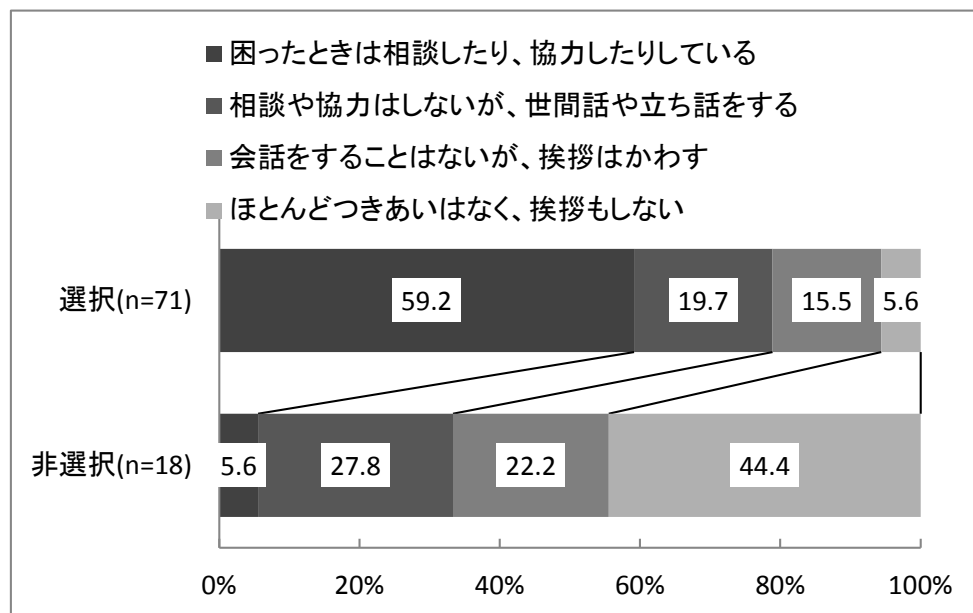


「そう思わない」4.1%、「そう思わない」0%であった。一方、「友人・知人」が一人で暮らしていることを知らない一人暮らし高齢者の回答(図では「非選択」)は、「そう思う」60.0%、「まあそう思う」20.0%、「あまりそう思わない」6.7%、「そう思わない」13.3%であった。また、近隣住民と助け合うことは大切だと考える人(「そう思う」と「まあそう思う」の合計)と大切だと考えない人(「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計)の割合を比較すると、近隣住民と助け合うことは大切だと考える人の割合は、「友人・知人」が一人で暮らしていることを知っている人では93.1%で、知らない人では80.0%であった。

2つ目は図表4-19のとおり、近隣住民が一人で暮らしていることを知っている一人暮らし高齢者は、近隣住民と密に関わっているということである。「あなたは、ご近所の方との程度つきあっていますか」とたずねたところ、「近隣住民」が一人で暮らしていることを知っている一人暮らし高齢者の回答(図では「選択」)は、「困ったときは相談したり、協力したりしている」59.2%、「相談や協力はしないが、世間話や立ち話をする」19.7%、「会話をすることはないが、挨拶はかわす」15.5%、「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」5.6%であった。一方、近隣住民が一人で暮らしていることを知らない一人暮らし高齢者の回答(図では「非選択」)は、「困ったときは相談したり、協力したりしている」5.6%、「相談や協力はしないが、世間話や立ち話をする」27.8%、「会話をすることはないが、挨拶はかわす」22.2%、「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」44.4%であった。

図表 4-19 近所づきあいの程度

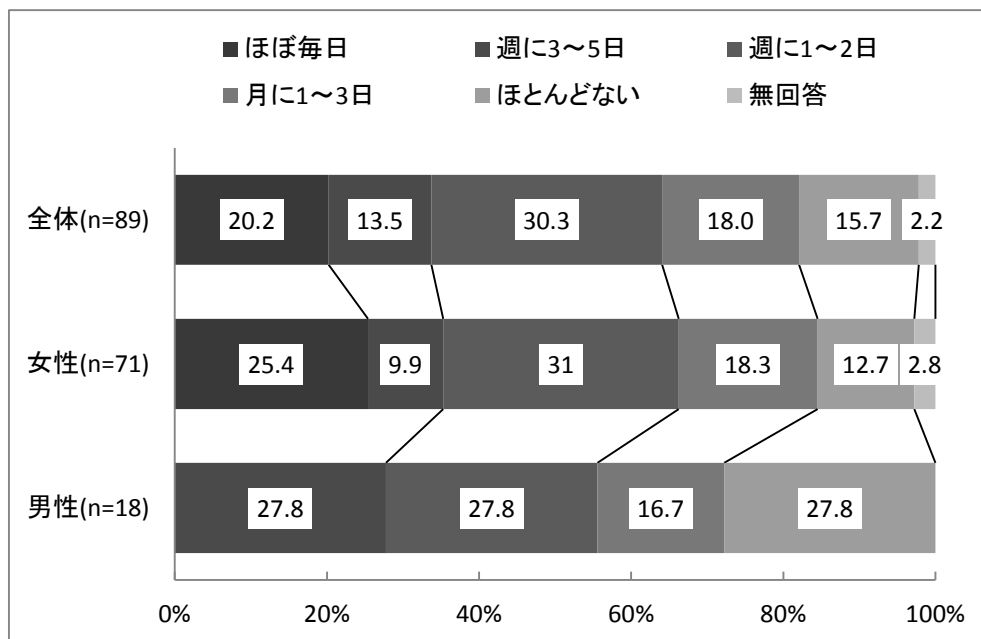
— 「近隣住民」が一人暮らしをしていることを知っている(選択)との関係



(2)一人暮らし高齢者宅への訪問頻度(4~11月)

「誰かがあなたを訪ねてくることがありますか」とたずねたところ、4~11月までの期間で図表4-20のとおり、全体では「ほぼ毎日」20.2%、「週3~5日」13.5%、「週1~2日」30.3%、「月1~3日」18.0%、「ほとんどない」15.7%という結果となった。

図表 4-20 訪問頻度（4～11月）—性別



男性の結果を見ると、「ほぼ毎日」が0.0%、「週3～5日」が27.8%、「週1～2日」が27.8%、「月1～3日」が16.7%、「ほとんどない」が27.8%であった。

女性の結果を見ると、「ほぼ毎日」が25.4%、「週3～5日」が9.9%、「週1～2日」が31.0%、「月1～3日」が18.3%、「ほとんどない」が12.7%であった。

1週間に1回は訪問者がいる場合の割合とそうでない場合の割合に分けて男女別にみていった場合、男性の「ほぼ毎日」「週3～5日」「週1～2日」の割合の合計は55.6%、「月1～3日」「ほとんどない」の割合の合計は44.5%であり、女性も同様にしてみると「ほぼ毎日」「週3～5日」「週1～2日」の割合の合計は66.3%、「月1～3日」「ほとんどない」の割合の合計は31.0%であった。このことから、女性の一人暮らし高齢者は男性の一人暮らし高齢者よりも4～11月の期間に誰かが訪ねてくる頻度が高いことがわかる。

(3) 一人暮らし高齢者宅への訪問頻度(12～3月)

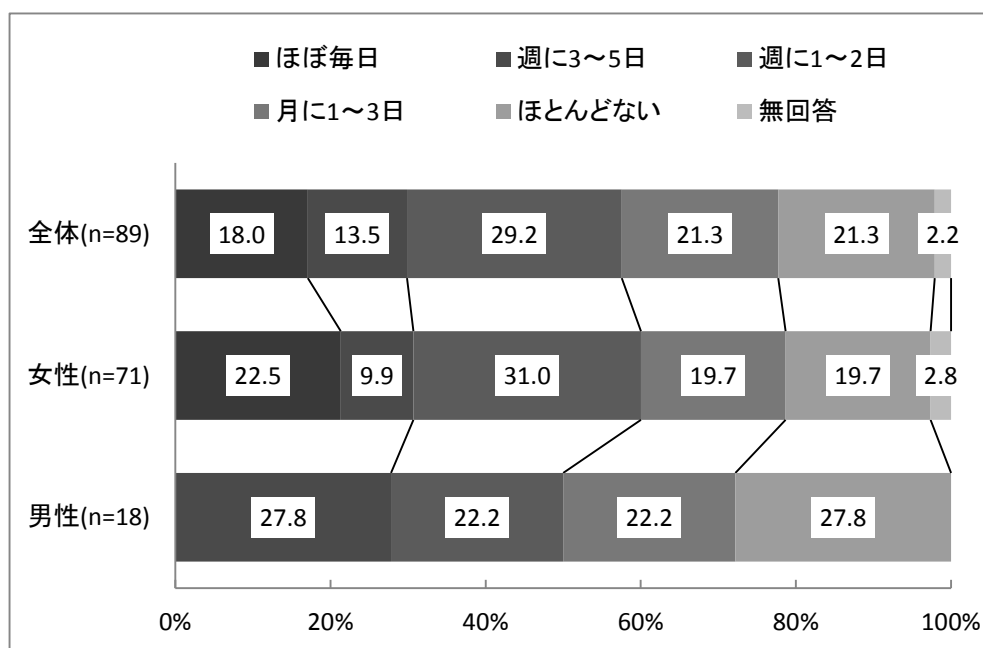
「誰かがあなたを訪ねてくることがありますか」とたずねたところ、12～3月までの期間で図表4-21のとおり、全体では「ほぼ毎日」18.0%、「週3～5日」13.5%、「週1～2日」29.2%、「月1～3日」15.7%、「ほとんどない」21.3%という結果となった。

男性の結果を見ると、「ほぼ毎日」が0.0%、「週3～5日」が27.8%、「週1～2日」が22.2%、「月1～3日」が22.2%、「ほとんどない」が27.8%であった。

女性の結果を見ると、「ほぼ毎日」が18.0%、「週3～5日」が13.5%、「週1～2日」が29.2%、「月1～3日」が15.7%、「ほとんどない」が21.3%であった。

この結果を図表4-20の4～11月の訪問頻度と比べてみると、男性はほとんど差がないのに対し、女性は「ほぼ毎日」の割合が7.4ポイント減少し「ほとんどない」の割合が9.6ポイント増加している。このことから、女性の一人暮らし高齢者に関しては、冬期期間中の訪問頻度は積雪がない時期に比べ減少することがわかる。

図表 4-21 訪問頻度（12～3月）—性別



また、1週間に1回は訪問者がいる場合の割合とそうでない場合の割合に分けて男女別にみていった場合、男性の「ほぼ毎日」「週3～5日」「週1～2日」の割合の合計は50.0%、「月1～3日」「ほとんどない」の割合の合計は50.0%であり、女性も同様にしてみると「ほぼ毎日」「週3～5日」「週1～2日」の割合の合計は60.7%、「月1～3日」「ほとんどない」の割合の合計は37.0%であった。4～11月の訪問頻度に比べれば、1週間に1回以上は訪ねてくる割合の合計は男女とも減少する。しかし女性については依然として6割を超えており、同じ一人暮らしでも男性より女性の方が訪問者が多いことがわかる。

4.4.2 孤独死の不安

ここでは、一人暮らしの孤独感や趣味など夢中になっていることの有無について分析したうえで、一人暮らし高齢者の孤独死の不安について見ていく。

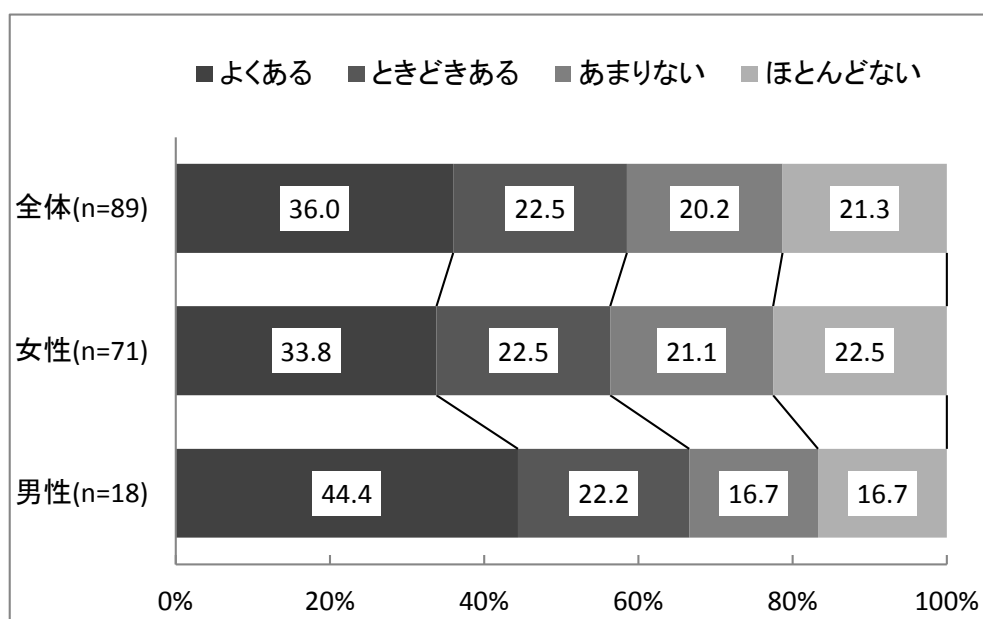
(1) 一人暮らしの孤独感

「一人暮らしで寂しいと感じたことはありますか」とたずねたところ、図表4-22のとおり、全体では「よくある」36.0%、「ときどきある」22.5%、「あまりない」20.2%、「ほとんどない」21.3%という結果となった。寂しさを感じている人（「よくある」と「ときどきある」の合計）と寂しさを感じていない人（「あまりない」と「ほとんどない」の合計）の割合を比較すると、寂しさを感じている人は58.5%で、感じていない人は41.5%であった。6割近くの人が一人暮らしによる寂しさを感じていることがわかる。

男性の結果を見ると、「よくある」が44.4%、「ときどきある」が22.2%、「あまりない」が20.2%、「ほとんどない」が21.3%であった。寂しさを感じている人と感じていない人の割合を比較すると、寂しさを感じている人は66.6%で、感じていない人は41.3%であった。

女性の結果を見ると、「よくある」が33.8%、「ときどきある」が22.5%、「あまりない」

図表 4-22 一人暮らしで寂しいと感じたこと—性別



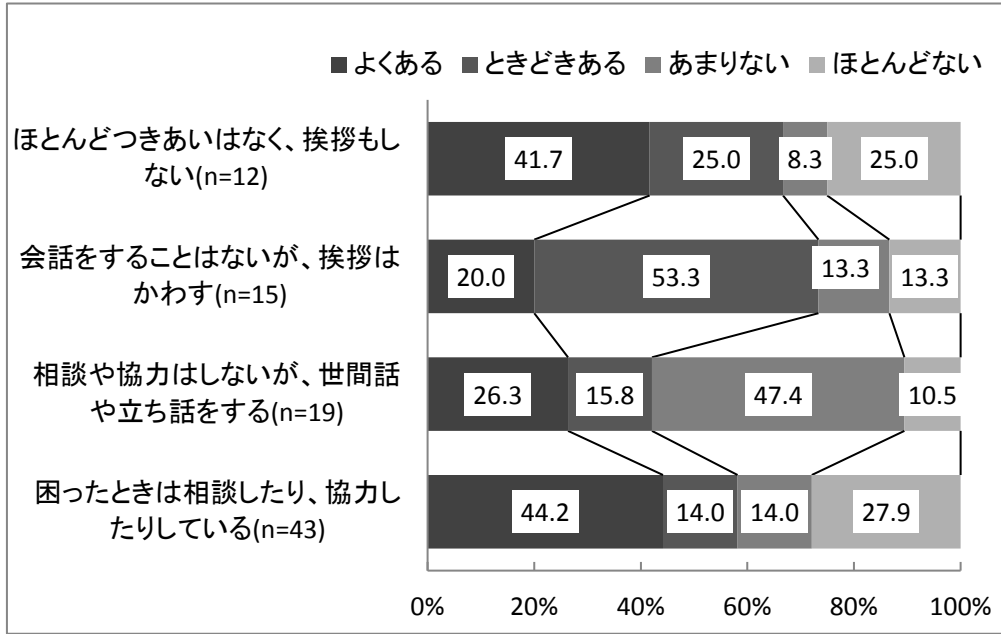
が 21.1%、「ほとんどない」が 22.5%であった。男性と同様に寂しさを感じている人と感じていない人の割合を比較すると、寂しさを感じている人は 56.3%で、感じていない人は 43.6%であった。寂しさを感じたことのある人の割合の男女差が 10.3 ポイントあり、このことから男性の方が一人暮らしの寂しさを感じている人の割合が高いことがわかる。

また、その他の差のあった質問項目を分析した結果、次の 2 つのことが見えてきた。

1 つ目は、近所づきあいの程度と一人暮らしの寂しさの関係である。「あなたは、ご近所の方とどの程度つきあっていますか」とたずねたところ、図表 4-23 のとおり、「困ったときは相談したり、協力したりしている」と回答した人の一人暮らしの寂しさを感じる頻度は、「よくある」44.2%、「ときどきある」14.0%、「あまりない」14.0%、「ほとんどない」27.9%となった。また、「相談や協力はしないが、世間話や立ち話をする」と回答した人の寂しさを感じる頻度は、「よくある」26.3%、「ときどきある」15.8%、「あまりない」47.4%、「ほとんどない」10.5%となった。同様に、「会話をすることはないが、挨拶はかわす」と回答した人の一人暮らしの寂しさを感じる頻度は、「よくある」20.2%、「ときどきある」53.3%、「あまりない」13.3%、「ほとんどない」13.3%となった。そして、「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」と回答した人の一人暮らしの寂しさを感じる頻度は、「よくある」41.7%、「ときどきある」25.0%、「あまりない」8.3%、「ほとんどない」25.0%となった。ここで、寂しさを感じる人(「よくある」と「ときどきある」の合計)と寂しさを感じない人(「あまりない」と「ほとんどない」の合計)の割合を比較してみる。

「困ったときは相談したり、協力したりしている」と回答した人で寂しさを感じる人は 58.2%、寂しさを感じない人は 41.9%となった。「相談や協力はしないが、世間話や立ち話をする」と回答した人で寂しさを感じる人は 42.1%、寂しさを感じない人は 57.9%となった。「会話をすることはないが、挨拶はかわす」と回答した人で寂しさを感じる人は 73.3%、寂しさを感じない人は 26.6%となった。「ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない」と回答した人で寂しさを感じる人は 66.7%、寂しさを感じない人は 33.3%となった。どの近所づ

図表 4-23 一人暮らしで寂しいと感じたこと—近所づきあいの程度との関係

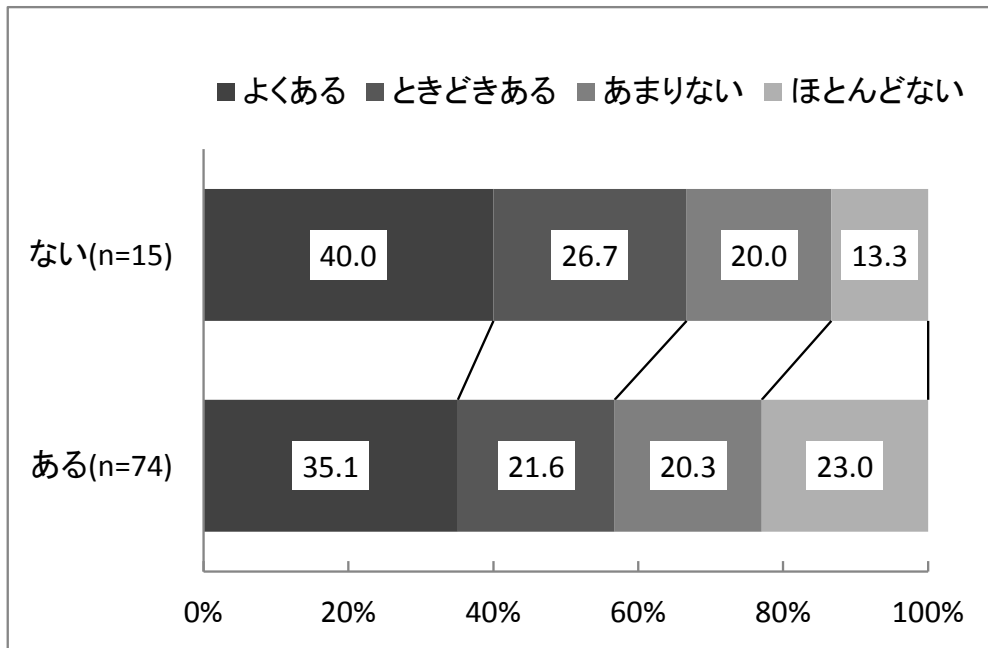


きあいの程度の選択肢を選んだ人も一定の寂しさは感じているが、「会話をすることはないが、挨拶はかわす」人の寂しさを感じる割合が73.3%と高くなっているように、近隣住民とあまり関わりをもたない人は寂しさを感じやすい傾向にあることがわかる。

2つ目は、趣味など、夢中になっていることの有無との関係である。

趣味など、夢中になっていることがある人に「一人暮らしで寂しいと感じたことはありますか」とたずねたところ、図表 4-24 のとおり、「よくある」35.1%、「ときどきある」

図表 4-24 一人暮らしで寂しいと感じたこと—趣味など夢中になっていることの有無との関係



21.6%、「あまりない」20.3%、「ほとんどない」23.0%であった。趣味など、夢中になっていることがない人では「よくある」40.0%、「ときどきある」26.7%、「あまりない」20.0%、「ほとんどない」13.3%であった。趣味をもつ人において、一人暮らしの孤独感を感じたことがある人(「よくある」と「ときどきある」の合計)の割合は56.6%であり、孤独感を感じたことがない人(「あまりない」と「ほとんどない」の合計)の割合は66.7%であることから、なんらかの趣味をもつ人は無趣味な人よりも一人暮らしの孤独感を感じにくいことがわかる。

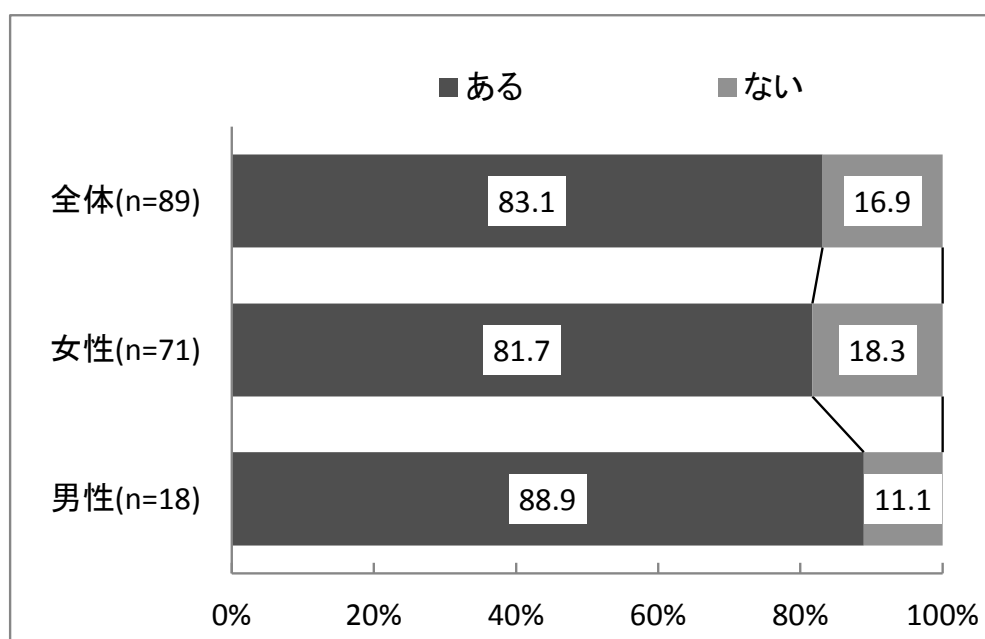
(2) 趣味など夢中になっていることの有無

一人暮らしの孤独感と趣味など夢中になっていることの有無との関係は、上述したとおりである。では、趣味など夢中になっていることは、性別による差があるだろうか。

図表4-25のとおり、「趣味など、夢中になっていることはありますか」とたずねたところ、全体では「ある」83.1%、「ない」16.9%という結果となった。およそ8割の人がなんらかの趣味など夢中になっていることをもっていることがわかる。

男性の結果を見ると、「ある」が88.9%で、「ない」が11.1%であり、女性の結果は「ある」が81.7%で、「ない」が18.3%であった。性別によってあまり差はみられず、全体の傾向からもわかるように、8割強の人が夢中になっていることがあるという結果となった。

図表 4-25 趣味など夢中になっていることの有無—性別



(3) 孤独死に対する不安

「孤独死に対する不安を感じたことはありますか」とたずねたところ、図表4-26のとおり、全体では「よくある」28.1%、「ときどきある」18.0%、「あまりない」19.1%、「ほとんどない」34.8%という結果であった。孤独死の不安がある人(「よくある」と「ときどきある」の合計)と孤独死の不安がない人(「あまりない」と「ほとんどない」の合計)の割合

を比較すると、孤独死の不安がある人は46.1%で、孤独死の不安がない人は53.9%であった。

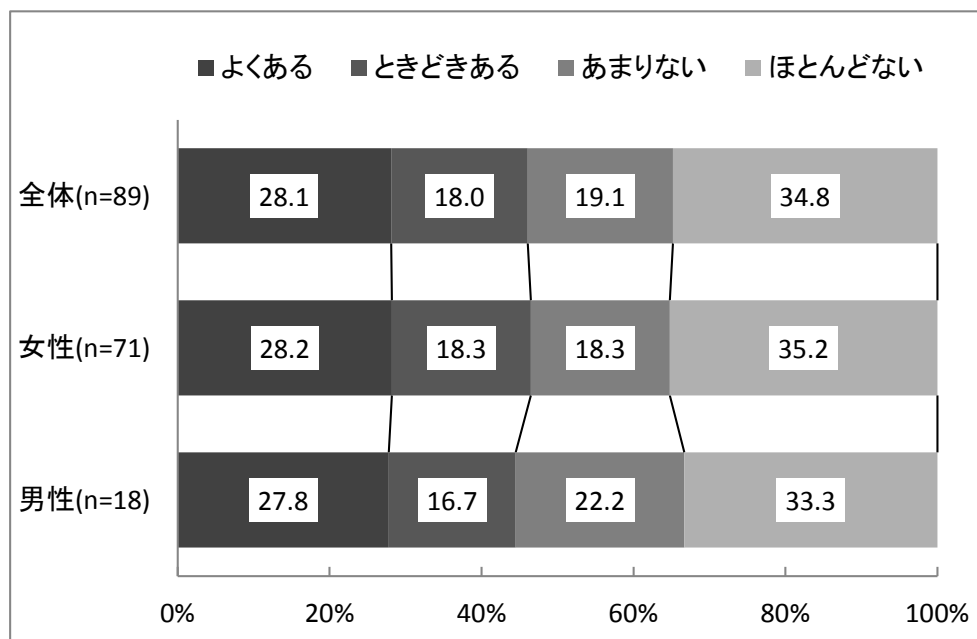
男性の結果を見ると、「よくある」が27.8%、「ときどきある」が16.7%、「あまりない」が22.2%、「ほとんどない」が33.3%であった。孤独死の不安がある人と孤独死の不安がない人の割合を比較すると、孤独死の不安がある人は44.5%で、不安がない人は55.5%であった。孤独死の不安を感じる人の割合は感じない人より、11ポイント低いという結果である。

女性の結果を見ると、「よくある」が28.2%、「ときどきある」が18.3%、「あまりない」が18.3%、「ほとんどない」が35.2%であった。同様に、孤独死の不安がある人と孤独死の不安がない人の割合を比較すると、孤独死の不安がある人は46.5%で、不安がない人は53.5%であった。一人暮らし高齢者の男女ともに孤独死の不安を5割弱の人が感じているというのは、看過できない問題であるといえる。

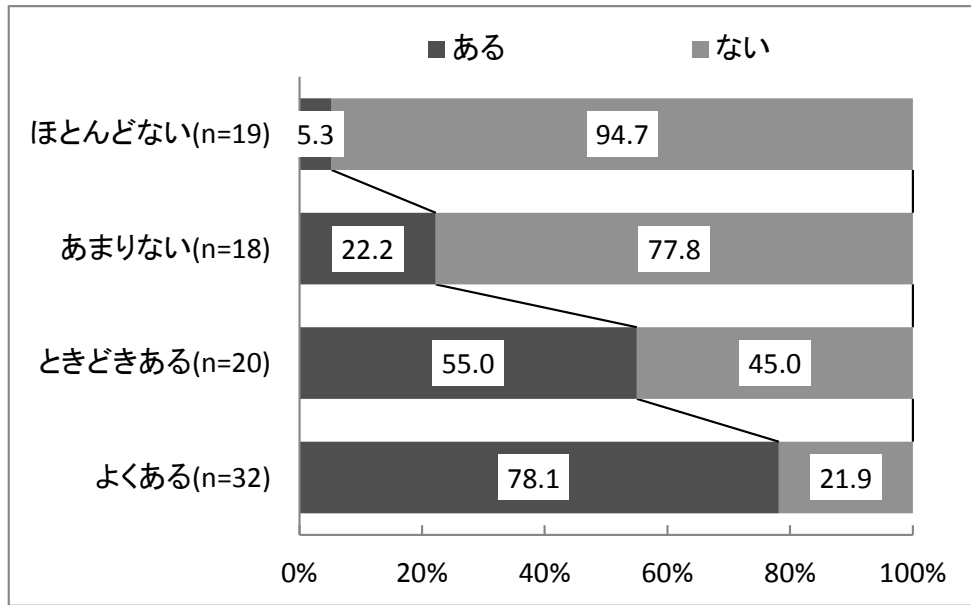
では、孤独死の不安には、どのような要因があるだろうか。分析した結果、浮かび上がってきたのは、一人暮らしの孤独感と孤独死の不安の関係性である。孤独死に対する不安を感じたことが「ある」人（「よくある」と「ときどきある」の合計）と、孤独死に対する不安を感じたことが「ない」人（「あまりない」と「ほとんどない」の合計）について、一人暮らしの孤独感の観点から分析する。

「一人暮らしで寂しいと感じたことはありますか」とたずねたところ、図表4-27のとおり、孤独死に対する不安を感じたことが「よくある」人の回答は、「ある」78.1%、「ない」21.9%、「ときどきある」人の回答は、「ある」55.0%、「ない」45.0%、「あまりない」人の回答は、「ある」22.2%、「ない」77.8%、「ほとんどない」人の回答は「ある」5.3%、「ない」94.7%であった。このことから、一人暮らしの寂しさを感じている人ほど、一人暮らしの寂しさを感じていない人よりも孤独死に対する不安を抱えていることがわかる。

図表 4-26 孤独死に対する不安を感じたこと—性別



図表 4-27 孤独死に対する不安を感じたこと
—一人暮らしで寂しいと感じたこととの関係



4.4.3 考察

(1) 日常生活

調査結果の分析を通じて、一人で暮らしていることを知っている人は男性では「近隣住民」、女性では「友人・知人」がそれぞれ最も割合が高いことがわかった。「別居の家族」や「親族」と回答した割合も少なくはなかったが、それらよりも「近隣住民」や「友人・知人」の割合が高かったのは、日常的に関わりを持っている存在であるからだと考えられる。

また、「友人・知人」が一人暮らしをしていることを知っているとして回答した一人暮らし高齢者は、「近隣住民」と助け合うことは大切だと考えている割合が高かった。一人暮らし高齢者が自立した生活を送るための要素の1つに「他者との良好な交流関係」があげられる。これは、友人との交流関係があることから、他者との良好な交流関係を築いているものだと考えられるからである(福島・清水 2004)。良好な交流関係の有無は、後に述べる一人暮らしの寂しさにも影響してくるもので、自立した日常生活を送るうえで重要な要素である。近隣住民が一人で暮らしていることを知っている一人暮らし高齢者は、近隣住民と密に関わっていることもわかった。この場合は友人という対象ではないが、このこともまた他者との良好な交流関係を築いているといえる。

さらに、女性の一人暮らし高齢者は、男性の一人暮らし高齢者よりも誰かが訪ねてくる頻度が高いということがわかった。訪問者を訪問される一人暮らし高齢者と同性の友人・知人と仮定した場合、次のようなことが言える。内閣府(2013a)の「平成22年度 高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査結果」によれば、友人・知人を訪問するために外出する人は女性に多く、その割合は女性が39.2%、男性は30.2%である。外出する人の全体の割合としては男性の方が高いが、外出の目的が散歩、または仕事といった行動が個人で完結するものである人が多かった。「男性は孤独によって寂しさを感じ、それを個人的に憂さ

晴しするという形をとるのに対して、女性は孤独によって対人的失望感を抱き、人間関係の再構築によってその失望感を補う」という行動パターンに当てはまっているものと考えられる（藤原ほか 1987）。このことから男性の方が人間関係が希薄であるといえ、今回の分析結果にも表れたのではないか。人間関係の希薄化を解決するために、地域では見守り活動の幅を広げていく必要があるだろう。長岡市では、本研究において取り組んだとおり、「シルバーささえ隊」などによる見守り活動を展開している。また、2011（平成 23）年度に「新聞販売店との連携による地域の見守り活動」として、地域住民の異変を察知した際に新聞販売店から民生委員へ連絡をとる等の連携をとり、見守り支援をするという取り組みも行っている。こうした取り組みを、自治体のみならず NPO や地域のボランティアによって広げ、住民主体のコミュニティ作りにつなげていくことが、一人暮らし高齢者の生活を安全・安心なものにするためのひとつの手段になると考える。

(2) 孤独死の不安

孤独死の不安について分析した結果、男性の一人暮らし高齢者で寂しさを感じる人は 66.6%、女性の一人暮らし高齢者で寂しさを感じる人は 56.3%であった。10.3 ポイントの差がありこれは性差といえると考えられる。この差が生じる要因はなんであろうか。

小谷みどりは、2009 年の内閣府の調査から、「頼れる人がいない」と回答した女性の一人暮らし高齢者は 9.3%だったのに対し、男性では 24.4%おり、男性の一人暮らし高齢者は社会的に孤立している人が多いとしている（小谷 2010）。また下開千春は、男性は女性に比べ家族・親族サポート（心配事や悩み事を聞いてくれる家族や親戚、留守の時やちょっとした用事を頼める家族や親戚など）及び友人サポート（心配事や悩み事を聞いてくれる友人、留守の時やちょっとした用事を頼める友人）が充実していないという（下開 2005）。このことから、頼れる人（特に家族・親族サポート）がいない人は男性に多く、そのことが孤独感に結びついているのではないかと考える。

近所づきあいについては、近隣住民との関わりが少ない人は関わりが多い人よりも寂しさを感じやすいことがわかった。特に「会話をすることはないが、挨拶はかわす」人の寂しさを感じる割合が 73.3%と高かった。高藤真弓は、タンストール（Tunstall 1967）の先行研究を引用して、「社会的なネットワークを持つ高齢者の場合には孤独不安を感じる人が少ないが、社会的に孤立している高齢者の多くが孤独不安を感じやすく、社会的孤立が孤独不安をもたらす」と指摘している（高藤 2010）。このことから、一人暮らし高齢者が感じる孤独感を取り除くためには、社会的なネットワークを形成することが必要である。

また、一人暮らしの寂しさを感じている人は、寂しさを感じていない人よりも孤独死に対する不安があることがわかった。一人暮らしの寂しさをよく感じる人で、孤独死に対する不安を感じたことがある人は 78.1%であるのに対し、一人暮らしの寂しさを感じていない人で孤独死に対する不安を感じたことがある人は 5.3%であった。やはり頼れる人が身近にいない一人暮らし高齢者は孤独感を感じやすい状況に置かれており、そのことが孤独死の不安へとつながっていくのではないかと考える。

趣味に関しては、夢中になっていることがある人は無趣味な人に比べ、一人暮らしの孤独感を感じにくいという結果であった。福島昌子・清水千代子によれば、趣味や楽しみがあることから社会参加を果たしているという認識が生まれるという（福島・清水 2004）。

自立した生活を送るための要素として考えられるため、このことが一人暮らしでも寂しさを感じていない1つの要因であるといえる。

孤独死に対する不安に関しては、男性の一人暮らし高齢者で孤独死に対する不安を感じている人の割合は44.5%で、女性の一人暮らし高齢者では46.5%となった。男女ともに5割弱にあたる人が不安を抱えていることがわかる。孤独死は近年社会問題として大きく取り上げられており、その中で今回の結果というのは、孤独死問題についての対策が急務であることを示している。今回調査した長岡地域では地方都市ということもあり、比較的友人・知人や近隣住民との交流が盛んで、趣味など夢中になっていることがあると回答した人が多かった。これは、孤独死に対する不安を少なくするために重要なことだと考えられる。しかし、少子高齢社会に拍車がかかる日本であるから、一人暮らし高齢者はこれからも増加し、孤独死のリスクも高まるであろう。当人が不安を感じていなくても、いつ何が起こるかわからない。不測の事態に備え、やはり地域の見守り活動を強化していくことが必要になってくるだろう。

5 実践活動の展開と成果

本年度は、昨年度のテーマを発展させ、社会調査によって不慮の事故の要因を究明するだけでなく、実践活動を通じ、ゼミ生が実際に地域や住民に働きかけることによってセーフコミュニティの認知度を高め、それにより、長岡地域を活性化させることを目的とした。その活動は以下のとおりである。「セーフコミュニティ」の普及啓発活動、「すこやか・ともしびまつり 2012」ボランティアスタッフ参加、「シルバーささえ隊」の普及啓発活動、「栖吉地区地域福祉懇談会」（地域福祉連携会議）参画である。以下、順に、4つの活動の概要を説明したうえで、本研究のテーマとのかかわりにおいて、セーフコミュニティの観点から活動の成果を検討する。

5.1 「セーフコミュニティ」の普及啓発活動

「セーフコミュニティ」の普及啓発活動の一環として、長岡大学のオープンキャンパスに参加した高校生を対象に「セーフコミュニティ」についてのプレゼンテーションを行った。当日は、オープンキャンパススタッフとしての役割も担った。そこで、活動の背景を簡単に説明したうえで、活動の概要と、その成果について、セーフコミュニティの観点から検討する。

5.1.1 活動の概要

(1) 活動の背景

昨年度の活動「セーフコミュニティへの出発」のなかで、今後の課題として、認知度の低い「セーフコミュニティ」活動について、普及啓発していく必要性があるのではないかという意見があった。そこで、セーフコミュニティについてより多くの人を知る機会を作る必要があると考え、オープンキャンパスの場を活用し、本講義を企画・開催することにした。

(2) 当日の活動の概要

開催当日の活動の概要は以下のとおりである。

日時：2012年6月16日（土）、7月22日（日）（長岡大学オープンキャンパスの開催日）

時間：AM11:00～PM3:00（リハーサル、準備を含む）

会場：長岡大学 226 教室

司会進行：菊池ゼミの4年生4名

参加者総数：延べ56名

プレゼンテーションの様子は写真 5-1 のとおりである。昨年度の成果発表会の内容を高校生にも理解しやすいように修正を加え、発表したのち、質疑応答の時間を設けた。また、「セーフコミュニティ」について知っているかと、こちらから尋ねたところ、知っている人が少なからずいた。

写真 5-1 「セーフコミュニティへの出発」発表の様子



5.1.2 セーフコミュニティの観点からの成果

セーフコミュニティについて多くの人に正しく理解してもらうことによって、地域住民を地域で支え事故を未然に防ぐことができるということを高校生に知ってもらうことができた。たとえ、わずかではあっても、こうした普及啓発の積み重ねが大切であるということをも今回の活動を通して確信できた。

5.2 「すこやか・ともしびまつり 2012」ボランティアスタッフ参加

はじめに、「すこやか・ともしびまつり」が長岡市で進めている「ともしび運動」の一環として開催されていることを確認したうえで、ボランティアスタッフとして参加した実践活動の概要と、その成果について、セーフコミュニティの観点から検討する。

5.2.1 活動の概要

(1) 「ともしび運動」

「ともしび運動」は、1988（昭和 63）年に旧長岡市においてスタートした。「これは、一人ひとりの持っている思いやりの心、助け合いの心をひとつの『ともしび』として持ち寄り、それを大きく育て、障害のある人もない人も、高齢者も若者も『ともに生きる仲間』として、誰もがお互いに支えあう社会づくりを目指すもので」、「旧長岡市では、この理念に基づき、福祉教育の推進、ふれあいと相互理解や地域活動の促進、ボランティアの育成等の施策を展開し、ノーマライゼーションの理念の普及に大きな成果をあげてきた」（長岡市福祉保健部福祉総務課 2009）。この運動の一環として、年に一度、「すこやか・ともしびまつり」を開催している。

(2) 「すこやか・ともしびまつり 2012」の概要と活動内容

「すこやか・ともしび祭り 2012」の概要とボランティア活動の内容は次のとおりである。

日時：2012年9月29日（土）、30日（日）

会場：ハイブ長岡、千秋が原ふるさとの森

ハイブ長岡

催し内容（両日）：福祉・健康に関する団体の作品展示、活動紹介

行政相談、福祉相談コーナー

健康チェックコーナー

元気アップコーナー、参加体験コーナー

ほほえみ作品展、喫茶コーナー

「すこやか・ともしびまつり」20年のあゆみ展示

（29日）：長岡赤十字奉仕団による炊き出し実演

太鼓、フラダンス、手話の歌などのステージ発表

（30日）：チャリティバザー

ふれあいコンサート

千秋が原ふるさとの森

催し内容（両日）：手作り品販売

フライングディスク体験

青空レストラン

スーパーボール、キャラクターすくい

ボランティア活動の内容：ステージ発表受付

会場設置

来場者車いす介助

フライングディスク体験アシスタント

キャラクターすくい補助

その他

5.2.2 セーフコミュニティの観点からの成果

「すこやか・ともしびまつり」の意義は、主催者である長岡市によれば、次のようにまとめられる。

- ①「ともに生きる」という意識の浸透を図るため、障害のある人もない人もともに集う「ふれあいの場」を提供する。
- ②障害のある人や障害のある子どもが日ごろ作成したさまざまな作品や練習に励んだ音楽等を市民に展示・発表する場として、「すこやか・ともしびまつり」や「ふれあいコンサート」等を開催し、障害のある人や障害のある子の創作意欲の向上と音楽文化活動への積極的な参加を促進する。
- ③障害のある青年たちと障害のない人が、集い、より豊かな生き方を探るために、学習、スポーツ・レクリエーション活動を通じた交流を推進する。

（長岡市福祉保健部福祉総務課 2009）

以上の観点から、昨年度の成果としても指摘したとおり、セーフコミュニティ活動を普

及啓発し、より多くの人に知ってもらうことで、障害の有無、年代に関係なく、より豊かな生活（＝不慮の事故の無い生活）を送ることができると学んだ。

5.3 「シルバーささえ隊」の普及啓発活動

長岡市長寿はつらつ課が取り組んでいる「シルバーささえ隊」の活動については、第1章で述べたとおりである。ネットワークの形成の重要性という点で、本研究の目的と重なるところがあり、「シルバーささえ隊」の普及啓発にも取り組んだ。活動の概要と、その成果について、セーフコミュニティの観点から検討する。

5.3.1 活動の概要

アンケートに協力していただいた調査対象者に、「シルバーささえ隊」の趣旨を説明し、長岡市が作成したリーフレットとステッカーを配布した。写真5-2、写真5-3は、そのときの様子である。

写真 5-2 活動の様子



写真 5-3 活動の様子



そして、図表 5-1 は「シルバーささえ隊」のリーフレットとステッカーの配布実績を示している。コミュニティセンターでは 380 部、高齢者センターでは 63 部、合計 443 部配布することができた。

図表 5-1 「シルバーささえ隊」リーフレットとステッカー配布実績

ID	コミュニティセンター	活動日	配布数	ID	高齢者センター	活動日	配布数
01	A	8月26日(日)	35	10	A	10月18日(木)	18
02	B	8月29日(水)	25	11	B	10月19日(金)	9
03	C	9月7日(金)	45	12	C	10月20日(土)	10
04	D	9月6・13日(木)	50			10月21日(日)	16
05	E	9月26日(水)	40			10月22日(月)	10
06	F	9月27日(木)	40	小計			63
07	G	10月3日(水)	65	合計			443
08	H	10月17日(水)	50				
09	I	10月18日(木)	30				
小計			380				

5.3.2 セーフコミュニティの観点からの成果

地域のネットワーク形成として長岡市が取り組んでいる「シルバーささえ隊」の活動について、少しでも多くの人に知ってもらうことによって、高齢者の安全で安心な生活を守ることにつながる。つまり、セーフコミュニティのまちづくりといえる。たとえば、高齢者を狙った消費者被害の防止、認知症高齢者を地域で見守り、介護者による虐待の防止や、一人暮らしの高齢者を地域で支え孤独死を未然に防ぐことなどである。こうした意義をもつ「シルバーささえ隊」の活動についてのリーフレットとステッカーを配布したことによって、地域福祉の推進に貢献することができた。

5.4 「栖吉地区地域福祉懇談会」(地域福祉連携会議) 参画

最後に、長岡大学の位置する栖吉地区で開催された地域懇談会への参画について、その成果を検討する。

5.4.1 活動の概要

(1) 「栖吉地区地域福祉懇談会」とは

栖吉地区地域福祉懇談会は、栖吉社会福祉協議会、栖吉地区福祉会、栖吉コミュニティセンター、栖吉連合町内会民生委員、地域包括支援センター職員、長岡市職員などで構成されている。2007年から毎年、テーマを決めて、地域の課題の話し合いを行ってきた。今年度のテーマは「栖吉で地域の茶の間はじめませんか？」であった。

(2) 当日の活動の概要

活動の概要は以下のとおりである。

日時：2012年11月30日（金）

時間：PM1：30～PM3：30

会場：悠久町公民館2階講堂

参加者：栖吉地区町内会長、栖吉地区老人会長、栖吉地区民生委員・児童委員、栖吉地区社会福祉協議会推進委員、地域包括支援センター職員、食生活改善推進委員会、長岡市役所健康課職員、長岡市長寿はつらつ課職員など33名
長岡大生（菊池ゼミ3年生）7名

懇談会内容：(1) 長岡市社会福祉協議会の事業説明

(2) 栖吉地区の現状について

(3) これまでの地域懇談会を振り返って

(4) 本年度のテーマ

「栖吉でお茶の間 はじめませんか？」

・先進地報告

新組地区 地域の茶の間「楽天茶屋」 佐藤光男様

(5) 意見交換

(6) 発表

当日は、長岡大生も4つのグループに分かれ意見交換に参加した。本年度のテーマに沿って「やってみたいこと」や「どうPRしたらいいか」について話し合いを進めた。

やってみたいこととして、幼稚園児や長岡大生といった幅広い世代との交流がしたいという意見があった。また、体操や運動といった健康に関するイベントをやってみたいといった意見が多数あげられた。

PRの方法としては、町内の回覧板や市政だよりを通してイベント情報を提供する。その他の意見として、イベント参加者を引っ張ってくれるリーダーや指導者がいると参加者が増えるのではないかという意見もあった。図表5-2は、当日の懇談会で話し合われた意見を一覧表にまとめたものである。また、図表5-3は、懇談会参加者に実施したアンケート調査の結果である。参考までに掲載した。

5.4.2 セーフコミュニティの観点からの成果

昨年度の栖吉地区地域懇談会で、今一度地域のなかで、民生委員などの役員だけでなく、世代を越えて互いに協力し合う必要があることがわかった。また、交流の場として茶話会や誰でも楽しめるイベントを開催し、いざという時に助け合える環境を育むことがセーフコミュニティへの第1歩に繋がることもわかった。それらを踏まえて、今年度の栖吉地区地域福祉懇談会では、地域の「お茶の間」の立ち上げを話し合うことになった。趣味や健康に関するイベントがあればぜひ参加したいという意見が多数あげられた。地域福祉の専門家の方々と地域の課題について話し合いをすることで、この地域の問題を知り、本研究の調査を通して得た経験をもとに解決策を提案する機会を得ることができた。

図表 5-2 平成 24 年度栖吉地区地域福祉懇談会 意見交換内容

大テーマ『栖吉で地域の茶の間はじめませんか?』

H24. 11. 30@悠久町公民館

グループ	テーマ	
	やってみたいことは?	どうPRしたらいい?
1	<ul style="list-style-type: none"> ・近くにあるから行ける…という人が集える場 ・軽い運動を入れた方がいい。栖吉いきいきクラブに行っているが、人数は増えている。運動は好まれる。 ・テーマがあった方がいい ・愚痴をこぼすだけの場にならないように ・参加者も何らかの役割を持つような運営がいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・町内回覧 ・どういうやり方でやるのかによって、PR方法も変わってくる
2	<ul style="list-style-type: none"> ・老人会の方々に企画会議 ・軽体操 ・季節の食材を使った調理など、長岡大学生との交流 ・習字、物づくり（手芸など） ・各種講義 ・幼稚園児との交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・口コミ ・他の既設クラブやグループへの呼びかけ ・回覧板 ・班長さんが自宅訪問し声かけ ・サロン名が違うだけで集まる人が違ってくる
3	<ul style="list-style-type: none"> ・人数が少なくても集まりたい（村や部落、町内など） ・他の世代との交流をしたい ・運動を取り入れる ・堅苦しいと集まりが悪いので、とにかくお茶のみをして顔を合わせる ・送迎があるといい ・地域の特色を活かし、書道や折り紙など ・集まる日を定例的にする ・まず集まって、何がやりたいのかを聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・すでに集まっている他の団体等に声かけする ・長岡大学に問い合わせ、興味のある学生を募る ・口コミ ・市政だより ・回覧板
4	<ul style="list-style-type: none"> ・健康に関すること ・体力、血圧測定 ・体操、カラオケ、紙芝居、合唱、フラダンス、紙飛行機 ・カラオケ ・昼ご飯を皆で作って皆で食べる ・参加者が楽しめること ・女性はマメ。男性は健康に良いこと、楽しそうなことに参加したいと思う 	<ul style="list-style-type: none"> ・引っ張ってくれるリーダーがいると集まりやすい ・教える人が必要。コミュセンを練習場にして、それを町内でやってみる ・ネーミングが大切

(出所) 主催者によるまとめ。

図表 5-3 平成 24 年度 栖吉地区 地域福祉懇談会 アンケート結果

○回収率					
回収枚数26枚／参加者数(スタッフ等除く)33名＝				78.8%	
1. 「お茶の間 はじめてみませんか？」の感想をお書きください。					
1-1 お茶の間があったら参加する					
回答	人数				
する	21				
しない	3				
無回答	2				
1-2 世話人をやってみてもよい					
回答	人数				
よい	12				
したくない	6				
無回答	8				
1-3 その他、感想					
<ul style="list-style-type: none"> ・ネーミング、リーダー育成が大事 ・世話人は各町内会の老人会長、副会長にやっていただきたい ・悠久町老人クラブでは月1回のお茶飲み会をやっています ・みなさん積極的な意見でびっくりしました ・参加してみたいと思った ・みなさん、たくさんの意見を出していて楽しかった 					
2. 今後、懇談会に要望することをお書きください。					
2-1 開催時期					
回答	人数				
このままでよい	21				
変えた方がよい	0				
無回答	5				
2-2 開催時間					
回答	人数				
このままでよい	19				
変えた方がよい	0				
無回答	7				
2-3 その他、要望					
<ul style="list-style-type: none"> ・長岡大学の学生が参加してくれて良かった ・参加者数が多く時間が足りないように感じた 					
3. その他、なんでも結構ですので、気づいたことをお書きください。					
<ul style="list-style-type: none"> ・とてもいい体験になった ・いろんな人たちがいてすばらしい、栖吉地区の活性化につながると思う ・意見交換の際、話に入っていけなかったので、一人ひとり発言する機会があればよいと思った ・体力測定の結果を聞かせてほしい ・グループ分けせず、全体で討論してもよいと思う 					

(出所) 主催者によるまとめ。一部修正。

6 セーフコミュニティの可能性

この1年間に取り組んだ実践活動を踏まえ、第3章で検証した調査の分析結果をもとに、セーフコミュニティの可能性を広げるための提案をまとめる。

6.1 提案——いのちを大切にすまちづくり

セーフコミュニティの可能性を広げるための提案は、いのちを大切にすまちづくりを推進するための提案ということでもある。本研究では、昨年度の研究を発展させ、高齢者のなかでも相対的にリスクが高いと考えられる「一人暮らし高齢者」を対象とした。以下、「家庭内の事故」、「外出時の事故」、「近所づきあいと地域交流」、「日常生活と孤独死の不安」として、4つの項目別の分析結果をもとに見ていく。そして、各項目において、①一般的に言えること、②男性が留意すべきこと、③女性が留意すべきこと、④一人暮らしゆえに特に留意すべきことの観点から、提案をまとめる。なお、今回の分析結果で特徴的だったことに焦点を絞ることにする。

6.1.1 家庭内の事故

今回の調査では、過去1年間に家庭内でけがをしたことがある人が、およそ6人に1人の割合であった。男女を比較してみると、女性は約2割の人が何かしらのけがをしている結果となった。一方、男性は調査対象者全員が過去1年間にけがをしたことがないという結果であった。このことから、女性の方が家庭内でけがをするリスクが高いことがわかる。

男女ともに、けがの不安を感じている場所は「階段」という回答が多かった。しかし、過去1年間にけがをしたことがある女性にけがをした場所を聞いてみると、「庭」でのけがが多い結果となった。これは普段から不安を感じている「階段」では、ゆっくりした動作を意識しているが、あまり不安に思っていない「庭」では、注意の意識が足りないためにけがにつながっているということが推察できる。

またその他に、女性は「食卓周辺」や「台所」でけがをする不安があると回答していたが、男性は全くなかった。一方、男性は「階段」や「玄関」での不安が女性よりも高い結果になった。長年の経験から台所仕事でのけがの不安を感じている女性に対して、現在の高齢男性は家事の経験が少ない世代であり、そのことをうかがわせる結果と言えそうである。一人暮らしでは、家事は不可欠であり、「庭」について述べたことと同様の注意が、男性は「食卓周辺」や「台所」に対して必要である。

次に、けがに対する不安の内容を見ると、男性は「つまずきやすい」、「踏み外す不安がある」といった転倒に対する不安が多かった。一方、女性の場合は「体の衰え」、「足が利かない」など、自分自身の身体機能に対する不安が目についた。さらに、女性はけがをした経験があるからなのか、男性よりもけがに対する不安の内容が具体的だった。けがをイメージしやすいということであろう。そんな不安からか、男女ともに家庭内でけがをしないように気をつけていることがある人は、6人のうち5人の割合でいることがわかった。具体的には、「手すりを使う」や「ゆっくりと行動する」という回答から、「ダンスやプールで体作りをしている」などといった、積極的に体を鍛えている人の回答もあった。自分の身体機能にあわせて、対処していることが考えられる。

以上のことから、一人暮らし高齢者の家庭内の事故を少しでも防ぐために、次のような提案をする。なお、【提案】のなかに「一人暮らし」とあるのは、本節の最初に述べたとおり、一人暮らしであることで特に留意する必要があることについて取り上げている。

【提案】

全般：油断しやすい「庭」に注意を払う。

身体機能に合わせた心がけをする。

男性：過信せず余裕をもった行動をする。

→転倒、踏み外しを防止できる。

家事経験の少ない「台所」「食卓周辺」に注意を払う。

女性：「台所」「食卓周辺」を整理整頓しておく。

一人暮らし：積極的なイベント参加や近隣住民との交流機会を増やす。

→他の人と一緒になって体を動かすことで、けがの予防と孤立化を防ぐことが可能となる。

いざという時の外部通報の環境整備をしておく。

6.1.2 外出時の事故

過去1年間に外出した際にけがをしたかことがあるかたずねたところ、けがをしたことがないと答えた人は、男性が9割弱、女性も9割を超えていた。したがって、男女ともに残りのおよそ1割の人がけがをしていたことになる。

次に、今後1年以内の外出時にけがをする不安をたずねた結果を見ると、男性では4割弱、女性では5割弱の人が不安を感じていた。女性の方が外出時のけがの不安を感じている割合が高いことがわかった。その不安の内容は次のようなものであった。男性では、自動車での交通事故や横断歩道での転倒、事故によって人に迷惑をかけたくないといった不安があった。一方女性は、男性と同様の不安のほか、自身の体調や雪道、暗い夜道にも不安を感じており、女性の方が不安を感じている割合が高だけでなく、状況も多様なことがわかる。

さらに、外出時に気をつけていることが「ある」と回答した割合を見ると、男性は8割強で、女性は9割弱であった。不安を感じている割合の若干高かった女性が、気をつけていることのある人の割合も高いことがわかった。気をつけていることの内容は次のとおりであった。男性は、身の回りをよく見ることや周囲の観察など、周囲に気を配っている人が多かった。女性はというと、夜間は自転車に乗らない、夕方以降は外出しない、といった自分自身でできることに気をつけている人が多かった。

このように男女ともに不安を抱えていることから、普段から対策をしていた。たとえば男性は、対向車や子ども、高齢者に気を配り、自転車に乗らないようにしている。また、女性では、時間に余裕を持って行動する、焦らずに行動するなどゆったりとした行動を心がけていた。今回の調査でけがをした人が1割程度であったという理由に、高齢者一人ひとりがしっかりと対策を考え、実行していたことがあげられるにちがいない。

しかし、こうした心がけをしている人がいても、およそ1割の人はけがをしていたことになる。こられのことを踏まえたうえで、外出時の事故に対する予防策の提案をする。

【提案】

全般：交通ルールを地域ぐるみで再確認（町内会・施設・学校等で）する。

男性：なるべく公共交通機関を利用した生活を心がける。

←公共交通機関を整備する。

女性：休憩を入れて移動する。

←道路（一定区間ごとに）や施設に休めるスペースを設ける。

→疲れからくる注意力や身体機能の低下の防止につながる。

一人暮らし：日頃からの対策を習慣づける。

仲間での外出機会を増やす。

→お互いに気づかいあいながら、孤立化対策にもなる。

6.1.3 近所づきあいと地域交流

近所づきあいの程度をたずねたところ、10人に1人の高齢者が、「ほとんど付き合いはなく、挨拶もしない」ということが判明した。男性ではおよそ9人に1人、女性ではおよそ7人に1人という割合であった。近所づきあいの程度について、男性に関していえば、6割弱が近所の人と相談や協力をしていないことがわかった。そこで、近所づきあいの大切さを見てみると、ほとんどの人が大切さを感じていた。男女別では、「あまりそう思わない」、「そう思わない」と近所づきあいを大切だと思わない人の割合は男性の方が若干高かった。また、昨年度は子ども（保護者）と高齢者（一人暮らしに絞らない）を対象に同様の調査を行ったが、「そう思わない」と回答した人は0人であった。このことから、一人暮らし高齢者では、近所づきあいは大切だと思わないと考える人がわずかながらいたことに注目すべきである。

次に、若者との地域交流を望んでいるかたずねた結果を見ると、半数以上の高齢者が若者との交流を望んでいることがわかった。しかし、交流を「望んでいない」と答えた人が2割弱いることも事実だ。「あまり望んでいない」と合わせると33.7%となり、およそ3人に1人は若者との交流を望んでいなかった。この質問で特徴的だったことは、男性ははっきりと意見が分かれたのに対して、女性はあまり明確な態度を示さなかった。若者との交流を望んでいると答えた高齢者の多くは、男女ともに世間話や情報提供を望んでいる。特に女性は相談を望んでいるという回答が多く、若者に困ったときに助けを求められる環境を望んでいた。また、望んでいないと答えた人の回答の大半が、ジェネレーションギャップにより話が合わないということだった。さらに男性からは、今の若者はダメだという、若者に対する厳しい回答もあった。

以上のことから、安心した地域での生活を可能にする近所づきあいと若者との地域交流について次のような提案をする。

【提案】

全般：地域のコミュニティ活動を活性化する。

→近所で挨拶をしない人がいなくなる。

世代間交流の機会を増やす。

→若者とのジェネレーションギャップを解消できる。

男性：コミュニティセンターでの会食など地域のイベントに積極的に参加する。

→近所で相談や協力のできる関係を築くきっかけをつくる。

女性：若者との話し合いの場や相談の機会を増やす。

←若者からの働きかけを促進する。

一人暮らし：信用しあえるような近隣住民との関係づくりの取り組みを増やす。

←地域のイベントを見直す。

6.1.4 日常生活と孤独死の不安

一人暮らし高齢者の現状（一人で暮らしていること）を知っている人は、男性が「近隣住民」、女性が「友人・知人」が最も多いことがわかった。また、「あなたはご近所の方と助け合うことは大切だとは思いませんか。それとも思いませんか」とたずねたところ、大切だと考える人の割合が「友人・知人」が一人で暮らしていることを知っていると回答した人は約93%で、知らない人は80%だった。このことから、友人や知人が一人で暮らしていると知っている人は、知らないという人よりも近所で助け合うことの大切さを実感していることがわかる。友人・知人との交流関係が、他者との交流関係に影響を与えていることが考えられた。また、「近隣住民」が知っているという人は、近所づきあいの程度も深いことが明らかになった。相談したり協力したりしている人の割合が、約6割にのぼった。

次に、一人暮らし高齢者宅への訪問頻度を見ると、一人暮らしをしている男性よりも女性の方が誰かが訪ねてくる回数が多いことがわかった。訪問者を同性と仮定して、次のようなことが考えられた。国の実施した全国調査や先行研究によれば、外出する人の全体の割合としては男性の方が多いが、男性は外出の目的が散歩などといった、行動が個人で完結するものが多いという。一方、女性は人間関係で孤独による失望感を埋めようとする傾向がある。そのため、友人・知人を訪問するために外出する人は、女性の方が多いことが推察できる。なお、4～11月に比べて、12～3月の降雪期間に、男女ともに訪問頻度が低くなっている。そして、「ほとんどない」という回答が4～11月で2割弱、12～3月で2割強（男性では3割弱）あったことを看過できない。

さらに一人暮らしで寂しさを感じるかをたずねたところ、男性は約67%、女性は約56%と、男性の方が寂しさを感じている人の割合が高いことがわかった。頼れる人がいないことが孤独感に関係しているのかもしれないことを指摘した。そこで、近所づきあいと寂しさの関係性を見てみると、近隣住民とあまり関わりをもたない人も寂しさを感じやすい傾向にあった。特に「会話をすることはないが、挨拶はかわす」と回答した人の寂しさを感じる割合がおおよそ73%と高かった。また、趣味など、夢中になっていることがあると答えた人は8割強いた。その8割強の人は無趣味な人よりも孤独感を感じにくいという結果になった。

最後に、孤独死について見てみると、男女ともに孤独死の不安を5割弱の人が感じていることがわかり、また、性別による大きな差はなかった。そして、一人暮らしの寂しさを感じている人は、感じていない人よりも孤独死に対する不安を抱いていることがわかった。

以上のことから、安全・安心な日常生活と、孤独死に対する不安を少なくし、予防につながるために次のような提案をする。

【提案】

全般：一人暮らしを知っている近隣住民を増やす。

←住民主体のコミュニティを作る。

訪問者が全くない人をなくす。

←NPO や地域のボランティアによる、見守り活動等の支援を得る。

趣味など夢中になれることをみつける。

←機会を提供する。

信頼できる人や安心できる場所などの連絡先を必ずもつ。

男性：近隣住民との関わりを増やす。

→寂しさを解消できる。

訪問者を増やす。

女性：地域で気軽に集まれるような場所に出向く。

←情報提供をする。

降雪期間の訪問者を増やす。

一人暮らし：社会的ネットワークを形成する。

←「シルバーささえ隊」等の啓発活動を若者が推進する。

寂しいと感じない生活環境に配慮する。

→孤独死の不安を軽減できる。

6.2 今後の課題

今回の調査では、長岡地域の高齢者との世代間交流も重要な目的として、各地域のコミュニティセンターおよび高齢者センターで対面による個別面接調査を実施した。また、コミュニティセンターでは、高齢者との会食も経験した。さらに、シルバーささえ隊の普及啓発活動も並行して進めた。個別面接調査にあたっては、調査員一人ひとりが高齢者とのコミュニケーションを図りながら、質の高いデータが収集できたのではないだろうか。しかしながら、今回の調査では、対象者が「一人暮らし」に限定されることから十分なサンプル数を確保することが難しかった。特に、男性の該当者が少なかったことによる分析上の限界があった。精度を高めるためには、追加調査が必要となる。もっとも、大量の郵送調査でも「一人暮らし」高齢者の回答を一定数回収することは簡単ではない。世代間交流を兼ねながら、個別面接によって89票を回収できたことは、それなりの意味があったと考える。

今後は、家庭内・外出時の不慮の事故の具体例をさらに調査することが求められる。また、一人暮らしをしている人が近所にいるという人たちを対象とした調査を企画・実施することも検討に値する。若者の高齢者に対する意識調査も必要になってくる。そして、長岡市でスタートした「シルバーささえ隊」など、地域のネットワーク形成のための見守り活動の普及啓発を行い、近隣住民の協力を促すことが今後の課題となってくる。

こうすることにより、住民主体のコミュニティが作られ、一人暮らし高齢者の生活が安全・安心なものになる。一步一步、いのちを大切にすまちづくりを実現していくことによって、セーフコミュニティの可能性は広がっていくものといえよう。

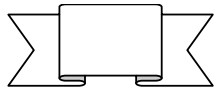
資料 調査票と単純集計結果

本研究で実施した「高齢者（一人暮らし）の不慮の事故等に関する実態調査」において用いた調査票（他記式）ならびに単純集計結果を記載した。本資料を読む際の留意点は次のとおりである。

(1) 単純集計結果の書式は、以下のとおりである。

- ・ 各質問の該当数を $n=$ の形で、質問文の末尾に記載した。
- ・ 集計結果は、回答選択肢のあとに％値で示してある。

(2) 問 1 と問 7 は、2 回以上上げがをしたという回答がなかったため、いずれも単数回答として集計している。



--	--	--	--	--	--	--	--

高齢者（一人暮らし）の不慮の事故等に関する実態調査

2012（平成 24）年 月

ご協力をお願い

日ごろから長岡大学の活動に対しまして、ご支援をいただきありがとうございます。

この度、菊池ゼミナールⅢ・Ⅳ（所属の学生は 4 年生 10 名、3 年生 7 名の 17 名）では、「セーフコミュニティの可能性——いのちを大切にすまちづくり」の取り組みのなかで、「高齢者（一人暮らし）の不慮の事故等に関する実態調査」を実施することになりました。

この調査の目的は、長岡地域の高齢者を対象として、家庭内や外出時の交通での不慮の事故によるけがや、一人暮らしによる事故などの要因をつきとめ、予防策を探ることにあります。ひいては、いのちを大切にすまちづくりを実現し、長岡地域の活性化につなげたいと考えています。調査の対象となられる方は、おおむね 65 歳以上の一人暮らしの方で長岡市にお住まいの方です。

なお、調査は無記名のうえ、お答えいただいた内容は数値に置き換えて処理いたしますので、個人が特定され不利益が及ぶようなことは決してございません。また、秘密保持には万全を期しておりますので、安心してありのままをお答えください。

お忙しいところを恐縮ですが、ご協力をよろしくお願いいたします。

本日、面接した調査員

長岡大学 経済経営学部 環境経済学科 _____ 年 _____
_____ 年 _____
_____ 年 _____

【調査についてのお問い合わせ先】

長岡大学 経済経営学部 教授 菊池いづみ
〒940-0828 新潟県長岡市御山町 80-8
電話：0258-39-1600（代表）
E-mail：kikuchi@nagaokauniv.ac.jp

※この調査は、平成 24 年度長岡大学「学生による地域活性化プログラム」活動の一環です。

◆家庭内の事故についておたずねします。※家庭内とは、敷地内の駐車場や庭も含みます。

問1【回答票1】あなたは、過去1年間に、家庭内でけがをして手当を受けたことがありますか。この中から1つだけお答えください。※入院後の通院は入院に含む。※2回以上のけがは、個々に。

n=89		
1	けがをして入院した	2.2
2	けがをして通院した	6.7
3	けがをしたが医療機関で手当はしなかった	6.7
4	けがをしたことはない	84.3

} 問1-1に進む。

問1-1【回答票2】けがをした場所はどこですか。この中から1つだけお答えください。

n=14					
1	玄関	14.3	2	居間	0.0
3	台所	14.3	4	食卓周辺	0.0
5	階段	14.3	6	寝室	0.0
7	トイレ	0.0	8	浴室	7.1
9	ベランダ・バルコニー	0.0	10	庭	35.7
11	駐車場	0.0	12	その他 ()	14.3

問2【回答票3】今後1年以内に、家庭内でけがをする不安をどの程度感じていますか。この中から1つだけお答えください。

n=89					
1	とても不安を感じている	18.0	2	やや不安を感じている	24.7
3	あまり不安は感じていない	10.1	4	ほとんど不安は感じていない	41.6
5	わからない	5.6			

※問2で「1 とても不安を感じている」・「2 やや不安を感じている」と回答した方に、

問3【回答票2】けがの不安を感じている場所はどこですか。この中からいくつでもあげてください。

n=38					
1	玄関	28.9	2	居間	15.8
3	台所	7.9	4	食卓周辺	5.3
5	階段	52.6	6	寝室	7.9
7	トイレ	10.5	8	浴室	31.6
9	ベランダ・バルコニー	10.5	10	庭	23.7
11	駐車場	10.5	12	その他 ()	15.8

問4 それは、どのような不安ですか。具体的にお聞かせください。※選択した場所ごとに。

{

問5 家庭内でけがをしないように、普段から気をつけていることはありますか。それともありませんか。

n=89	
1	ある 85.4
2	ない 14.6

※問5で「1 ある」と回答した方に

問6 それは、どのようなことですか。

{

◆外出時（交通）の事故についておたずねします。

問7【回答票1】あなたは、過去1年間に、外出した際にけが（転倒や交通事故など）をして手当を受けたことがありますか。この中から1つだけお答えください。※入院後の通院は、入院に含む。

	n=89		※2回以上のけがは、個々に。
1 けがをして入院した	3.4	}	問7-1に進む。
2 けがをして通院した	3.4		
3 けがをしたが医療機関で手当はしなかった	3.4		
4 けがをしたことはない	89.9		

問7-1 それは、どのようなけがでしたか。状況を簡単に教えてください。

{

問8【回答票3】今後1年以内に、外出した際にけが（転倒や交通事故など）をする不安をどの程度感じていますか。この中から1つだけお答えください。

			n=89
1 とても不安を感じている	12.4	2 やや不安を感じている	33.7
3 あまり不安は感じていない	15.7	4 ほとんど不安は感じていない	36.0
5 わからない	1.1	無回答	1.1

※問8で「1 とても不安を感じている」・「2 やや不安を感じている」と回答した方に、

問9 それは、どのような不安ですか。具体的にお聞かせください。

{

問10 外出の際にけが（転倒や交通事故など）をしないように、普段から気をつけていることはありますか。それともありませんか。

			n=89
1 ある	87.6	2 ない	12.4

※問10 で「1 ある」と回答した方に、

問11 それは、どのようなことですか。

[

◆ご近所づきあいと地域交流についておたずねします。

問12【回答票4】あなたは、ご近所の方との程度つきあっていますか。この中から最もあてはまるものを1つだけお答えください。

n=89

1 困ったときは相談したり、協力したりしている	48.3
2 相談や協力はしないが、世間話や立ち話をする	21.3
3 会話をすることはないが、挨拶はかわす	16.9
4 ほとんどつきあいはなく、挨拶もしない	13.5

問13【回答票5】あなたは、ご近所の方と助け合うことは大切だと思いますか。それともそうは思いませんか。この中から1つだけお答えください。

n=89

1 そう思う	83.1	2 まあそう思う	7.9	3 あまりそう思わない	4.5
4 そう思わない	3.4	5 わからない	1.1		

問14【回答票6】あなたは、若者（おおむね18歳～30歳未満の者）との地域交流を望んでいますか。

n=89

1 望んでいる	42.7	2 まあ望んでいる	16.9	3 あまり望んでいない	15.7
4 望んでいない	18.0	5 わからない	6.7		

※問14で「1 望んでいる」・「2 まあ望んでいる」と回答した方に、

問15 具体的にはどのようなことを望んでいますか。

[

※問14で「3 あまり望んでいない」・「4 望んでいない」と回答した方に、

問16 それはなぜですか。よろしければ、その理由をお聞かせください。

[

◆日常生活についておたずねします。

問 17【回答票 10】あなたが一人で暮らしていることを知っている人がいますか。この中からあてはまるものをいくつでもあげてください。

n=89

1 別居の家族	75.3	2 親族	80.9	3 友人・知人	83.1
4 近隣住民	79.8	5 医療・福祉関係者	65.2	6 職場の人たち	11.2
7 その他 ()	1.1				

問 18 (1)【回答票 11】誰かがあなたを訪ねてくることがありますか。4月から11月までについて、この中から1つだけお答えください。

n=89

1 ほぼ毎日	20.2	2 週に3～5日	13.5	3 週に1～2日	30.3
4 月に1～3日	18.0	5 ほとんどない	15.7	無回答	2.2

(2)【回答票 11】同じように、12月から3月までについて、この中から1つだけお答えください。

n=89

1 ほぼ毎日	18.0	2 週に3～5日	13.5	3 週に1～2日	29.2
4 月に1～3日	15.7	5 ほとんどない	21.3	無回答	2.2

問 19【回答票 7】一人暮らしで寂しいと感じたことはありますか。

n=89

1 よくある	36.0	2 ときどきある	22.5	3 あまりない	20.2
4 ほとんどない	21.3	5 わからない	0.0		

問 20 趣味など、夢中になっていることはありますか。

n=89

1 ある	83.1	2 ない	16.9
------	------	------	------

問 21【回答票 7】孤独死に対する不安を感じたことはありますか。

n=89

1 よくある	28.1	2 ときどきある	18.0	3 あまりない	19.1
4 ほとんどない	34.8	5 わからない	0.0		

◆あなたのことについておたずねします。

n=89

F1 ※性別

1 男性	20.2	2 女性	79.8
------	------	------	------

F2【回答票 12】あなたの年齢は満でいくつですか。

n=89

1 59歳以下	0.0	2 60～64歳	2.2	3 65～69歳	10.1	4 70～74歳	13.5
5 75～79歳	25.8	6 80～84歳	28.1	7 85歳以上	20.2		

F3 【回答票 13】 (1) あなたのお住まいの地域は、このように分けた場合どれにあたりますか。

n=89

1	旧長岡市	98.9	2	中之島地域	0.0	3	越路地域	0.0	4	三島地域	1.1
5	山古志地域	0.0	6	小国地域	0.0	7	和島地域	0.0	8	寺泊地域	0.0
9	栃尾地域	0.0	10	与板地域	0.0	11	川口地域	0.0			

※「1 旧長岡市」と回答した方に、

【回答票 14】 (2) あなたのお住まいの地区は、このように分けた場合どれにあたりますか。

n=88

1	川東中央部 (千手・四郎丸・豊田・阪之上・表町・中島・神田・川崎・川崎東・新町)	65.9
2	川東北部 (富曾亀・新組・黒条・山本)	2.3
3	川東東部 (山通・栖吉)	5.7
4	川東南部 (宮内・十日町・六日市・太田)	3.4
5	川西北部 (下川西・上川西・福戸・王寺川)	0.0
6	川西南部 (大島・希望が丘・日越・深才)	18.2
7	川西西部 (関原・宮本・大積・青葉台)	4.5

F4 【回答票 15】 あなたのお住まいは、このように分けた場合どれにあたりますか。

n=89

1	一戸建て (持ち家・民間の賃貸)	73.0	2	集合住宅 (持ち家・民間の賃貸)	22.5
3	公営住宅	3.4	4	給与住宅 (社宅・公務員住宅など)	0.0
5	その他 ()	0.0		無回答	1.1

F5 ※質問はしない。あなたのご家族は、このように分けた場合どれにあたりますか。

n=89

1	単身世帯 (一人暮らし)	100	2	夫婦2人世帯 (あなたと配偶者)	0.0
3	2世代世帯 (子との同居)	0.0	4	2世代世帯 (親との同居)	0.0
5	3世代世帯	0.0	6	その他の世帯 ()	0.0

F6 【回答票 17】 あなたのお仕事は、このように分けた場合どれにあたりますか。

n=89

1	雇用者 (役員を含む)	3.4	2	自営業主 (家庭内職者を含む)	1.1
3	家族従事者	0.0	4	無職	86.5
				無回答	9.0

F7 【回答票 18】 あなたの現在の健康状態は、この中のどれにあたりますか。

n=89

1	良い	27.0	2	まあ良い	33.7	3	ふつう	25.8
4	あまり良くない	11.2	5	良くない	2.2			

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

参考文献

- 厚木市、2013、「厚木市におけるセーフコミュニティ（SC）の取組み経緯！」
（<http://www.city.atsugi.kanagawa.jp/shiminbenri/anshinanzen/safecom/oshirase/p002708.html>, 2013.1）。
- NHK「無縁社会プロジェクト」取材班、2010、『無縁社会』文藝春秋。
- 亀岡市、2007、「セーフコミュニティ認証申請書」
（<http://www.city.kameoka.kyoto.jp/safecom/shise/shisaku/safe-community/ayumi/member/documents/shinseisyo.pdf>, 2011）。
- 亀岡市、2011a、「かめおかヘルスキャンパス」
（<http://www.city.kameoka.kyoto.jp/ikiiki/kurashi/kenko/kenko/kehatsu/health.html>, 2011）。
- 亀岡市、2011b、「かめおかメール情報配信サービス」
（<http://www.ikkr.jp/city.kameoka/>, 2011）。
- 亀岡市、2013、「セーフコミュニティ」
（<http://www.city.kameoka.kyoto.jp/shise/shisaku/safe-community/index.html>, 2013.1）。
- 菊池いづみゼミ、2012、「セーフコミュニティへの出発——いのちを大切にすまちづくり『学生による地域活性化プログラム 平成23年度 活動報告書』長岡大学地域活性化プログラム推進室。
- 京都府、2011、「安心・安全のまちづくり——セーフコミュニティ 京都府・亀岡市」
（<http://www.pref.kyoto.jp/safecom/resources/1299116142933.pdf>, 2011）。
- 厚生労働省、2012、「平成22年 国民生活基礎調査の概況」
- 小谷みどり、2010、「孤立する男性独居高齢者」『ライフデザインレポート』（196）：42-46
（<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/watching/wt1008.pdf>, 2013.1.8）。
- 小諸市、2013a、「認証までの流れ」
（<http://www.city.komoro.nagano.jp/www/contents/1268897688347/index.html>, 2013.1）。
- 小諸市、2013b、「小諸市のセーフコミュニティの取り組み状況」
（<http://www.city.komoro.nagano.jp/www/contents/1331630979001/index.html>, 2013.1）。
- 小諸市、2013c、「かわら版『みんなで目指す セーフコミュニティこもろ』」
（<http://www.city.komoro.nagano.jp/www/contents/1277180110277/index.html>, 2013.1）。
- 下開千春、2005、「高齢単身者の孤独の要因と対処資源」『ライフデザインレポート』（169）：4-15
（<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/mr0509.pdf>, 2013.1.8）。
- 社会福祉協議会、2012、『月間福祉（2012年9月号）』第96巻第11号。
- 白石陽子、2007a、「『セーフコミュニティ』前史——スウェーデンにおける『安全なまちづくり活動』モデルの形成」『政策科学』14（2）：103-13
（http://www.ps.ritsumeai.ac.jp/assoc/policy_science/142/14207siraisi.pdf, 2011）。

白石陽子、2007b、「WHO「セーフコミュニティ」モデルの普及に関する研究——「予防」に重点を置いた安全なまちづくり活動が世界的に普及する要因に関する考察」『政策科学』15(1)：27-40

(http://www.ps.ritsumeai.ac.jp/assoc/policy_science/151/15103siraisi.pdf, 2011)。

高藤真弓、2010、「高齢期の孤独・孤立の要因分析とその解消にむけたソーシャルワークの接近方法」『日本福祉大学社会福祉論集』(122)：53-78

(<http://research.n-fukushi.ac.jp/ps/research/usr/db/pdfs/00068-00004.pdf>, 2013.1.8)。

竹中星郎、2000、『高齢者の孤独と豊かさ』日本放送出版協会。

田中克典・伊東真紀・下野伸明、2013、「地域コミュニティ再生による安全・安心な地域づくり(平成24年2月29日岐阜県政策委員会)」

(<http://www.pref.gifu.lg.jp/kensei-unei/seisaku-plan/choki-koso/kenkyukai/index.dat/report240229.pdf>, 2013.1)。

豊島区、2013a、「みんなでつくるセーフコミュニティとしま」

(<http://www.city.toshima.lg.jp/kusei/17966/index.html>, 2013.1)。

豊島区、2013b、「としま安全・安心フェスタ2011(平成23年6月)」

(<http://www.city.toshima.lg.jp/kusei/17966/022579.html>, 2013.1)。

豊島区、2013c、「セーフコミュニティ認証申請書(平成23年12月)」

(<http://www.city.toshima.lg.jp/kusei/17966/026525.html>, 2013.1)。

栃本一三郎、2007、『高齢期を支える社会福祉システム』放送大学教育振興会。

十和田市、2011、「セーフコミュニティ」

(<http://www.city.towada.lg.jp/machidukuri/safecommunity/top.htm>, 2011)。

内閣府、2012、「平成24年版高齢社会白書」

(http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/gaiyou/24pdf_indexg.html, 2012.12.26)。

内閣府、2013a、「平成22年度 高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査結果」

(<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/sougou/zentai/index.html>, 2013.1.8)。

内閣府、2013b、「セーフコミュニティの実現に向け～信頼・協働・元気～ 神奈川県厚木市のセーフコミュニティ」

(http://www.cao.go.jp/consumer/kabusoshiki/anzen/doc/016_120808_shiryoku2.pdf, 2013.1)。

中沢卓実・結城康博編、2012、『孤独死を防ぐ——支援の実際と政策の動向』ミネルヴァ書房。

長岡市、2012a、「長岡市統計年鑑(平成23年版)」

(http://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/toukei/h23_nenkan/, 2012.12)。

長岡市、2012b、「PDF版長岡市」

(http://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/kakusyu/koureisya/k-f-kekka_02.pdf, 2012.12.30)。

長岡市福祉保健部福祉総務課、2009、『長岡市障害者基本計画・障害福祉計画 第2期(平成21年度～平成23年度)』長岡市。

長岡市福祉保健部福祉総務課、2012、『第5期長岡市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画（平成24年度～平成26年度）』。

(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/1-2.html>,2012.12.25)。

長岡新聞、2012、「19歳学生のデザインを起用——『シルバーささえ隊』発足」

(<http://www.m-activation.net/kiji25.html>,2013.1.4)。

長岡大学地域研究センター、2005、「長岡市高齢者等生活実態調査結果報告書」長岡市福祉保健部福祉総務課。

新潟県、2011、「平成23年9月『新潟県高齢者見守り強化月間』等における主な取組事例」

(http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Simple/107/971/ex1,0.pdf, 2013.1.8)

新潟県、2012、「新たに始まる見守り・支え合い活動一覧(平成24年1月16日時点)（新潟県地域支え合い体制づくり事業・一次募集事業分）」

([http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/44/762/jigyou\(H24.1.16\).pdf](http://www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/44/762/jigyou(H24.1.16).pdf),2013.1.2)。

ニコラス A クリスタキス・ジェイムズ H ファウラー(鬼澤 忍翻訳)、2010、『つながり 社会的ネットワークの驚くべき力』講談社。

日本自治体労働組合総連合地方自治問題研究機構、2001、『地域介護調査からみた高齢者の実像——「高齢者介護に関する住民生活調査」報告書』萌文社。

日本セーフコミュニティ推進機構、2013、「日本のセーフコミュニティ」

(http://www.jisc-ascsc.jp/sc_japan.html, 2013.1)。

平岡公一・杉野昭博・所道彦・鎮目真人、2011、『社会福祉学』有斐閣。

福島昌子・清水千代子、2004、「一人暮らし高齢者が自立できる要素」『群馬県立医療短期大学紀要』11:47-55

(http://ci.nii.ac.jp/els/110004090142.pdf?id=ART0006354846&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1357647981&cp=, 2013.1.8)。

藤原武弘・来嶋和美・神山貴弥・黒川正流、1987、「独居老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究」『広島大学総合科学部紀要Ⅲ』11:43-52

(http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AN00116614/StudInfoBehavSci_11_43.pdf, 2013.1.8)。

水野映子、2011、「高齢期の外出に対する不安と意向——60・70代生活者アンケートにみる外出の現状と将来」『ライフデザインレポート』(199):40-47

(<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/note/notes1107a.pdf>, 2013.1)。

箕輪町、2013、「セーフコミュニティ活動状況」

(<http://www1.town.minowa.nagano.jp/Contents/ePage.asp?CONTENTNO=1046&PNO=90>, 2013.1)。

宮木由貴子、2010、「地域コミュニティと近所づきあいの現状」『ライフデザインレポート』(195):47-47

(<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/watching/wt1006.pdf>, 2013.1)。

謝辞

本研究において、ご多忙中にもかかわらず、アンケート調査を快く引き受けていただいた長岡地域の皆様、地域活性化プログラム事務職員の方々をはじめ、この研究を支援してくださった多くの関係者の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。特に、アンケートにご協力いただいた高齢者の皆様には、貴重なお時間を割いていただき本当にありがとうございました。

前回の調査を踏まえ、今年度の研究は一人暮らしの高齢者の方に絞ることにしました。コミュニティセンターや高齢者センターに出向き、調査を行いました。その際、アドバイザーである長岡市長寿はつらつ課の若月恵子様には日程調整を行っていただきました。また、伊野善貴様にも貴重なアドバイスをいただきました。ご公務のお忙しい中ありがとうございました。

センターの皆様はどなたも笑顔で対応してくださり、調査を進める手助けもしていただきました。中には、一人暮らし高齢者の方がなかなか見つからず、回収票が0だったコミュニティセンターもありました。しかし、ゼミ生全員で手分けして調査をし、時には、同じ場所に何度か足を運びました。結果は89票という統計的調査としては十分とはいえない数でしたが、個別面接によって、一人暮らし高齢者の方の貴重な意見をうかがうことができ、ゼミ生それぞれの考え方も変わりました。集計も大きな問題もなく終わることができ、成果をあげることができました。

こうして最後まで研究をやり遂げることができたのは、研究に取り掛かるに当たっての土台を作ってくださり、また、わかりやすい説明とゼミ生全員の意見を取り入れてくれた、菊池いづみ先生のおかげです。特に集計と分析では、毎回丁寧に説明してくださり、3年生もスムーズに作業を進めることができました。クロス集計でも、票の数が少ないなかで、差が大きく出そうなものについて参考資料を作ってくださいました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、仕事をきちんとやり遂げてくれた3年生に感謝します。休みの日の調査にも関わらず誰一人として休むことなく協力してくれました。話し合いの中では、積極的に意見をだしてくれました。3年生の協力があって、ここまでたどり着くことができたと思います。本当にありがとうございました。

